

532

105

i 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始



35.12.22

森永太一郎著



南船北馬

(海外發展のしるべ)

東京 實業之日本社發行

大正
14. 4. 8

子安

大正十四年

森永





大正十二年

南洋支那の

旅行記録

南洋支那の

種々

種々

種々

大正十二年

森永

大正十二年

南洋東夏の

旅行を終つて

南洋東夏の

種々時いた

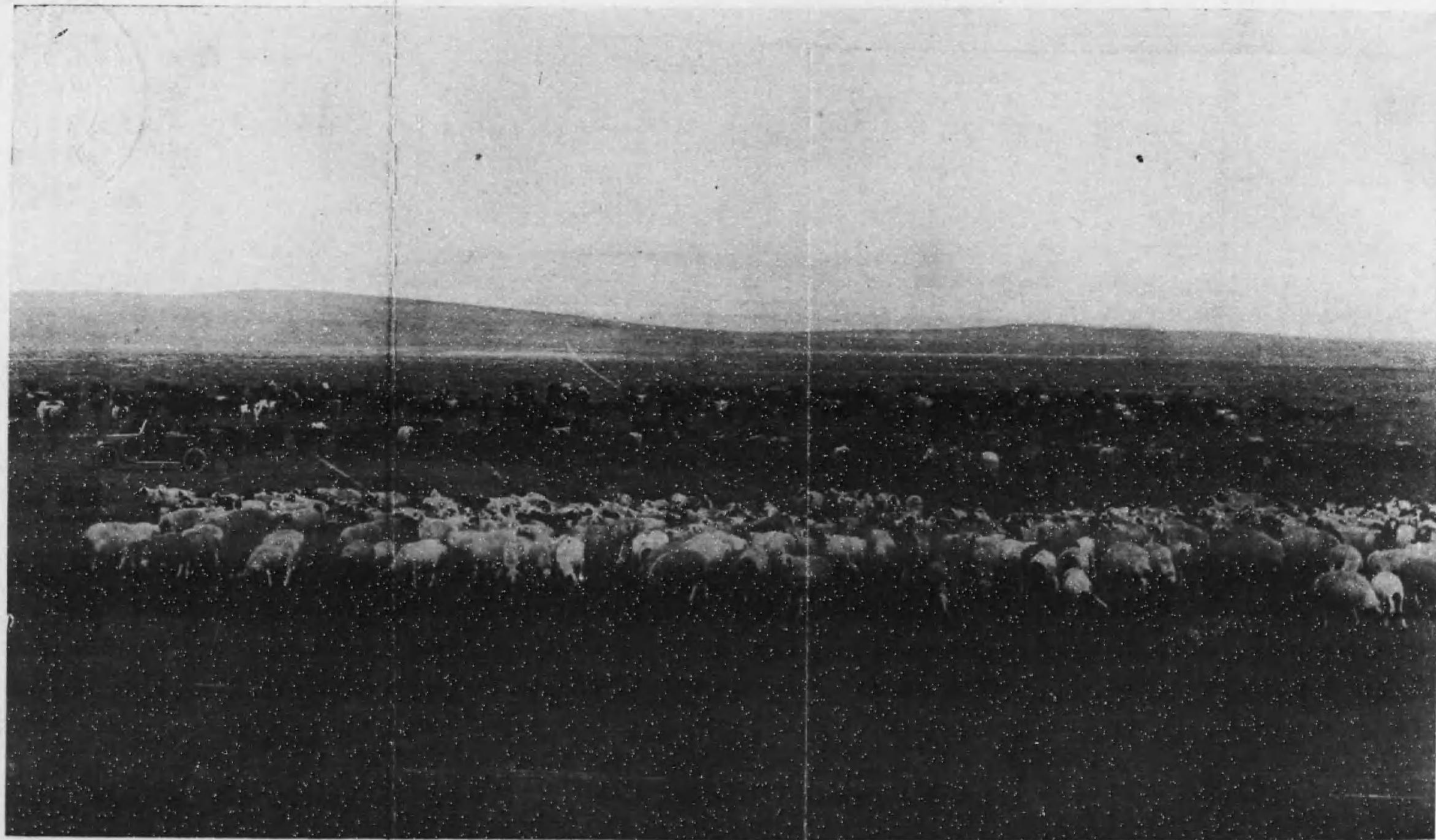
聴て収獲

千餘枚

大正十二年

森永





蒙古に於ける放牧の壯觀（白きは羊、黒きは牛）

532-105

序言

大正三年の夏であつた。蘭領ジャバのスマランに博覧會があつて、我社も之に出品したので、此機會を幸ひに販路を開拓すべき目的で、同地に渡航したのであつた。それから丁度滿九年目で、一昨年再び視察かたぐい販路擴張の爲め、印度から南洋にかけて巡遊したのである。前回は一人旅であつたから、萬事手廻りかねたが、今度は我社の森外國販賣課主任を連れてゐたので、何かと便利であつた。殊に三井物産各支店の好意で種々便宜を與へられたのと、ジャバに於ては南洋商會の堤林社長が東道せられた爲め、誠に樂な旅行をする事が出來た。

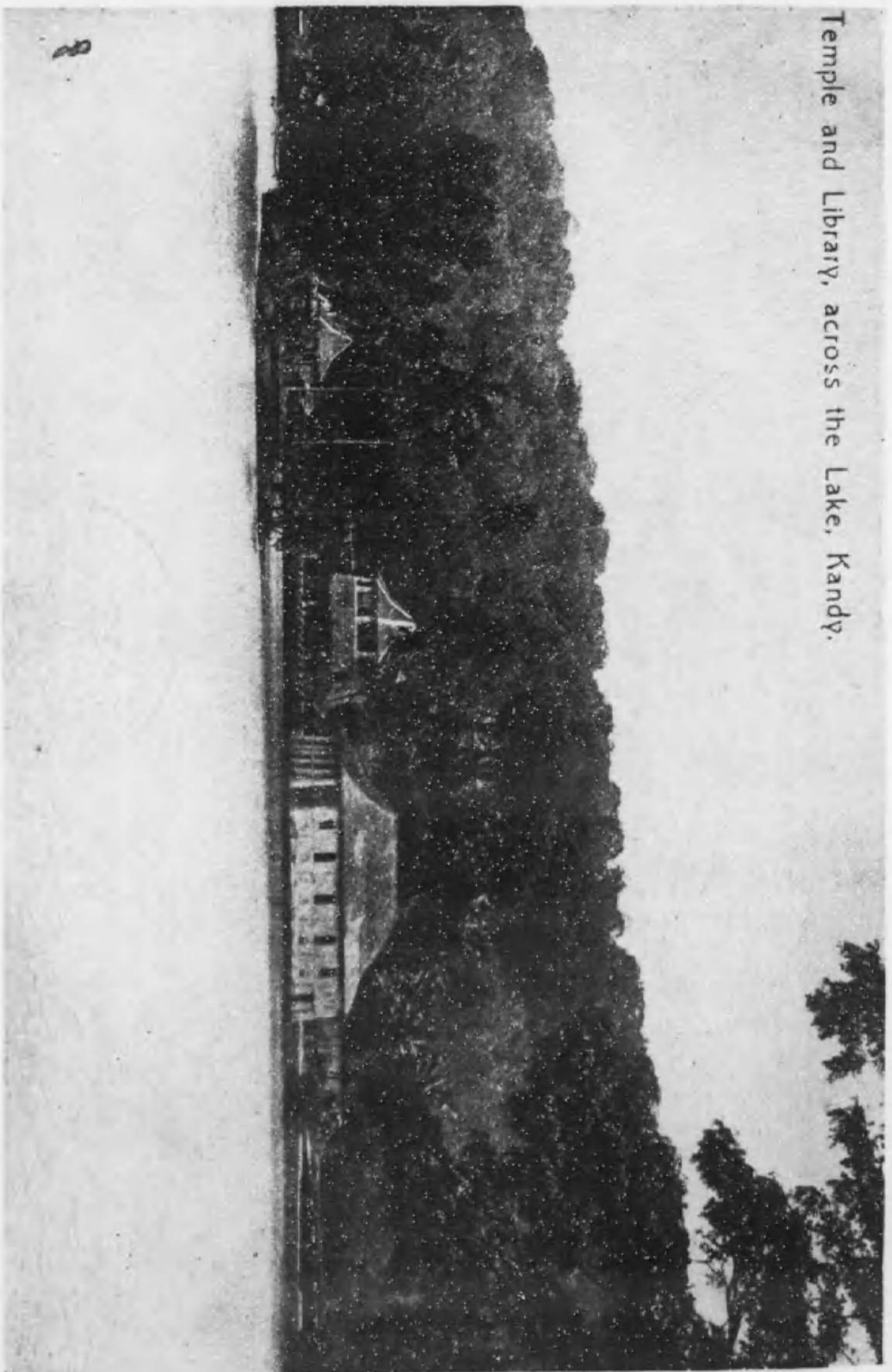
さて視察の結果であるが、不肖は日本の商品が南洋、印度方面に於て賣れない事はないと信ずる。勿論戦後は英、濠を初めとして、他の歐米人も東洋諸國に商權を擴張すべく互ひに鎬を削つて居るから、日本人も彼等より以上に奮闘努力せねばならぬが、其覺悟を以て進めば販路の開拓は決して不可能でない。現に我社の如き、南洋、印度方面よりの注文

が日増しに輻輳するので、工場の擴張、機械の増設に全力を盡して居るのである。否、獨り我社の菓子ばかりでない。他の商品も亦努力すれば必ず販路の開拓される見込があるから、總ての商工業者が更に一段の勇氣を鼓して、南洋、印度方面に向つて發展せられん事を希望する。

それで、官邊の人々や學者に依つて著はされた南洋、印度に関する書籍は既に多數出版せられて居るが、海外輸出に従事して居る者が實地に經驗した事を誌すのは、販路開拓の参考となり、又彼の地に發展すべく渡航せらるゝ人々の榮ともならうと考へて、不肖淺學を省す、此書を著はしたのである。

大正十四年一月七日

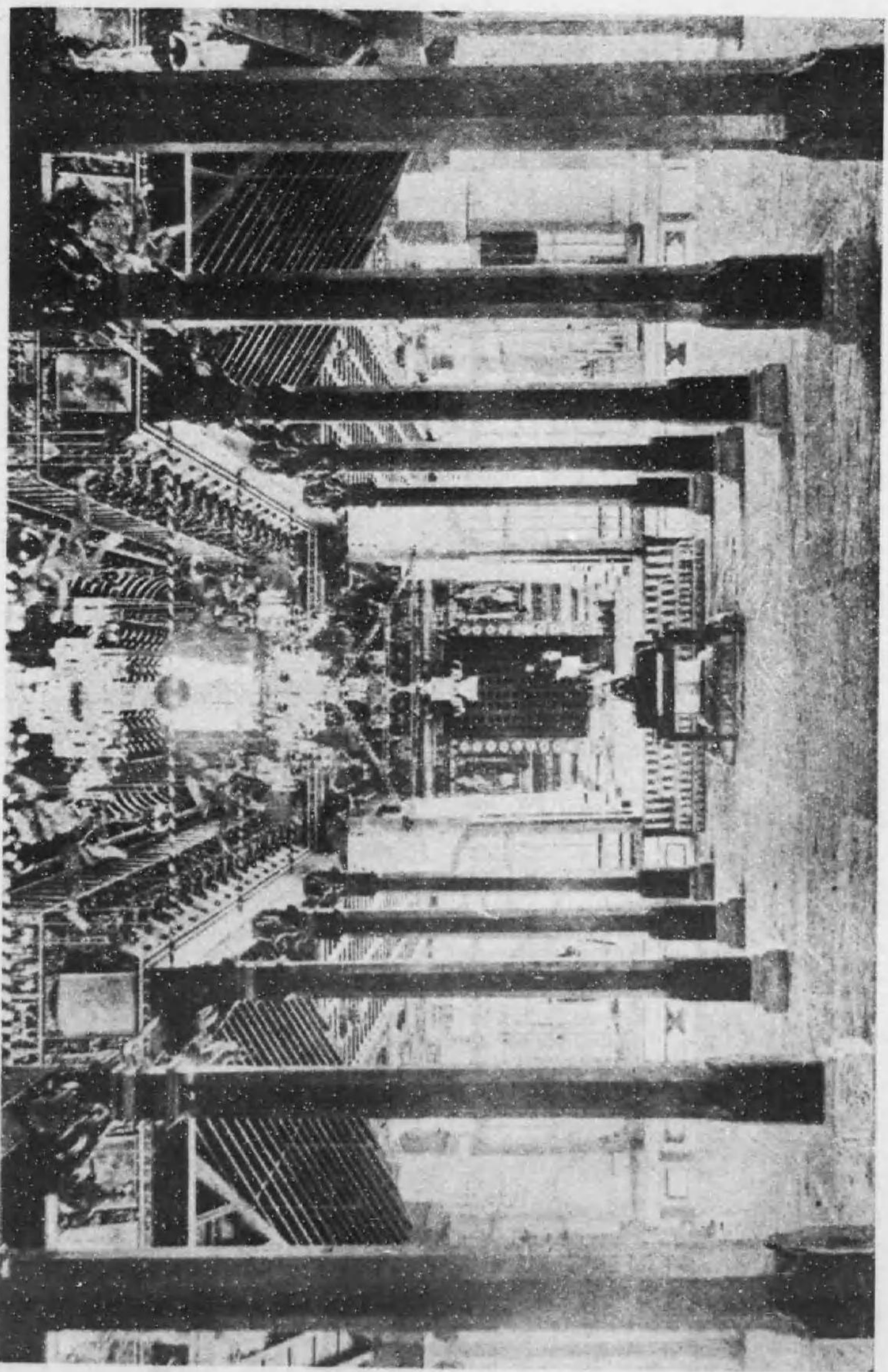
森永太一郎識



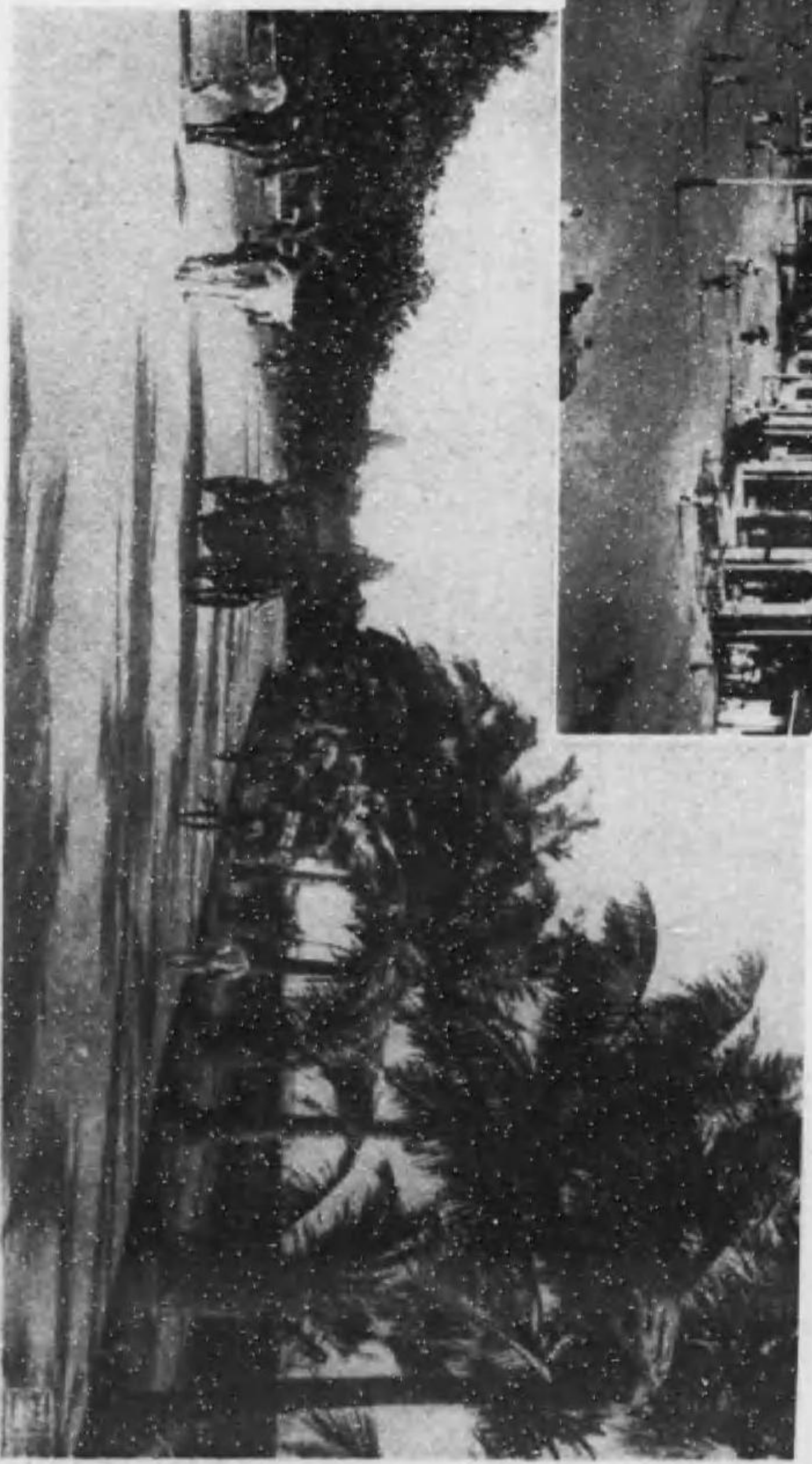
Temple and Library, across the Lake, Kandy.

キヤンデー湖の風光

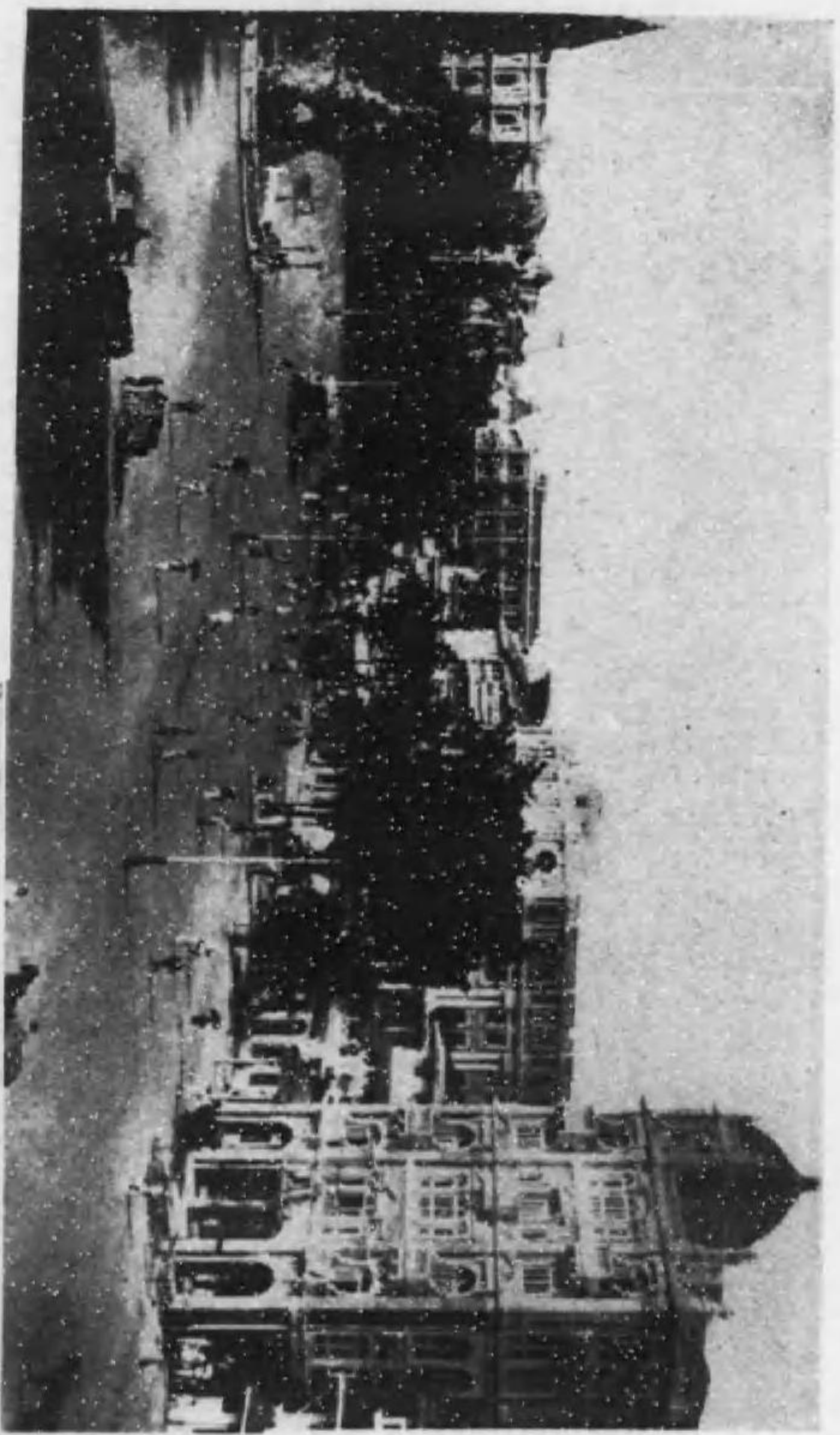
ヒンズー教の殿堂



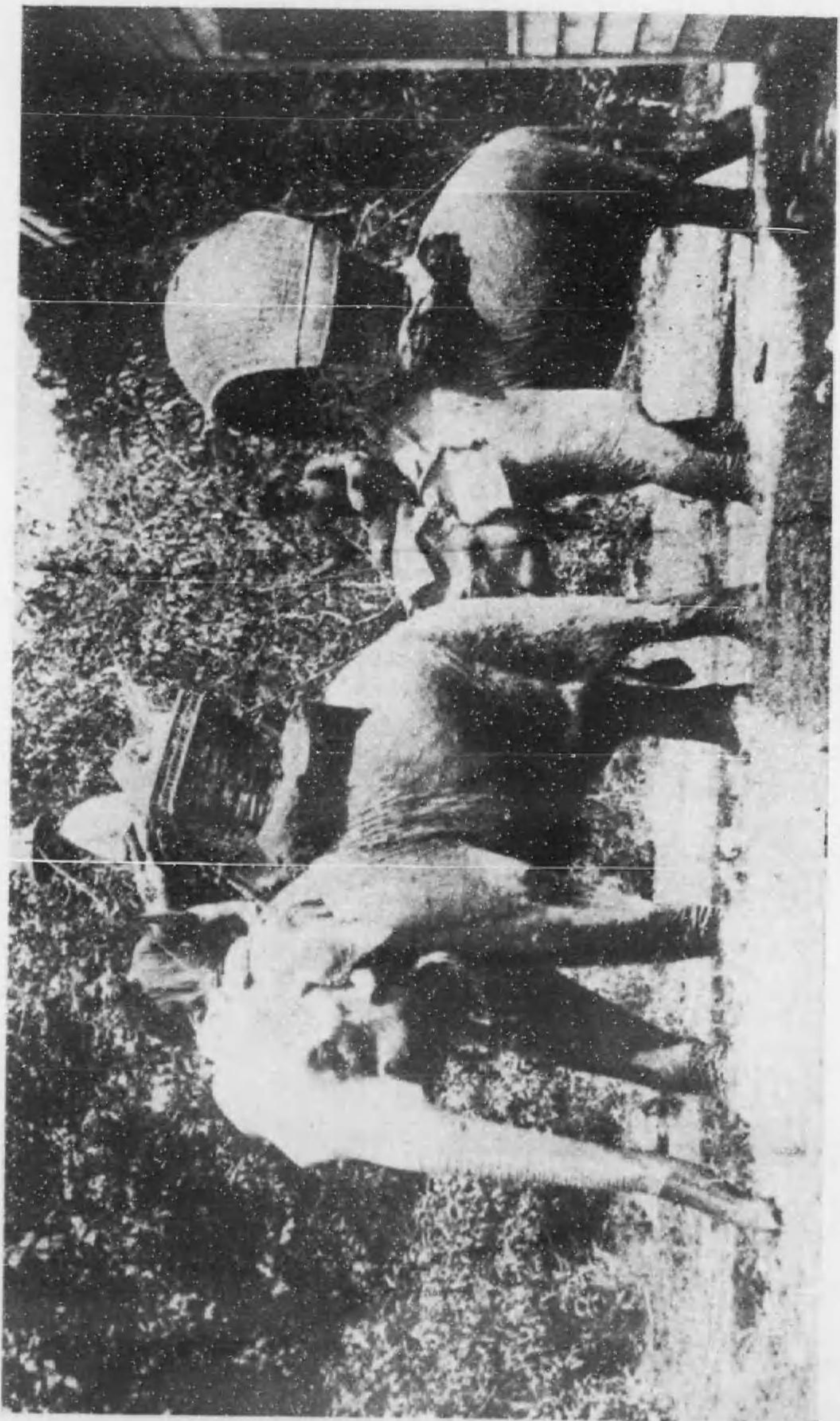
ボンベイ市の
大通り(上)



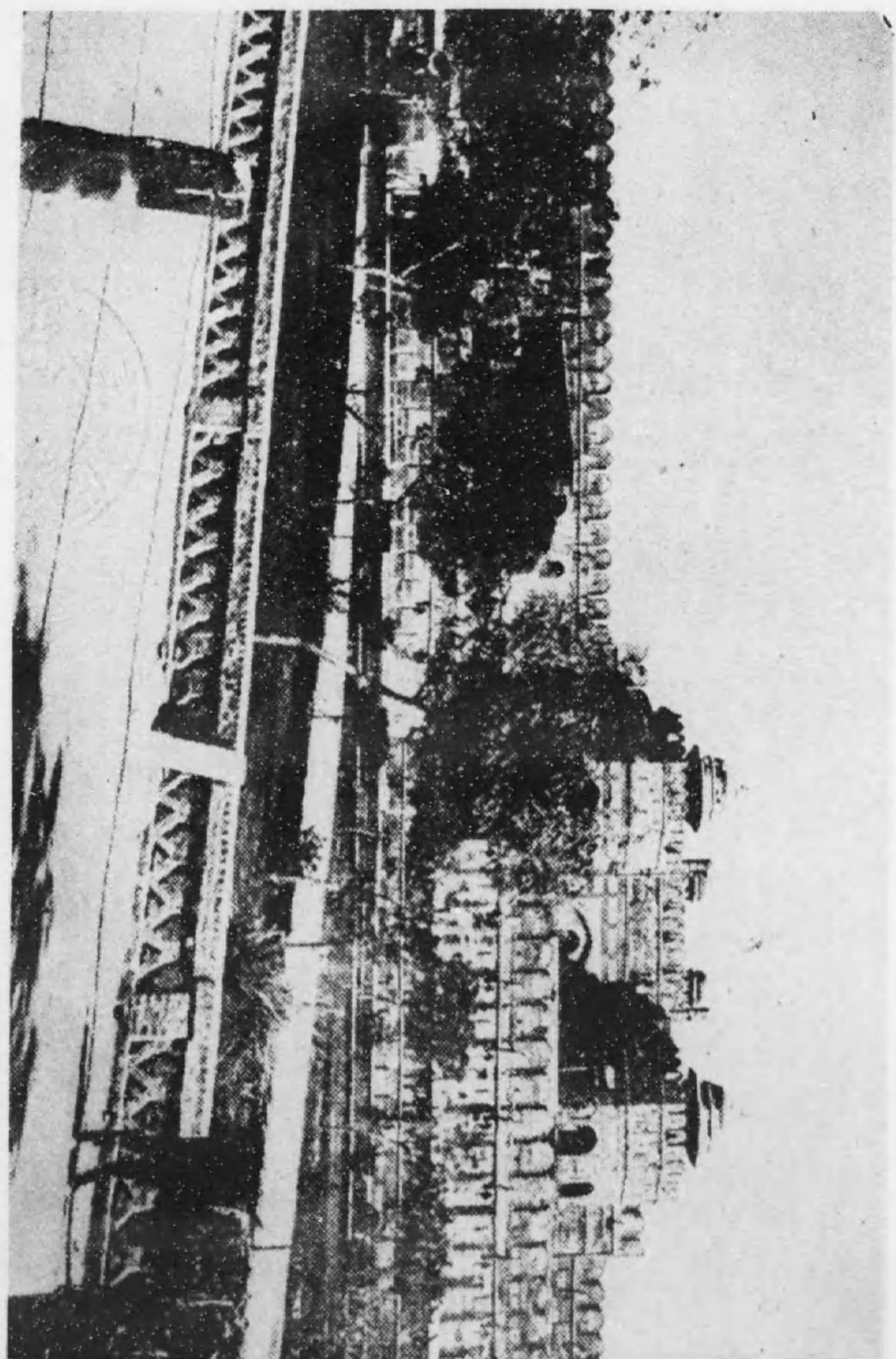
ボンベイ市の
クイーンズ・ロード(下)

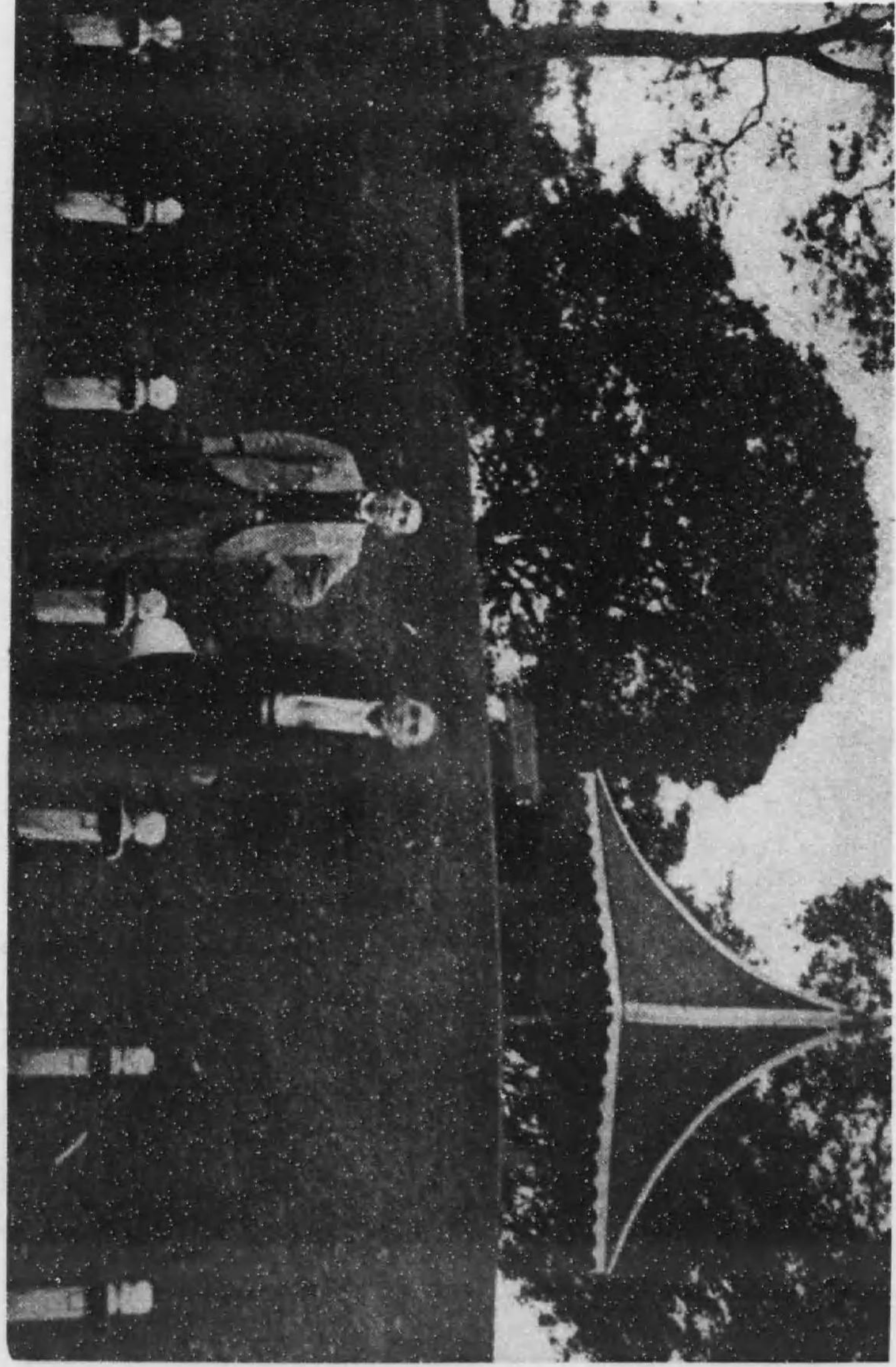


印度に於ける所見



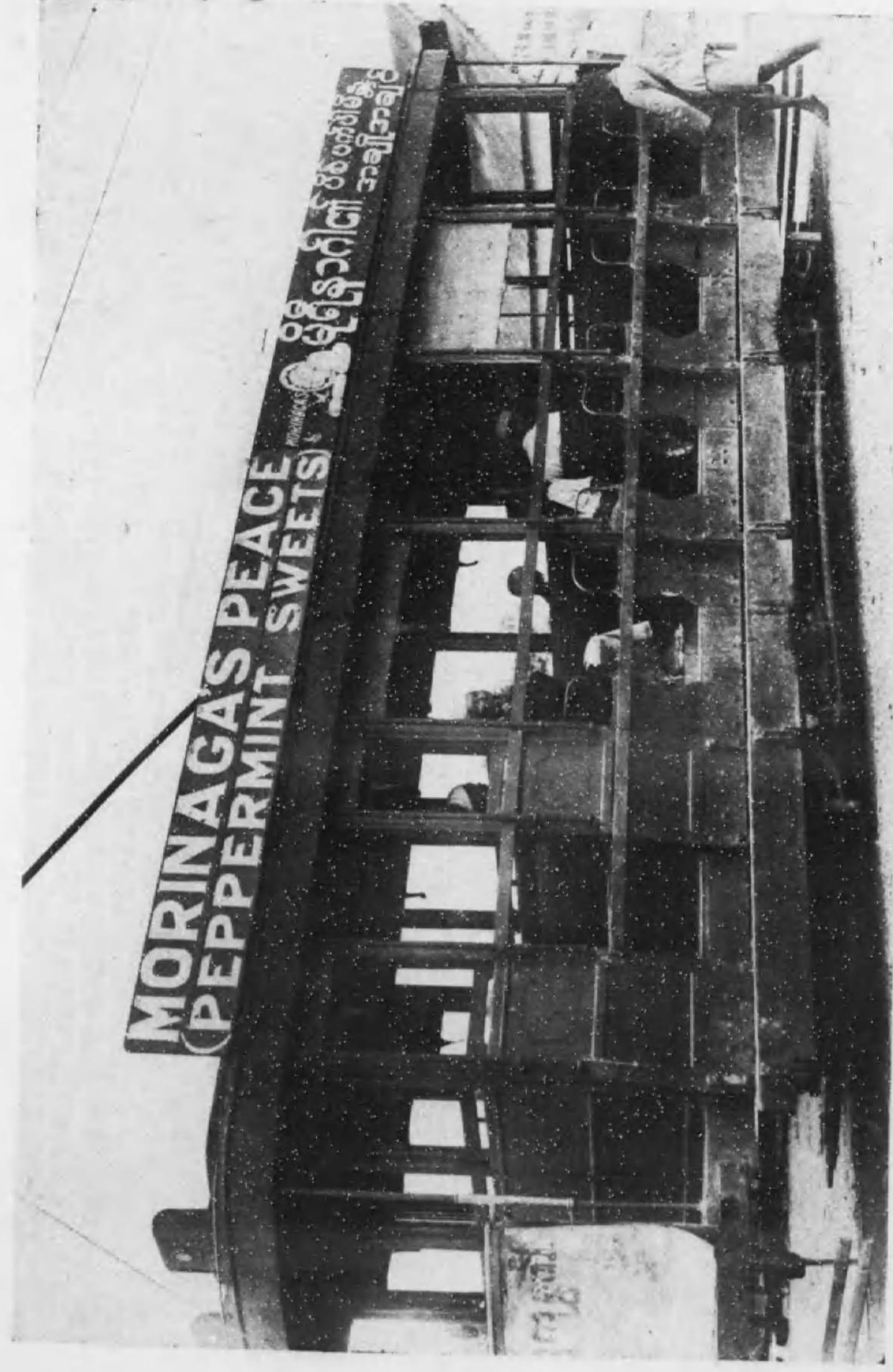
印度に於ける奇城の舊蹟

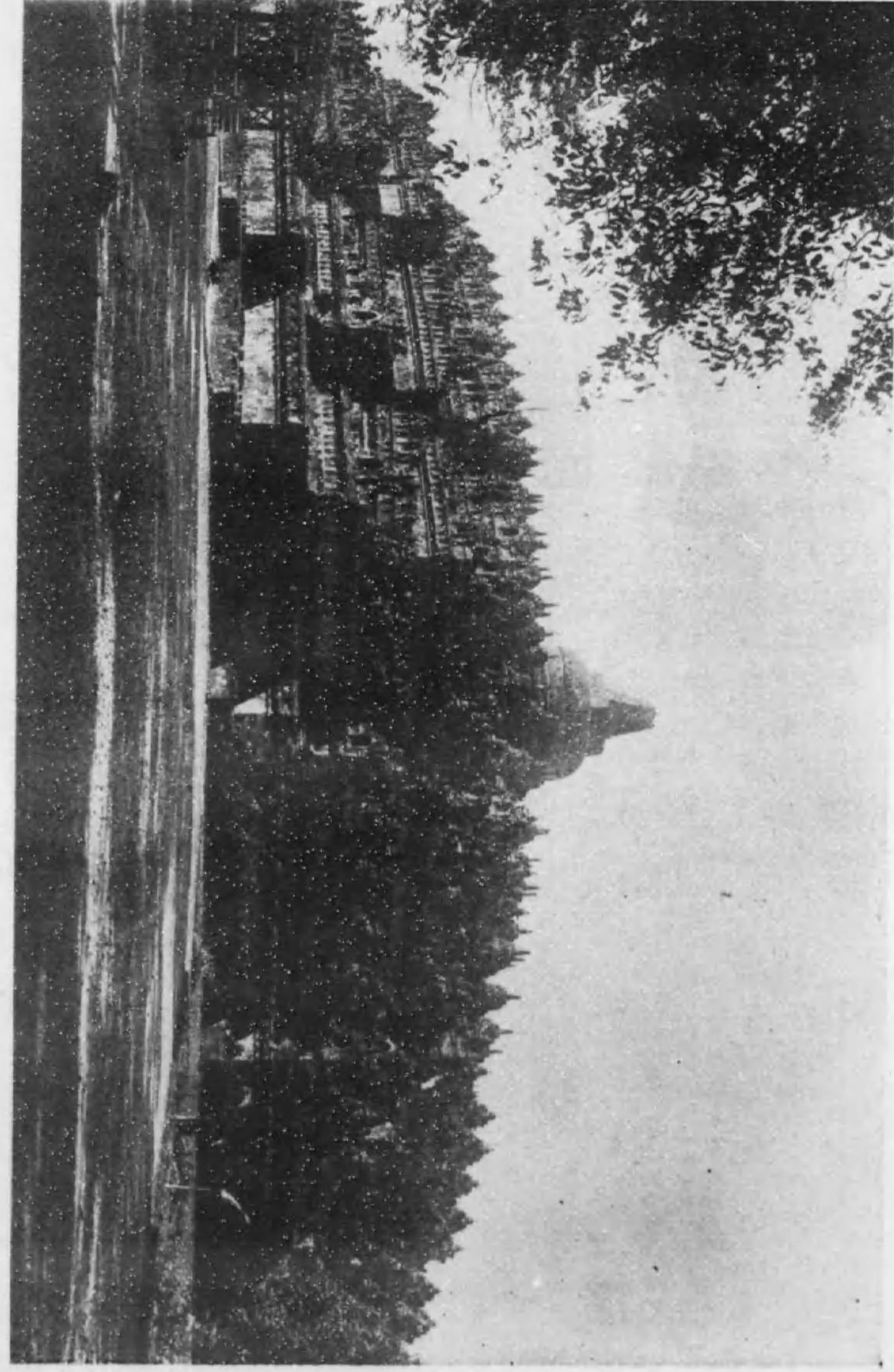




ラングレン公園に於ける著者(右)と森外販主任

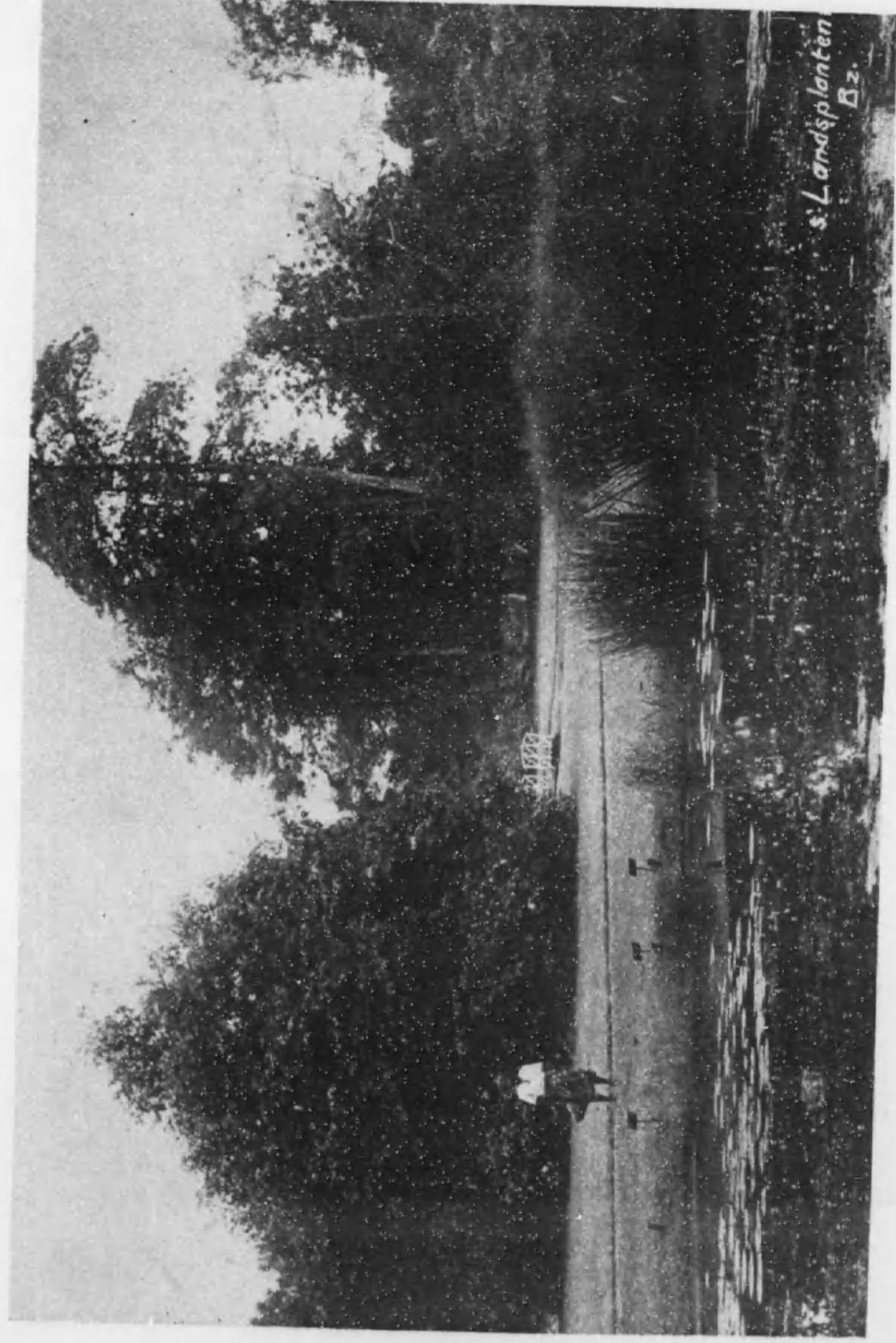
ビルマの電車廣告(森永ビスと英字及びビルマ文字でかゝれてある)

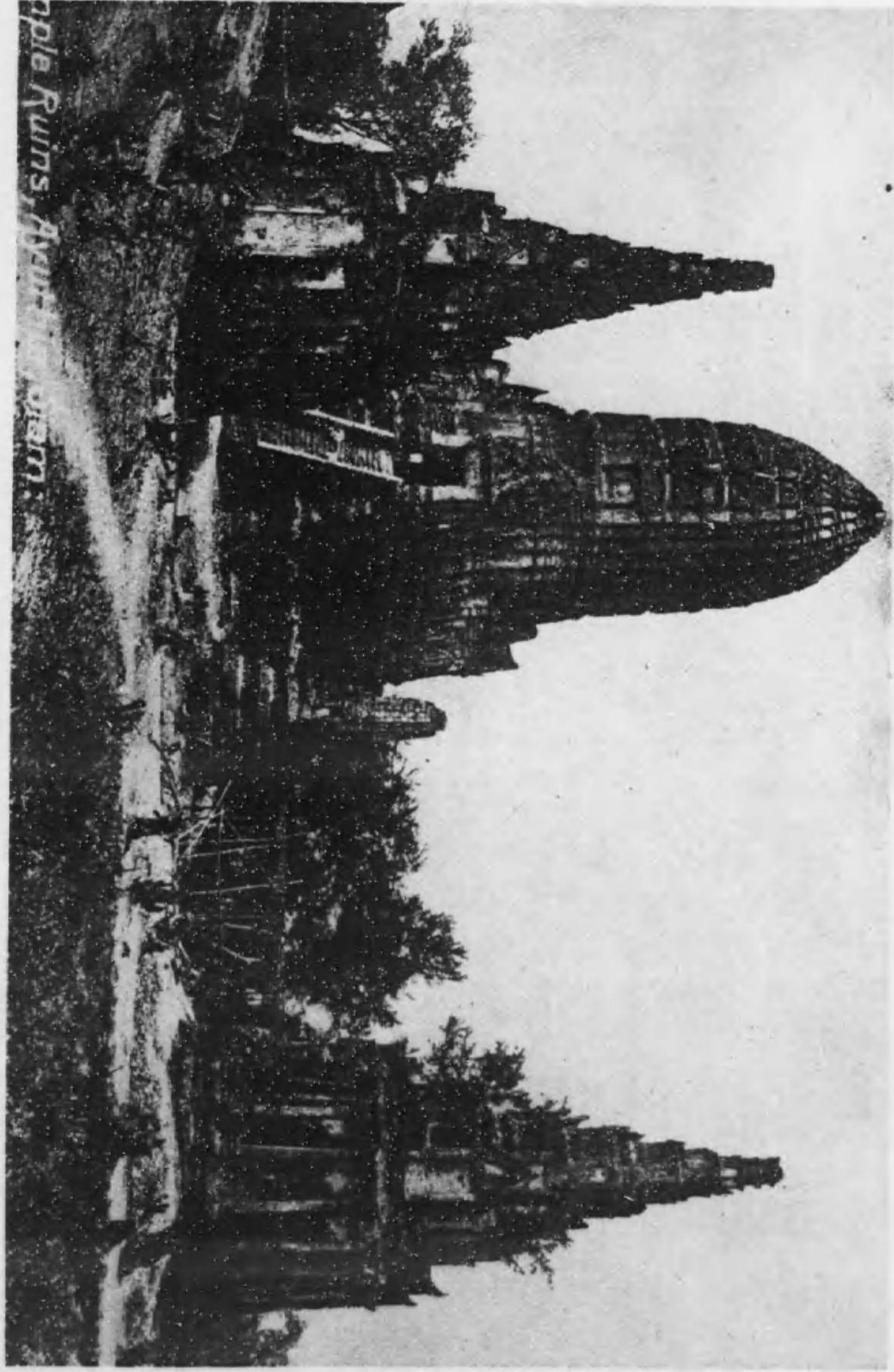




ブルネフィルの佛蹟(總ての壁面に佛像が無數に彫刻されてある)

アイテンドルフの公園

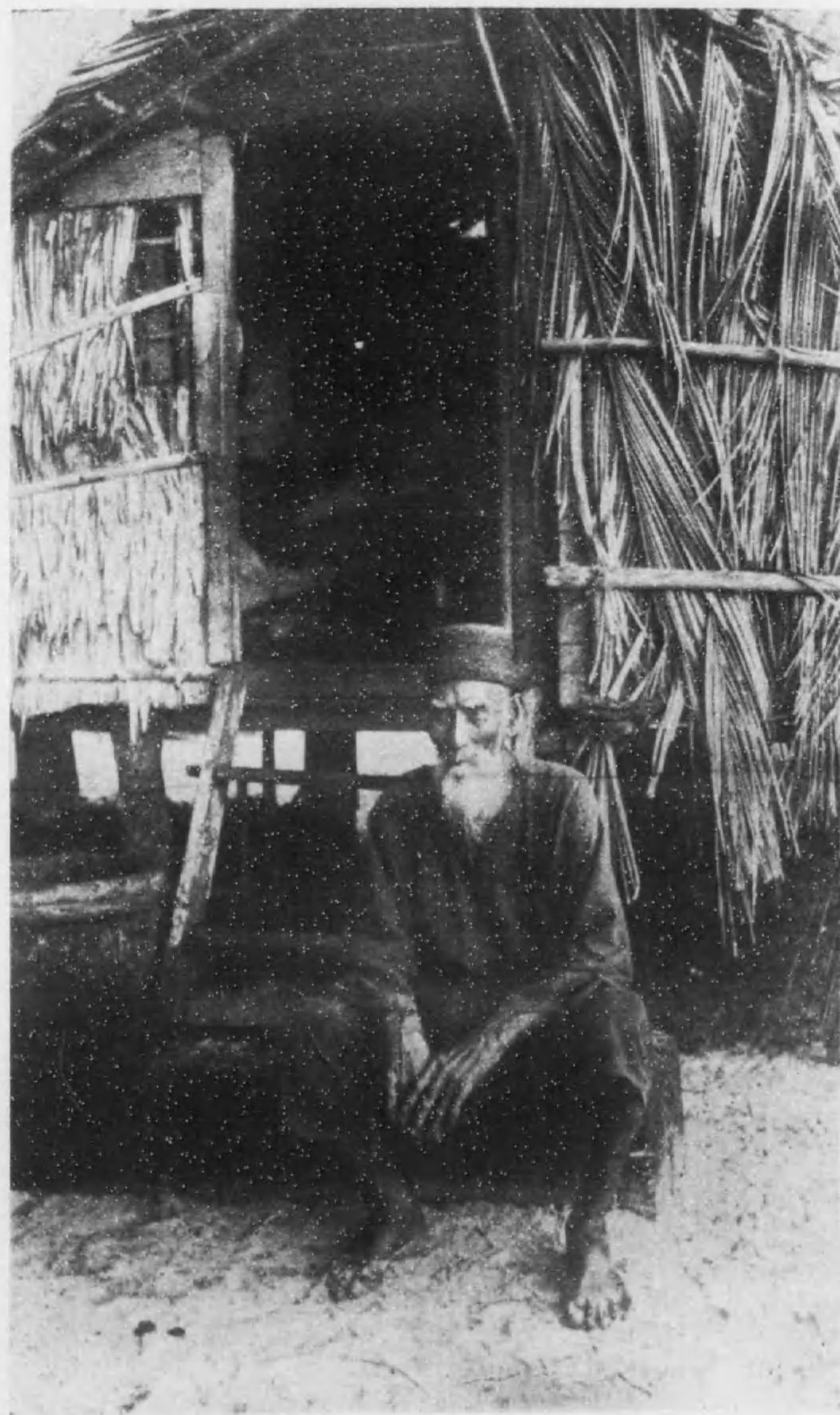




シヤムに於ける寺院の塔舊蹟

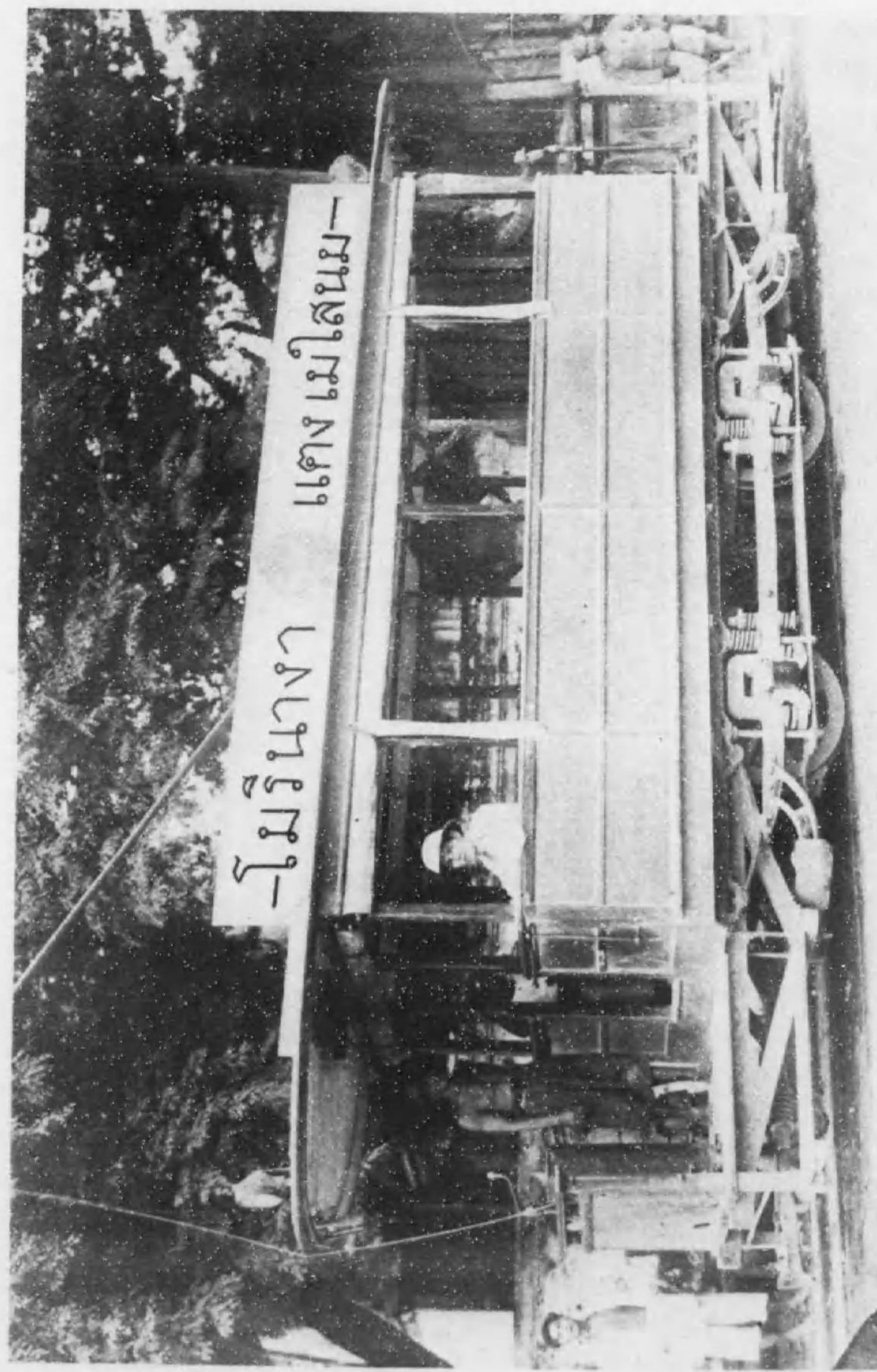


バンドン共進會に於ける『森水の菓子賣店』



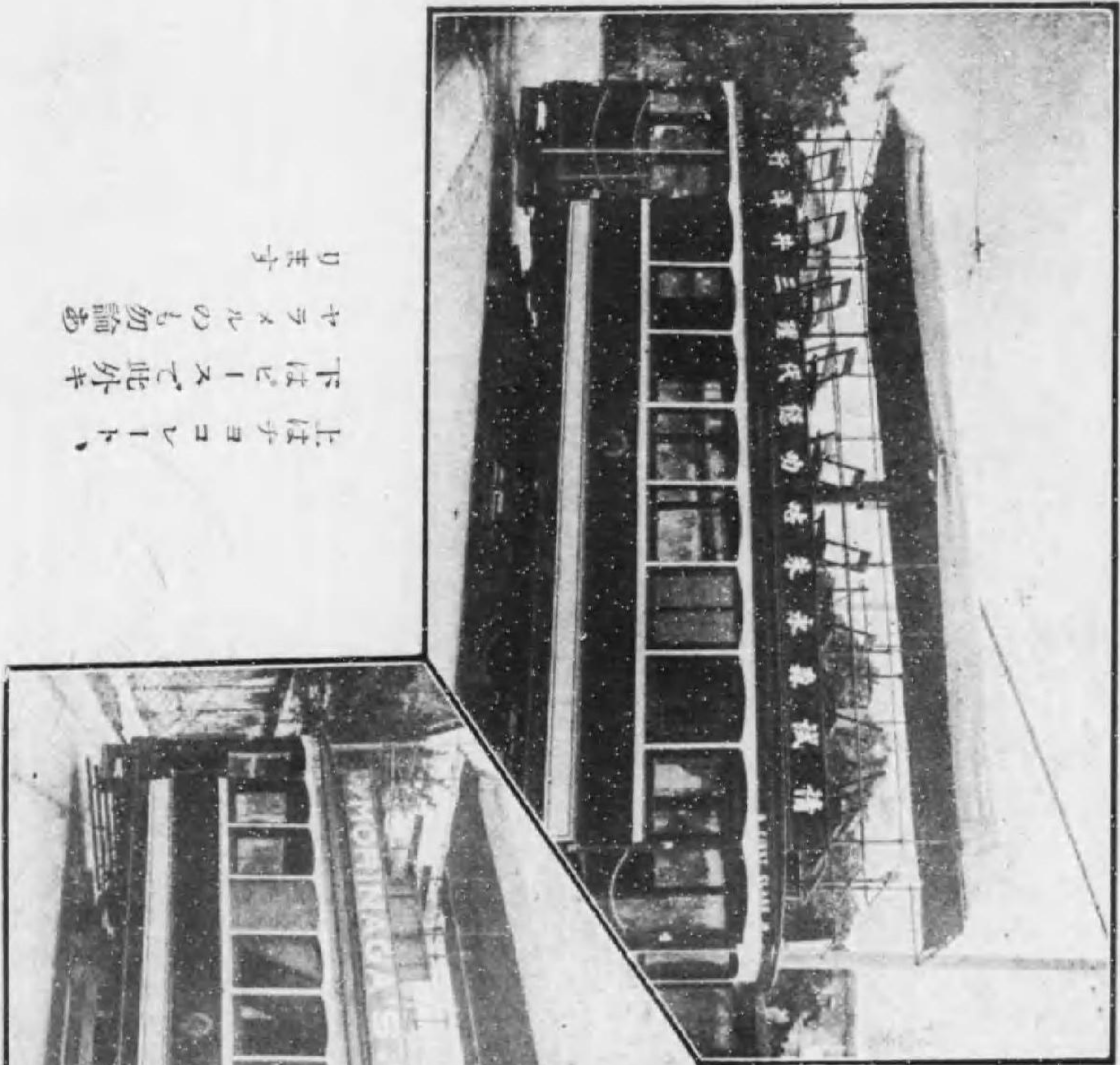
マレー半島に於ける土人の生活

シヤムの電車廣告(それは森永ミルク・キヤラメルと大書してある)

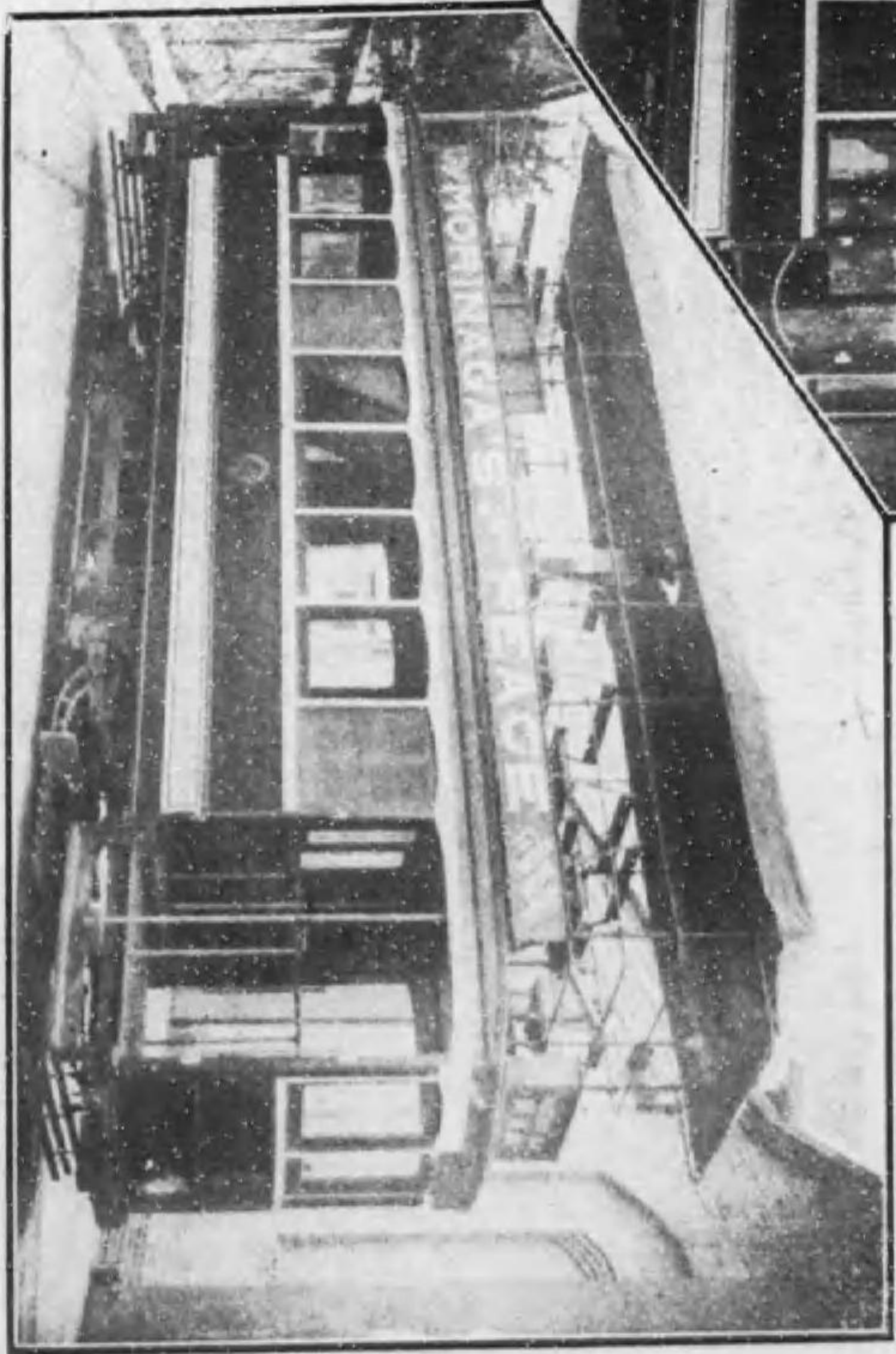




シンガポールの風光

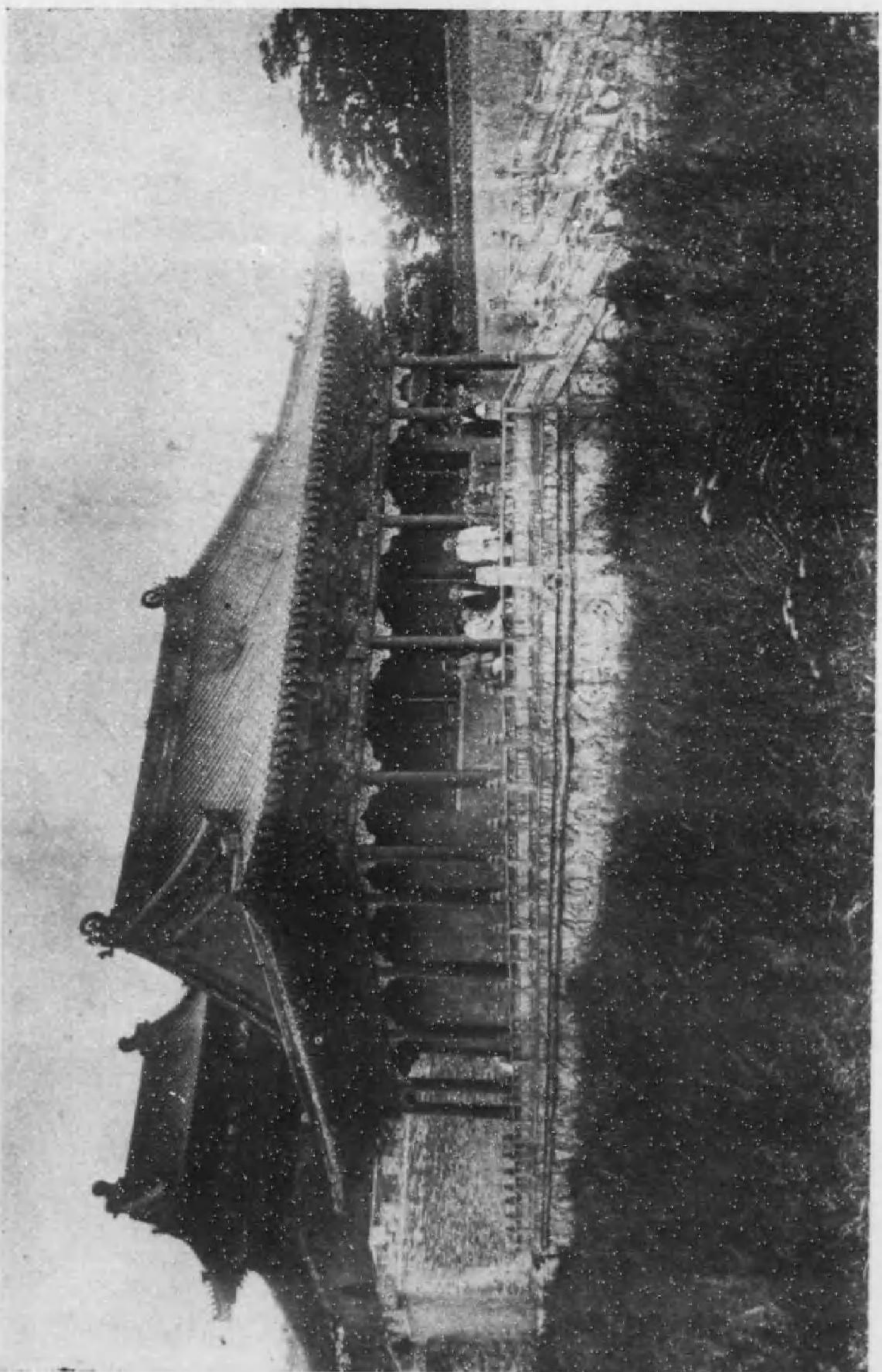


上はナヨコト、
下はビームで此外キ
ヤラメルのも勿論あ
りませ



香港に於ける
『森永の菓子』
の電車廣告

奉天の舊陵に於ける記念の撮影 (中央の白服が著者です)



目次

(南洋印度の巻)

1

神戸出帆.....	一
久し振りの鰻料理.....	二
日本人より流暢な日本語.....	三
冬の玄海灘.....	三
正月前の上海.....	四
上海視察.....	五
上海に於ける各國人.....	五
日本人は小さい者が多い.....	六
船中で避難の練習.....	七
國民外交が大切である.....	八
濃霧の中に停船.....	一〇
夏の白服となる.....	一一
避暑旅行には南洋を選べ.....	一一

香港一週	二
理想化された香港	一三
英人の偉大さ	一四
シンガポールに向ふ	一五
海上に輝く日章旗	一六
日本の菓子の世界に供給せん	一七
鼻毛を抜いてはいけない	一九
浴衣一枚で鋤焼の御馳走	二〇
ピナン視察……娘子軍問題	二二
文化村は支那人に占領さる	二二
南洋を掩ふ支那人の勢力	二三
日貨排斥は朝飯前	二四
九年前の印度洋上の思ひ出	二五
コロンの發達に驚く	二六
大隈侯に献言した事	二七
コロンの見物	二八
セーロン人の位地	二八

終年米を作る	二九
キャンデーの舊都	三〇
行渡つた森永ミルク・キャラメル	三一
英國治下の印度人は幸福だ	三一
大森林帯の汽車旅行	三二
思ひもかけぬ菓子の重税	三四
羨望すべき家畜の豊富さ	三五
マドラスの押問答	三六
印度の『朝顔日記』	三六
汽車中の悲喜劇	三八
奉仕事業のタジ・マハル・ホテル	四〇
施設完備したボンベ	四一
目覚めよ、自惚強き日本人よ	四二
片爲替になつた印度貿易	四三
何故に日本人は成功せぬか	四四
印度では印度と同化せよ	四五
印度人商店を歴訪す	四六

輪に輪をかけた印度婦人……………四七
 派手好みのパーシー人……………四七
 死人を鳥に食はす奇異な葬式……………四八
 船でカラチへ……………四九
 アラブ族に對する觀察……………五一
 アラブ族は世界的貿易家である……………五二
 熱心に森永の菓子を歓迎す……………五三
 マホメダンの珠數……………五四
 有望なカラチの將來……………五五
 我社の菓子は確かに賣れる……………五六
 天下泰平のシンボル……………五七
 花環を頸に掛けて……………五八
 孔雀が飛ぶ印度の大平野……………五九
 駱駝の價格……………六〇
 デリーの天幕住ひ……………六一
 新市街着々建設せらる……………六二
 牝牛の多い印度の都市……………六三

我社製品の見込は十分だ……………六四
 歐米品は能く行渡つて居る……………六五
 鹽稅で悩む印度議會……………六六
 日光も及ばぬ結構の遺蹟……………六七
 カシミヤ織物……………六八
 莊麗なアグラのタジ・マハル……………六九
 隣室に日本人の聲……………七〇
 印度の汽車旅行の要領……………七一
 カルカッタ公園の夕涼み……………七二
 カルカッタの前途……………七三
 驚くべき支那人の發展振り……………七四
 日本人の商店は一軒もない……………七五
 梅芳蘭以上の印度劇……………七六
 印度大陸を辭して……………七七
 イギリスさんの御心配……………七八
 佛敎國ビルマ……………七九
 支那に來たやうな感じ……………八〇

日本向のビルマ婦人……………七九

日本の醫師は大に持てる……………七九

成功の秘訣……………八〇

象の労働……………八〇

靈地は赤い唾だらけ……………八一

日本の恩人……………ジョーナス氏……………八一

『異國の花は見あけど』……………八三

ジャバに入る……………八四

ハイカラになつたジャバ人……………八五

在外同胞の奮闘を思へ……………八六

風景絶佳のブイテンドルフ……………八八

蘭領總督を訪問す……………八九

サマランに至るまで……………九〇

排日氣分のないサマラン……………九一

のんき極まる知事公……………九二

スラバヤの排日騒ぎ……………九三

中谷領事の痛論……………九三

最高級の椰子油……………九四

コブラ・エステートの大名行列……………九五

堤林氏が支配する農民二千……………九七

敬服すべき堤林氏の奮闘……………九八

エステートの組織……………九九

感興横溢のジャバ・ダンス……………一〇〇

箱根にも勝るソンゴリデー……………一〇二

羨しい道路の完全さ……………一〇三

ジリサテノ湖畔を訪ふ……………一〇四

試みの菓子行商……………一〇五

屍のある所には鷺集まらん……………一〇六

自動車旅行の一椿事……………一〇六

ジョクジャ州知事の好意……………一〇七

ブルブドールの佛蹟……………一〇八

昔を偲ぶチラチャツブ……………一〇九

日本人の自制を促したい……………一一一

山崩れに阻まれて……………一一三

十倍大の發展を遂げたバンドン……………二二三
 好機！さらば腕だめした！……………二二四
 人種的に觀察したジャバ人……………二二五
 白粉の輸出が有望である……………二二六
 總督府に視察意見を報告す……………二二八
 スラマバキ・ジャバよ……………二二八
 石井大使と日佛條約改正を談す……………二一九
 日本人は安南を閑却して居る……………二二〇
 故北白川宮殿下の靈柩を拜す……………二二三
 美麗なコーランボの市街……………二二三
 支那人が何處迄も……………二二三
 汽車中に於ける見聞二三……………二二四
 國として最も重んずべきは健全な國民性である……………二二五
 九年振りのシヤムに入る……………二二七
 シヤム皇帝陛下に七寶焼を献上……………二二八
 支那料理……………二二〇
 饗應の原理……………二二〇
 パンコツクに於ける見聞……………二二三

支那人はシヤム人として取扱はる……………二二三
 謙和興を訪ふ……………二二四
 矢田公使の午餐會……………二二五
 日本の國寶なる宮川氏……………二二七
 日本人の植民にはシヤムが第一……………二二八
 在留諸氏の好意を感謝す……………二四〇
 排日の本場イツポーに乗込む……………二四一
 支那人が跋扈するマレー半島……………二四二
 日貨排斥の最大原因……………二四三
 されど、我々は進まねばならぬ……………二四四
 皇弟殿下森永ビースを激賞せらる……………二四六
 勤勉なる支那人……………二四七
 日本人は背景に頼り過ぎる……………二四九
 日支親善を徹底せよ……………二五〇
 富豪の別荘をシンガポールに設けられん事を望む……………二五一
 日本人小學校の參觀及び感想……………二五二
 シンガポールの交歓……………二五五

顔馴染の熱田丸で……………一五六
 ジャボンのたゞり……………一五七
 香港の電車に廣告を契約す……………一五八
 ボイコット問題に關する意見を朝野の有力者六十氏に無線電信で送る……………一五九
 無事歸朝……………一六〇
 海外發展の途は如何にすべきか……………一六一
 支那人及びパーシー人に學べ……………一六二
 日本人は奮起せねばならぬ……………一六三
 エリヤの豫言……………一六四

(滿洲蒙古の卷)

はしがき……………一六九
 出發……………一七〇
 釜山……………一七一
 鎮海灣……………一七二
 馬山、三浪津……………一七三
 京城……………一七四

平壤……………一七五
 新義州……………一七六
 安東縣……………一七九
 奉天……………一八〇
 長春まで……………一八一
 長春……………一八二
 哈爾濱まで……………一八三
 哈爾濱……………一八四
 滿洲里まで……………一八五
 滿洲里……………一八六
 海拉爾……………一八七
 安達……………一八八
 哈爾濱の二……………一八九
 金魚の話し……………一九〇
 哈爾濱より奉天まで……………一九一
 撫順まで……………一九二
 撫順……………一九三

奉天より大連まで……………二二六
 大連……………二二七
 旅順まで……………二二〇
 旅順……………二二二
 大連の二……………二二三
 船中にて……………二二三
 歸朝……………二二七
 卷末の慷慨……………二二七

(寫眞)

著者の感懐……………キヤンデー湖畔……………ヒンヅー教の殿堂……………ボンペー……………印度所見……………印度の舊蹟……………ビルマの電車廣告……………ラングー公園……………ブイテンドルフ公園……………ブルブドールの佛蹟……………バンドン共進會賣店……………シヤムの寺院……………シヤムの電車廣告……………マレー半島の風俗……………シンガポールの風光……………香港の電車廣告……………蒙古の放牧……………奉天の宮殿

以上

南船北馬

(海外發展のしるべ)

森永太一郎著



南洋印度の巻

神戶出帆

大正十二年二月一日午前八時の特急列車で、我社の重役、知己、社員諸氏の見送を受け、東京驛を出發し、二日、三日は我社の大阪工場や塚口第四工場で、社用を済ませた。そして、四日は愈々神戸出帆の日なので、見本其他手荷物が多い爲め特に自動車を驅つて

早朝塚口第四工場から一路鷺地に神戸に向つた。

さて、熱田丸に乗込んで、手荷物取片付などをすするうちに、早くも正午になつて、推進機が勇ましく廻轉し始めた。同船の乗客には三井物産會社シンガポール支店の雜貨部主任稻葉三郎氏が夫人と可愛らしい乳兒を連れて赴任せられるのと同所に、同支店詰の須東氏もあり、其他上海、香港行、又は歐洲視察の爲め渡航する人々で、船中はなか／＼の賑はひであつた。

久し振りの鰻料理

幾度見ても見飽かぬは瀬戸内海の風光である。壽永の昔、安徳天皇が「海の底にも都あり」と宣ひしも、來遊の外人が「世界の公園なり」と歎賞するのも誠に理であると感じながら、五日早朝門司に着いた。

碇泊時間を利用して、門司市の東洋製藥會社を訪問し商談を済ませた後、下關に渡つて我社の特約店梶谷氏を訪問し同地名物の鰻料理に誘ひ出して、久し振りの珍味に腹を満た

して、夕刻船に歸つた。

日本人より流暢な日本語

六日午後一時門司を出帆した。同所より長崎駐在の英國領事が賜暇歸國の爲め家族と共に乗船せられた。此英國領事は二十年以上も日本に居られるので、日本語の流暢な事は日本人も三舎を避ける程である。そして、毎日甲板で日本の書籍を読んで居られるので、不肖は好奇心から失禮と知りつゝも、何を読んで居られるかとのぞいて見ると、親鸞上人傳に關する書籍であつたから益々其造詣の深きに敬服した。

冬の玄海灘

玄海灘に出ると、瀬戸内海の波靜けきに反して、殊に冬の事であるから、日本海より吹き送られる北風の爲め波浪高く、従つて船の動搖も激しい上に、不肖は風邪後なので、七

日は終日船暈の爲め気分勝れず、且つ、愈々日本の領海を離れるのだと思へば、流石に多少の感慨なきを得ないで、船室に閉ぢこもつて居たが、八日の未明に船は上海に着いた。

正月前の上海

此日は寒氣強く、時々雪が降つた程であるが、午前十時過に三井物産會社支店を訪問し支店長を初め社員諸氏の歡待を受けた。そして、「午餐には支那料理を御馳走しませう」と、一流の料亭を物色せられたが、生憎の正月前で、何れも大掃除やら、お飾りやらで休業して居た。やつとの事で（それも三井物産の御用だから）或る料亭に都合させて、久しぶりで本物の支那料理の饗應に預つた。

因に、支那は民國となつてから、官衙や外交上には太陽曆を用ひて居るが、一般は依然として太陰曆を用ひて居る。これらは支那貿易に關係ある者の心得て居らなければならぬ事であるから誌しておく。

上海視察

午後は三井物産會社の自動車で市中は勿論郊外の勝地まで悉くを案内せられた。坦々たる道路は塵一つをも留めぬばかりに清潔であつて、到底東京などでは見られぬ美しさである。——不肖は九年振りて此地を訪ふたのであるが、其進歩の迹は歴然として見るべきものがある。

其夜はアスター・ハウスに宿泊し、九日は朝來小雨であつたが、三井物産會社の好意で前日見残した市中を自動車で巡覽し、且つ、商況を視察して歩き、久し振りなので、何から何まで物珍しく感じた。

上海に於ける各國人

こゝに、上海に於ける各國人の状態を誌さう。
矢張英、米人は第一流に居るのであるが、近來濠洲人が英本國人に負けず劣らず活動し

て居る事は、將來英國を離れて獨立すべき素質を現はして居る。佛人は依然として保守的である。

支那人の中でも驚く程に發展して居るのは廣東人であつて、上海の大商店は殆んど彼等に依つて經營されて居る。さりながら、支那人には一つの缺點がある。彼等は個人として勤勉、努力、忍耐と蓄財及び商才に長じて居る事、印度人やアラブ人と兄たり弟たりであるが、自己共同の利益を圖る念に乏しいから、會社組織で大事業を經營する事は不可能である。假令會社を組織しても、前途の見込がなければ直ちに逃げてしまひ、見込があれば唯自己の腹を肥すやうな事をする。尤も、之は獨り支那人ばかりでなく、印度人、アラブ人の如き東洋人の共通性である。

日本人は小さい者が多い

次に、在留日本人の状態を見ると、勿論其數に於ては第一位に在るけれども、大きな處は三井物産會社を初めとして第一流者が揃つて居るに拘はらず、小さい處は餘りに小さく

て、而も、それらの小さい者が大多數を占めて居る。故に、兩者の間隔が大き過ぎるので、其中間に立つ者がないと、在留日本人の全體を結合して、健全な發展を遂ぐる事は出来ないものである。

こは上海ばかりでない、何地でも、此間隔がある。それで、不肖は此中間に立つ者が奮起一番して、海外に於て發展せん事を希望して止まない。

然らざれば、日本で製造する商品も、海外に販路を開拓する事は出来ないのである。

船中で避難の練習

十日午前上海を抜錨したが、下流の水が浅くて航行自由ならざる爲め、止むなく午後満潮を待つ事として、再び錨を投じ、午後一時半に至つて漸く出港し、巨船悠々波を颯つて香港に向つた。

翌日(十一日)も雨が續いた。

船中では船長の命令で船客、船員の悉くが浮囊を身體に着けて避難の練習を行つた。

國民外交が大切である

不圖、船中で感じた事がある。――

我々は常に國民外交を心掛けて居らなければならぬ。それは、内地に於ても、外國に行つても、我々の一言一行が直ちに外交上に響くからである。

日本は明治二十七八年の日清戦争に依つて、初めて日本と稱ふる獨立國が東洋の涯に存在する事を、微かに世界各國に知られたのである。それまでは、外交官や日本に關係ある人、又は學者を除いて、日本を知る人がなかつた。(嘘でないから怒つてはいけない)

不肖は日清戦争當時北米で菓子工場に働いて居つたが、多くの米國人が「今度の戦争は何故に起つたか。日本は支那から分離して、獨立せんが爲めに戦争するのか」と質問するので、不肖は其都度「我國は神武天皇以來皇統連續として、萬世一系の君主を戴き、建國二千五百年の光輝ある歴史を有するのである。そして、今日まで一寸の土地も外國に譲つた事なく、又一日たりとも外國の領民となつた事がない、此度の戦争は實に隣邦の誼を以

て、朝鮮を救援する爲めである」と説明に力めたのであつた。

次で、日露戦争に依つて、漸く一等國の班に列する事が出来たのであるが、國民としてそれを自覺して居る者は恐らく僅少であつて、國民の全體としては未だ大に努力せねば駄目である。見よ、言語、風習の何處に一等國の體面を具へて居るか。譬へば、夏の漁場に於ては蒙昧な野蠻人にも劣つた裸體の醜風を見るのみならず、東京の真中でも、南洋印度の土人よりも劣つた下等な風俗を見るのである。故に、智識階級が率先して、其言行に注意しなければならぬ。外交上の責任を外務省ばかりに負はす事は無理である。現在の如き國民の状態では、如何に外務省が強硬に骨を折つてもうまく行く筈はないと思ふ。勿論不肖は外務省から態々頼まれた譯でないが、國民全體が國民外交を常に心掛けて居らねばならぬのである。

それで、船中で同胞が歐米人を指して「毛唐」と呼ぶ事は彼等の感情を害しないまでも決して好い感じを起させぬのであるから、絶対に「毛唐」と呼ぶ事を禁物にせられたいと不肖は口を極めて留めたのである。不肖も滯米中に米國人がジャツパニスと呼ばないで

ジャツブと呼ぶ度に好い氣持がしないのみならず、寧ろ癢にさはるので、時には喧嘩をした事さへある。それ故に、己が侮りを受ける事を欲しないならば、少したりとも他を侮つてはならない。現に、同船せる長崎駐在の英國領事の如き、日本人の船客が領事の面前をもお構ひなく「毛唐」と呼ぶので、其都度好い氣持をせられない事が顔色に現はれて居つた。——其人の前だけを慎しまうとしても、平生慣用して居る言語は不用意の間に口を出るのであるから、斯くの如き他人を輕侮する言語は使はないやうに、互ひに慎しみたいものである。

憎まれ口の理由、依つて件の如し。

濃霧の中に停船

十三日未明、香港の港外七八哩の沖に達したが、霧が深いので一旦投錨して、其晴れるを待つた。聞けば、今頃は濃霧の襲來する季節だそうて、汽船の航行は危険な爲め、十二日の夜半から絶えず警笛を鳴らし續けて警戒に努めた。それで、入港も遅れて午後二時に

及んだが、出入の汽船が總て警笛を鳴らしつゝ濃霧の晴れるを待つ有様は何となく物凄じい感じがした。

夏の白服となる

實は上海を出帆してから、日増しに暖かくなつて、上海では嚴冬のやうな寒さを感じ、冬服でも猶凌ぎかねたものが、次第々々に一枚づゝ脱ぎ捨てられて、今日(十三日)は遂に夏の白服と着替へた始末である。人間といふ者は勝手な者で、斯うなると、ツイ數日前まで自分の身體に着けて居つた冬服も見ると暑苦しく感ぜられて、行李の底へ投げ込むやうに藏つてしまつた。

而も、日本を出發してから、未だ十日前後に過ぎないのに、斯くまで氣候の變化せるを見て、初めて海外旅行の氣分が濃厚になつた。

避暑旅行には南洋を選べ

不肖は考へた。――

日本の富豪、紳士が避寒旅行をするならば、狭苦しい内地にうろつくよりも、寧ろ來つて香港、シンガポールなどを撰ぶべきである。冬服を夏服に着替へねばならぬ程であつてこそ、初めて避寒が有意義であり、又一面には南方發展の國策にも適ふ譯で、いはゆる一舉兩得であるから、切に富豪、紳士諸氏の考慮を促したいものである。

殊に、我が國民の増殖率は世界有數であつて、早晚狭隘な内地には住むに地もない窮態となるであらう。故に、國民は是非とも海外に植民するの必要に迫られて居るのである。それで、青年諸君は語學を勉強して、海外に發展し、新日本人としての働きを現はされん事を望む次第であるが、而も、其時期は既に我々の目前に迫つて居るのである。不肖は青年諸君に對して、速かに奮勵一番せられん事を望むや切である。

香港一週

さて、十三日は午後二時過に三井物産會社のランチで上陸し、更に同社の自動車で、二

時間餘を費して香港を一週したが、流石に英國政府が銳意努力したとだけあつて、總ての施設が理想的に完全して居るのを見て、今更ながらに其經營の巧妙なのに感歎せざるを得なかつた。特に、道路などの理想的に出來て居る點は、是非とも東京市參事會諸君が一見されたいものであると思つた。

理想化された香港

香港の事情は、明治初年早くも福澤諭吉大先生の『世界國盡し』に依つて紹介せられて以來、我が國民の周知する處であるから、半世紀も経た今日、不肖が視察感想を述べるのは迂愚のやうであるが、心安く交際しつゝある人の住所番地は、ツイ迂濶して、記憶しないやうなものだから、日本の國外に出ない人の爲め、こゝに紹介しやう。

香港島が英國の領有に歸する前までは、岷々たる岩石のみの樹木もなく水一滴もなき孤島で、さゝやかな漁村があつたにもせよ、殆んど何等の價値もなかつたのである。それが英領となつて以後、經營縱横、全島植林の結果鬱々たる森林と化し、谷間には堤塘を築い

て小湖を設け、其他文明的施設至れり盡せり、今や百萬の人口を擁する繁華な市街を見るに至つた。そして、神戸を出帆してからリバープールに達するまでの間に、豊富な給水を安價に受け得られるのは、實に香港を以て第一とするとの事である。

錐の如く屹立した絶頂までは、ケーブル・カーで僅々十數分で達する事が出来、遠くは廣東より、約百哩四方を展望し得るのである。又道路は愉快に自動車で全島を一週し得るやうアスファルトが敷かれて、塵一つ散つて居らない。

商業、工業の盛んな事は、廣東の咽喉則ち南支諸省の商權を把握して居るので、自然に此自由貿易港の全體が大保税倉庫となつて居るのである。

英人の偉大さ

香港に住む支那人は廣東人が大部分であるが、支那本土よりも財産、生命が安全なので支那富豪の別荘を此地に設くる者が澤山ある。又臺灣に籍を有する富豪なども、不平の爲め香港に住んで居る者があるといふ。けれども、中腹以上の住宅地には、日本人や支那人

の如き有色人種の住居する事を許可されない。其理由は、有色人種は不潔だからである。それだ(甚だ失敬な事をいふものだ)併し中腹以上に住む英人の家庭に於ける雇人は悉く支那人でないか、否、時には眞黒々な印度人さへ居る。要するに、彼等英人は何者よりも上位に居りたいといふのである。

唯、支那人を統治するの巧妙は手に入つたもので、些細の事のやうであるが、巡查の如きも、印度人の中の巨人種なるバンガリー人を採用して居る。香港總督府の警衛の任に當る者も亦盛装したバンガリー人であつて、英國兵を用ひない處に、英人の偉大さを示すのである。——不肖は未だ臺灣を見ないけれど、朝鮮に於ける統治振りは如何である。日本人が朝鮮に渡つて俵夫までするやうでは、日本人の偉大を示す事は出来ないのである。

シンガポールに向ふ

此夜(十三日)は三井物産會社支店長津田氏、同夫人の歡待を受けて、日本料理の晚餐に腹を満たし、船に歸つて、日本行の書狀を認めだが、幸ひ十四日に日本へ歸られる三井物

産會社の社員があつたので、その書状を託した。

そして、船は十四日正午香港を出帆し、シンガポールに向つた。

海上に輝く日章旗

今、船は南方に向つて進航しつゝあるのである。

甲板に立つて、浪瀾遠く天に連る大洋の壯觀を眺めるうちに、歐洲より歸航する我が日本郵船會社の姉妹船が、此方を指して進み來るのと邂逅した。

此時不肖は考へたのである。――

半世紀以前、明治維新の頃に於て、日本人の手に依つて巨大な船艦が建造せられ、それが全世界を航行するといふが如き事は、同胞の何人もが夢想だにも及ばなかつた處である當時、若し斯くの如き事を説く者があつたならば、忽ち空想家と笑はれ、又は狂人と呼ばれたであらう。然るに、今日は日本國旗を高くマストに掲げた大艦巨船が、日本人の手で全地球上を盛んに航行しつゝあるのである。然り、或る時期に於ては、同じ日本の汽船で

あつても、船長、事務長が外國人でないと、信用して荷物を託されない事があつたのであるが、其至難とせられた海運事業も、最早や容易になし得るに至つたのである。更に、今後より以上の努力を以てすれば、我國の船艦が東西兩洋の上に覇を稱へるのも、蓋し近き將來にあらうと思ふ。

其やうに、紡績業に於ても、半世紀以前までは、日本が世界の注意を集むる程に發達すべしとは思はれなかつたが、今日では全印度に於ける棉花産額の過半を日本で買ひ取り、其上にも、米國棉花及び支那棉花を買ひ入れる程に、斯業の發達を來して、世界に於ける紡績業の幾パーセンテージは、日本で營まれる事となつた。

そこで、不肖に與へられた菓子業の將來に就て、大なる責任を感じたのである。

日本の菓子を世界に供給せん

今や全世界に於ける菓子の消費高が七八十億圓に達して居る事は、砂糖其他の原料の消費高に依つて打算せられるが、更に、歐洲大陸に於ける經濟状態が恢復した曉には百億

圓を突破するであらうと考へられる事も、決して空想でない。加之、支那、印度等の文化が進むに従つて、砂糖消費高が増加し、又菓子需要が年々増加する事は、争ふべからざる事實であらうと思ふ。こゝに於てか、我々日本の同業者が一段の努力を以て、世界に於ける菓子消費高の割を供給するならば、則ち一個年に十億圓の生産をなし得る事となるのである。之を考ふる時、不肖が今日まで我社の生産額を内地の販路から打算して、一個月一千万圓、即ち年額一億二千万圓を理想（此内に輸出額をも含む）として居つた事は畢竟井蛙の管見に過ぎなかつたのを感じると共に、何となく氣恥しい思ひがした。然り、我々は須らく此與へられた天職に依つて、世界的に活躍すべき大責任を有する者である事を感得したのである。

思ふてこゝに至る時、不肖は前途の光明を認め、衷心うたゝ欣快の情に堪えぬものがある。併しながら、菓子業も亦造船業、海運業の如く、將た紡績業の如く、決して一朝一夕に成し遂げられるものでない。今後、半世紀といはず、一世紀といはず、二世紀の後までも連続的に奮勵努力して行つたならば、必らずや成功の彼岸に達する事、至難ではない。

要は持久的精神が肝腎なのである。

鼻毛を抜いてはいけない

海上は頗る静穏で、日露戦争當時露艦が潜伏して居つた爲め、日本人に記憶を印した佛領安南のカムラン灣の沖に近くに從ひ、漸次熱帯圏となつて、身は盛夏の候に逢つたやうに感じ、船中には海水浴場が設けられて、船客の遊浴が盛んに始まつた。

不肖は此頃から鼻孔に痛みを覺へ、日増しに重り行くので船醫の診察を受け、外用薬を以て治療しつゝあつたが、痛みは少しも去らず、膿を持つて來たので、シンガポールに着けば、暫らく滞在して療養せねばならぬかと心痛した。（因に、鼻孔の痛み出した原因は鼻毛を爪で抜いたから細菌が入つた事と、後日になつてわかつた。鼻毛を延ばしても好くないが、鼻毛を抜くのも好くないのである）

十九日未明シンガポール着、早速上陸して、三井物産會社支店を訪問し、大久保支店長の好意で、難波庶務課長に案内されて、日本人の開業醫二名に診察を受けたが、懇ろに手

當して、「印度方面に向つても大丈夫、少しも氣遣ひない」との保證を與へられたので、先づ以て鼻の落ちる心配もなくなつたから、俄に元氣づいた。

序に誌す、日本醫師の許に集まる患者は、大部分が支那人であつて、彼等も病氣には勝てないから、醫師に對してポイコツトをやり得ないのである。

浴衣一枚で鋤燒の御馳走

かくて、大久保支店長に誘はれて、同地第一の海岸通なるラツフェル・ホテルで午餐の饗應を受け、午後は三菱商會社支店に服部支店長を、日本領事館に浮田總領事を訪問して、互ひに久瀾を叙した。夜は再び大久保支店長宅に招かれたが、浮田總領事、同夫人を初めとして、重立つた人々が來會せられ、何れも浴衣一枚になつて寛ぎつゝ、鋤燒の御馳走になり、不肖の如きは氣焰萬丈當るべからざる豪傑振りを示した。そして、歸船したのは夜半頃であつた。

翌れば、二十日朝大久保氏を初め有志の見送りを受け、其好意を感謝して、シンガポ

ルを出帆し、印度に向つた。右にマレー半島を眺め、左に蘭領スマトラを望みながら、マラッカ海峡を進んで、二十一日ビナンに到着した。

ビナン視察……娘子軍問題

ビナンには長崎縣嶋原の出身で田中といふ人が、二十年以上在留して、雜貨店を經營し我社の特約店となつて居られるので、埠頭に出迎へられ、且つ、其案内で久し振りの俥に乗つて、市中を視察する事が出来た。

此ビナンには曾て日本人の雜貨店が多數を並べ、或る町筋の如きは娘子軍の爲め繁昌して、小日本町のやうな觀を呈して居つたが、山崎領事時代に英國官憲と交渉して追ひ拂つたから、彼等は王國內に立退いてしまひ、其後屢々繰返されたポイコツトの爲め、殘る日本人も次第々々に引上げて、今日では極めて少數の在留者を見るだけである。

娘子軍問題に就ては、日本の體面論、道德上から、彼等の在る事を不肖も好まない。けれども、マレー半島は英領と幾多の保護王國とが錯雜して居るので彼等を準英領より追

ひ拂つても、日本政府はそれらの王國と無條約だから、彼等は王領内に轉じて營業を續ける。畢竟、頭隠して尻隠さずの結果となるだけで、英國官憲も王領内では密かに彼等を歓迎し保護するのである。それで、歸途、浮田總領事に話した事であるが、此問題は餘程慎重に考慮すべき價值があると思ふ。蓋し日本の男子が奮發して、海外に活躍するだけの意氣地がないから、娘子軍が日本男子の發展の爲め露拂ひとなつて、途を開いてくれたやうなもので、一面からいへば、彼等は大なる勳功を樹てゝ居るのである。

文化村は支那人に占領さる

シンガポールに於ても、ピナンに於ても、郊外のいはゆる理想的文化村の住人の大部分は、概ね支那富豪連である。殊に、ピナンでは殆んど支那人のみの住宅であるのみならず支那人の寺院となつて居る極樂寺の如き、ピナンに於ける名所の一として數へらるゝに至つた。現に、ピナンに碇泊中、此地を見物する者は必らず極樂寺に案内される例で、曾て東郷大將や乃木大將が同寺に參詣せられた時、芳名録に自署せられたのが保存してあつて

日本人が參詣すると、寺僧は直ぐ兩大將の自署を持ち出して誇り顔に見せるそうである。

南洋を掩ふ支那人の勢力

二十一日夜半ピナンを出帆して、二十二日は終日スマトラ島を左舷に眺めつゝ、鏡のやうに靜かな海上を進んだ。此スマトラ島は既に知らるゝ如く蘭領であつて、日本の本島よりも稍大きな島であるが、人口は百萬内外で、其大部分は支那人が占めて居る。

元來、マレー半島からジャバ、セレベス、ボルネオ、スマトラにかけての此廣大な英領蘭領の南洋諸國を初めとして、米領ヒリツピン、佛領安南、英領ビルマ及びシヤム王國に至るまで、農業、工業、商業は勿論、各種の勞働まで、悉く支那人に依つて經營されて居る。そは、人口の點に於ても、富の點に於ても、支那人の獨占に歸して居るから、英、蘭兩國政府のみならず、恐らくは米、佛兩國政府も、支那人の爲め特に官憲を派出して、彼等の財産を保護するといふ、いはゆる高等管理人たるの奇觀を呈して居る。従つて、支那人は其本國に在れば却つて生命、財産の安全を保し難いが、これらの諸國に移住すれば

極めて安全な爲め、支那富豪は相踵いで國外に出で、前記の各地に定着するの傾向を來したのである。

日貨排斥は朝飯前

斯く、支那人の勢力は南洋諸國に充滿して居る爲め、歐、米、濠の各國人も、東洋に對する取引は印度を除くと齊しく支那商人を相手にして居る。それで、歐米人と雖も、支那人の感情を害すれば、ボイコットを免れる事が出来ない。況して、勢力のない日本人と日本品を排斥する事は、支那人として朝飯前の一些事に過ぎないのである。加之、南洋諸國には支那人及び支那人系の人種が二千萬以上も在住するので、一たび日貨排斥の火の手が擧がれば、單に支那本國のみに止まらず、延いて南洋方面にも傳波する爲め、資力微弱なる日本商人の閉店する者、比々として相次ぐといふ悲惨事を演ずるのである。

左様に、一國の外交方針が如何に海外發展の上に直接影響するかを思ふ時、不肖は國交問題の決して等閑に附すべきものでない事をつら／＼感じた。

九年前の印度洋上の思出

大正三年に不肖が印度へ旅行した時は、丁度八月の末で、彼の獨逸の巡洋艦エムデン號が印度洋からアラビヤ海にかけて暴れ廻つて居るので、容易にコロンボに直航する汽船がなかつた。それで、ピナンからビルマ在留の支那巨商の持ち船に便乗して、ラングーンに渡つたが、船長は英人であるけれど、支那人の持ち船だから其不潔な事は想像以上であつた。そして、夜間はエムデン號の襲撃を恐れて、燈火を消すので不自由千萬であつた。

さて、ラングーンからは英印航海會社の汽船で、カルカッタに向つたが、これ亦牛馬同様の不潔極まる印度人の集團が一寸の隙間もなく乗り込んだので、不快な臭氣と、ベンガル灣の熱風の爲め耐え切れなかつた。幸ひに船長の好意で、晝間は特に船長室へ居候する事を許されたので、印度人等は驚異の感に打たれた如く、不肖に最上の敬意を表した。そして、彼等の中の中流階級なる小數不平等家が、英國政府の施設に就て、種々の不平を不肖に訴へたので、其都度英國政府に柔順ならん事を説諭してやつたが、それ故、船長は益々

不肖を信用し優遇したのであつた。

之に反して、今回は巨船に乗つて、而も、一等室に陣取つて、食事其他萬端善盡し美盡し、實に勿體ない程に樂な航海で、コロンボさして直航するのである。唯、これだけでも一層努力して、販路擴張の目的を達せなければ、何の面目あつて、日本に復命するを得んやである。

コロンボの發達に驚く

二十六日未明愈々コロンボに到着した。願れば、神戸出帆以來二旬餘、一家族のやうに馴染んだ船長を初め其他の人々と握手して、又の逢瀬を約しつゝ、熱田丸に別れを告げて上陸し、コロンボ第一の旅館グラント・オリエンタル・ホテルに投宿した。(此グラント・オリエンタル・ホテルはボンベアのタジ・マハル・ホテルと共に、不肖の印度旅行中最も懇切で好く行届いた旅館である)

此地は歐洲から東洋に向ひ、東洋から歐洲に向ふ關門であるだけに、其進歩の速著し

く、九年前に見たコロンボと今日とを比較すれば、眞に驚くべき相違である。こは、一に英國政府の經營其宜しきを得た結果であつて、只管感服するの外はない。

やがて、我社の特約店なるダンビー・ビレー氏の令弟と支配人が來訪せられたので、種々商談をなし、終つて市中を視察した。

大隈侯に献言した事

先づ第一に日本領事館を訪問した。

九年前まではコロンボに日本領事館がなくて、英國人に日本代理領事を委任してあつたので、何かと不便であつた。それで、不肖は日本に歸つて後、時の首相大隈侯爵に面會し日本人の海外發展を期する爲め、各國樞要の地に領事館を増設し、一面には語學を奨勵せられたき希望を懇談したのであつた。幸ひ不肖の希望は實現して、コロンボにも日本領事館が設置せられたので、今日は萬事好都合になつた。

コロンボ見物

次で、ミカド商會主沼野氏を訪問したが、氏は人格の具はつた人で、一見舊知の如く感じた。其懷舊談に依れば、「曾て非常なパニツクに遭遇した時、東京銀座三枝氏の寛大な援助で、今日あるを得たのである」と、今も猶心から三枝氏の恩義を感謝して居られた。不肖は此美談と共に其人格に惚れ込んで、今後取引をする事とした。

午度は沼野氏が自動車で市中、郊外を隈なく案内せられ、久し振りで熱帯の風物に接したが、何れも珍しいものばかりで、一々細かに記憶もしないけれど、内地の動物園に數疋飼養されて珍しがられて居る鳥位の大きな蝙蝠が、無數に樹の枝にぶらさがつて居るのは實に奇觀であつた。

セーロン人

此セーロン人は印度人の中でも最も發達して居るので、印度本土より分離して、別個の

政廳が置かれて居つて、總督其他樞要の人々を除いては、官吏も總てセーロン人である。そして、外國人に對する取締が極めて嚴重で、一日以上滞在する者は、警察の許可を受けねばならぬから、なかく面倒である。

又セーロン人の中で、長髪を束ねて新月形の籠甲の櫛をさして居る種族は、特別の資格があつて、古來よりの純セーロン人として誇つて居る。——因に、印度に於て、釋迦の佛敎が今猶守られて居るのも、セーロンの此種族とビルマ人種だけである。

終年米を作る

二十七日は午後七時二十分發の汽車で、釋迦の齒を葬つてあるといふキャンデーの舊都を訪問した。キャンデー洲はセーロン島中で最も古くから發達した地方で、山間の僻地まで悉く開墾されて居る。

時、恰も米の刈入れ時であるが、熱帯國だけあつて、一方では米を刈入れて居ると、一方では水田を耕作して居り、又一方では田植をするといふ風で、雨が降つて水さへあれば

一年中米が穫れる調法さてある。加之、日本では高價を稱へる種々の熱帯の草花が、今を盛りに咲き亂れて居るなど、一見甚だ羨しく感じた。

キャンデーの舊都

キャンデー驛に着くと、數十臺の馬車と十臺ばかりの自動車に客待をして居つたから、馬車を雇つて、半哩ばかり隔たる寺院に向つた。こゝは、舊玉城のあつた舊都で、現は宮殿などが遺つて居り、何となく奈良の都を偲ばせるのである。

先づ寺院に近き小湖の畔の一流のホテルに休憩して、午餐を認めた後、寺院に参詣したが、何處も同じ案内者の群が客を待つて居るので、料金をきめず、其一人に案内を頼んだ處、料金の高い事、種々の口實を設けて、五ルーピー暴利れた。そは、花賣娘が澤山居つて、案内者と共謀になり、一々花を供へさせるのであるから、今後参詣せられる人々の爲め誌しておく。

さて、今度は自動車を雇つて、キャンデー湖畔を一週し、植物園を見物したが、園内に

在る竹の種類が多い事は意外であつて、一の新智識を與へられたのである。尙、此植物園から半哩隔たる處に、小チヨコレート工場があるので、運転手が「御案内致しませうか」と勧めたが、汽車の時間が許さぬので見合せ、午後七時コロソボに歸着した。

行渡つた森永ミルク・キヤラメル

二十八日は日本領事館の竹内領事代理の案内で、博物館を初めとして、市中隈なく見物したが、森永ミルク・キヤラメル其他我社の菓子は能く行き渡つて居つた。——前日のキャンデー行に於ても、各停車場ごとに、必らず森永ミルク・キヤラメルがおかれてあつて賣子が聲高に呼賣して居つた事は、最も愉快に感じた處であつた。

博物館で珍しく感じた事は、婦人の足輪の各種を集めてあつたのと、保護色、保護形の標本なる生きた昆蟲類で、昆蟲學に門外漢なる不肖も、造化の妙を感じたのである。

さて、其夜は竹内領事代理、岩倉書記生、沼野氏、同夫人、大野氏、同夫人をホテルに招待して、晚餐會を催した。

英國治下の印度人は幸福だ

不肖が此地に來つて、最も強く感じた事は、英國政府の下に支配される印度人の多數が殊に幸福であるといふ一事である。

印度にも種々の宗教があつて、其信仰は到底日本人の想像も及ばぬ處であると共に、人種的差別、階級的差別が厳しく定められて居る爲め、同じ印度人でありながらも、互ひに絶對に交際をせぬ風習がある。それ故、階級が一段違つても、上級者が下級者に對する態度は、實に嚴しいものがある。一例を挙げると、自動車の運轉手になる者と、俵夫や馬子は階級に相違があるのであつて、自然、運轉手の方に無理があつても、却つて馬子は運轉手に打擲され、而も、地上に跪座して謝罪するのである。かやうに、階級的差別が甚だしいから、印度人の奉公人は多數に雇ひ入れなければ、一家の用を足せないで、實に不便である。譬へば、料理場には掃除人階級の者が足を一步踏み入れても穢れるといふので、絶對に入らせないのである。實に、下層の印度人は同じ人種の間にて犬猫牛馬よりも劣

等に見做されてある故に、……之を平等に保護する者は英國人である故に、假令印度人の中の少數に不平家があるとすると、三億に達する印度人の大多數は英國政府の下に於て全く幸福であると考へられるのである。

こは、日本にも好い手本である。日本も士族とか、平民又は新平民とかいふ觀念を全くないやうにしたいもので、差當つて、士族、平民の族籍だけは、速かに國家の爲め取り除かねばならぬ。

大森林帯の汽車旅行

三月一日午前六時十五分コロソボ發の汽車に投じて、見送りの沼野氏、大野氏及びタンビー・ビレー氏等に別れを告げ、ボンペーに向ふ。汽車はセーロン政府の經營にかゝるものである。

窓外を見渡せば、キャンデー方面と趣きを異にして、未開墾の鬱蒼たる大森林帯であるから、種々の花鳥目新しく、又時には大きな猿の樹から樹へと飛び廻るのを見受けた。

それで、不肖は考へた。——
日本の製菓業者其他の商人が景品附賣出しを行つて、伊勢参宮や箱根遊覧などを繰返すよりも、百尺竿頭一步を進めて、印度遊覧券附賣出しをするが好いと。若し之を實行し得たならば、必らずや、我國に於ける各種の製菓業者及び販賣業者を啓發する點が多いであらう。

夕刻に及んで、セーロン島の一端なるクライマンナーに到着し、それから渡船二時間ばかりで、對岸のダンネスコーテに着いた。愈々これからが印度大陸の旅行に入るのである(因に、コロンボから對岸のチュチクリンに渡つて、印度大陸に入る線もあるのである)

思ひもかけぬ菓子之の重税

ダンネスコーテには税關吏が出張して居つて、旅容の手荷物を調べるがそれがなかなか嚴重である。一行中に二人の佛國人があつて、鐵砲を携帶して居つたが、英語を話し得ない爲め意思が不通で、税關に出張せる陸軍士官の手に没收されてしまつた。寫眞機の

検査も嚴重であるが、鐵砲などは成べく携帶せぬが好いと思ふ。

不肖の携帶した菓子の見本も、検査の結果、三十八ルーピーを課税されたが、規定に依ると、菓子の輸入税は三割であるから、思ひ掛けなく大金を課せられた爲め、非常な困難に逢つた。そは、コロンボ出發の際、セーロンの通貨は印度大陸でも通用するとの事であつたから、其心算で居つたが、此地の埠頭に兩替屋が店を張つて居るので、不思議に感じながらも、半信半疑のうちに、少しばかり兩替しておいただけで、而も、最早や汽車の出發時間が切迫して居り、如何ともする事が出来なかつた。

こゝに、一寸スツバぬいておくが、印度人の官吏は英國人の前ではなか／＼忠義振るけれど、裏面では袖の下を貰ひたがるのである。故に、印度旅行には此邊の呼吸を心得て居らぬと、時々手違ひが生ずるのである。

羨望すべき家畜の豊富さ

二日、汽車中から見た沿道の風俗は、セーロン島のそれと、別段に變つた點がないやう

であるが、此大陸はヒンヅー教徒（バラモン教）が大部分を占めて居るので、二箇所で異様な祭禮を見た。（此事に就ては、ボンベール見物の項に詳記する）

それよりも、不肖が最も羨しく思つたのは、家畜が到る處に豊富な點で、各戸に數千とも數頭或ひは數十頭の牛、水牛、山羊、綿羊を飼養して居り、山野には數百頭、數千頭のそれを放牧して居るのを見た。假に印度の人口を三億と見て、一人當り一頭を飼養して居るとすれば、實に三億頭の家畜が全印度に棲息して居る計算になるから、どうしても、實際はそれ以上の頭数が飼養されて居る事に想定される。彼の米國は家畜の飼養が盛んであるけれど、此印度の實況を見るに及んで、米國に勝りこそすれ、決して劣りはせぬと感じた。それで、種々調査した結果、統計表に現はれて居るだけで、牛が一億頭、其他の家畜が五千萬頭、全印度に飼養されて居る事を確め得たのであつた。

マドラスの押問答

午後八時二十分マドラス驛に着いた。こゝで、大印度半島鐵道會社の線に乗換へるので

あるが、驛と驛との距離が半哩もあるので、大急ぎで馬車を飛ばし、漸く汽車の時間にあつたものゝ、『手荷物の賃金を拂はねば乗車を許さない』と驛員が頭張るのである。併し、コロンボでトーマス・クツク社に依つてボンベールまでの船車通券を求めた時、手荷物の賃金も合せて支拂つておいたので、其證明書を示したけれど、驛員が言を左右にして乗車を拒むので、追々時間も切迫する處から、よんどころなく、なげなしの印度通貨で手荷物の賃金を支拂つた。（セーロン通貨は受取らない）

不肖は九年前にも此マドラスで困らせられたが、其時は一日滞在して視察したから、土地の人氣を知る事が出来た。蓋し支那では廣東人、印度ではマドラス人のスマートな事、實に群を抜いて居る。そして、外國品で賣行のよいものは、直ちに彼等が模造して賣出すから、餘程注意しなければならぬ。

恐らく、此地はマドラスといふ語の本場ではあるまいかと思ふ。實際、マドラスは狡猾野卑で、人氣の悪い所である。けれども、印度半島方面に於ける第一の繁華な市街で、商況もなかく活氣があるから、印度に旅行すれば是非視察すべき價值がある。

やがて、汽車は午後九時十五分ボンベーに向つて出發した。

印度の「朝顔日記」

日本では漸く綿入から袷に遷る時季であるが、頃しも三月二日の夜、沿線到る處に螢の飛びかふを見た。それは、數千萬とも知れぬ螢の群が、彼方、此方に明滅して飛翔する光景は實に壯觀を極めたものである。

そこで、不肖はツイ氣を取られて、一寸「朝顔日記」を思ひ出した。

「一年、印度の螢狩、色くろく〜と黒焦げに、こがれ染めたる印度姫、耳や鼻や口にまで輪をかけて、それでも未だ飽きたらず、腕輪、足輪と輪に輪をかけて、惚れられ惚れたの物語、聞くもなかく〜聞き黒し」

汽車中の悲喜劇

三日は汽車中で飛んだ悲喜劇を演じた。

前にも述べた如く、セーロン通貨が印度大陸でも通用すると聞いた爲め、ダンネスコートで少しばかりを兩替しておいたが、間もなく遣ひはたしてしまひ、而も、セーロン通貨は通用しないので、全く困つてしまつたのである。それで、各驛に停車する都度、驛長に兩替を頼んで見たが、何れも田舎の停車場の事として、更に兩替が出来ないので腹がへつても物を買ふ事は出来ず。此日一日、パン一斤に茶を二杯飲んだだけで、不肖も、森も、飛んだ千松氣取りになつて、何となく瘦せたやうな氣がした。

「腹はへる〜、マドラスは困る、

さきのボンベーが待ちかねる。」

尤も、不肖等ばかりでなく、同車した一人の英國人も同様に、兩替が出来ないので困つて居つた。

其兩替の事であるが、日本を出てからは、上海、香港、シンガポール、コロンボ、ダンネスコート、それから、佛領安南、シヤム、マニラ、ジャバといふ風に、至る處で通貨を兩替しておかねばならぬ。殊に、各國の内地を旅行する人は、如才なく兩替して、其地で通

用する通貨を所持せぬと、測らざる迷惑を蒙るのである。現に、不肖等の演じた悲喜劇などは好手本なのである。

やがて、四日の朝ボンベーに着いて、三井物産會社支店の庶務主任澤井氏の出迎へを受け、ボンベー第一の旅館タジ・マハル・ホテルに入つて旅装を解き、朝食にありついて、初めて蘇生の思ひをしたのは、滑稽のやうでもあるが、なか／＼苦しかった。

奉仕事業のタジ・マハル・ホテル

實は澤井氏が驛頭で「これよりタジ・マハル・ホテルに御案内ませう」との事であつたから、不肖は獨り合點で、田島春といふ日本婦人が此地に成功して、旅館を経営して居るのであらうと想像したのであるが、意外にも左にあらすして、舊印度王侯の美術的宮殿の様式を取つて建築された爲め、其宮殿の名に依つて呼ぶのである事がわかつた。(詳しい事はアグラ見物の項に誌す)

そして、ホテルは印度第一の富豪であり、又大事業家たるタタ氏の經營であつて、客に

對する待遇が誠に懇切で、宿泊料も頗る安く三度の食事付きで、一晝夜六ルーピーより十ルーピーまでである。(即ち日本の通貨にして、三圓五六十錢より六圓までである)

聞く處に依れば、此ホテルは損失続きであるそうだが、タタ氏はボンベーの爲め、將た印度の爲め、奉仕的の信念を以て、損失などは少しもお構ひなく、ホテル事業をやるとの事で、萬事に能く行届いて居る。それ故、ボーイの如きもチップを欲しがらないで、實に親切にしてくれた。

施設完備したボンベー

兎に角に、腹も満たされ、生命は大丈夫で、再び四邊を吹き飛ばすだけの勇氣を出す事が出来た。

そして、四日は日曜日で、商談が出来ないから、三井物産會社の澤井氏、中井氏等の案内で、公園、動物園、植物園、其他の名所を初めとして、市中全體を視察した。

恐らく、此ボンベーは東洋第一の都會といつても好からうと思ふ。勿論、人口の點に於

ては東京の三分の一強に過ぎぬけれど、流石に英國人の指導經營の下に在るだけ、高壯な建築物が楯比して居り、且つ、上水、下水の設備は固より、道路の完全な點は驚歎するの外はない。又自動車の如きも、現に一萬五六千臺を數へて居るのである。——そして、十年後には現在の二倍に達せしむる計劃で、六億數千萬ルービーの公債を募集し、現に海面埋立の工事中であるから、其竣工を告ぐる曉には、眞に理想的の大都會となるであらう。

目覺めよ自惚強き日本人

彼等印度人は曰ふ。「東京の道路は雨が降ると田植が出来、晴天になると沙漠のやうであるそうだが、事實は果して如何」と。之に對して、口惜しいけれど、事實は到底蔽ふべからざるものがあるので、止むなく口を緘むの外はないのである。

見よ、實際に於て、印度は今や東洋一の健康地となり、益々繁榮に赴き、世界的市場としての印度になつて居る。之に反して、現在の日本は單に日本人だけの日本に止まつて居るのである。

嗚呼、自惚強き日本人よ。須らく長夜の迷夢より醒めて、印度に來るべし。彼の歐米の目を視察して、能事終れりと考へるのは愚である。我が日本人としては、どうしても、此三億の人民が駸々たる文化の進歩に伴ひ、刻々に文明的施設を進めつゝある印度を、視察せずには済まず事は出来ない筈である。彼の非活動的な長袖寬衣を着けて、懐手をしつゝ散歩するやうな者は、此地に一人も居ないのである。自動車やバンクした位の騒ぎで、黒山の如く寄り集まつて來る日本人は、此印度の文明に學ぶ處がなくてはならぬ。

片爲替になつた印度貿易

ボンペーに置かれてある三井物産會社支店を初めとし、其他の日本の銀行、會社の支店は事實に於て、悉く棉花取引の爲め設けられて居る感がある。現に、我國から年々印度に向つて支拂ふ棉花代金は、數億圓の巨額に達して居るに拘はらず、日本から此國に輸出する商品の價額は、極めて僅少に過ぎないのである。而も、其僅少な輸出品さへも、歐米品の爲め日に月に驅逐され行く状態で、今日では全く片爲替となつて居る。

偶には日本品の輸出される物があるとしても、それは、概ね神戸あたりに在留する印度商人の手を経て輸出され、直接に日本人の手から輸出される物は、次第に影を潜め去るといふ有様である。不肖は我國の對外輸出貿易が不振を極めつゝある事を歎ずると共に、印度人が實業家としても、世界的に活躍して居る事を稱せずには居られないのである。

何故に日本人は成功せぬか

そこで、ボンベーに於て、中流以下の日本人が何故に成功し得ないかは、大に考究すべき價値ある問題だと思ふ。

不肖は三井物産會社の重役平田氏に面會した時、談じた事であるが、此地に於ける日本人の營業は棉花の買入が重なるものであつて、何れも第一流の銀行、會社の支店のみであるから、日本人は此地で上流の位地を占めて居る。故に、これらの銀行、會社の社員は假令其懷中は無一物でも（オット失敬）電車に乗る事さへ日本人の恥として、自動車でなければ通勤しないのである。それで、飽くまでも眞劍に、質素に活動しなければならぬ中流以

下の日本人も、自然と上流の風習を學ぶやうになるから、生活費が大會社と同様に高く掛かる。其結果は當然に、折角日本人が實業界に於ける勢力を有するボンベーでありながらも、日本品を賣り擴める事に成功しないのであつて、誠に歎息すべき事である。

我社も、印度の要所々々に社員を派出する計劃があるが、經費問題は兎も角として、派出の社員が紳士的交際を見習ふべき事を痛心して居る次第である。

印度では印度に同化せよ

日本人の紳士的生活に反して、印度人は實に質素で、一年に五十萬圓や百萬圓位の營業をする者は、電話もなく、勞務と勤勉とを惜しまず、熱心に營業に努力して居る。

不肖は曾て聞いた事があつた。——臺灣に於て生蠶と戦ふには、矢張り生蠶と同様にならなければならぬと。

されば、印度に於ても、印度人と同化する程の決心でなければ、資本の薄弱な者の成功は覺えないのである。

勿論、印度に派遣せられて居る銀行、會社の支店長、社員諸氏ばかりを責めるのは酷である。先づ資本家、重役諸氏が覺醒して、社員待遇法を改めなければならぬ時期が迫つて居る。不肖は他日資本論として、此問題に就て私見を述べたいと考へて居る。

印度人商店を歴訪す

五日は三井物産會社支店を訪問して、船津支店長に面會したが、丁度平田重役が來合せられたので、種々商談を遂げた結果、今後は我社製品の爲め熱心に努力せらるゝ事になり直ちに社員の同道で、印度商人の店に見本を持つて廻つた處、前途有望である事の確信を得たのであつた。

又、九年前に面會して以來、引續いて我社の菓子を取扱つて居られるアブラハツセン氏を訪問したが、久し振りの事として同氏も非常に喜ばれ、互ひに懷舊談をした後、注文を發せられた。

斯くの如く、此地に於ても我社製品の賣れる見込は十分あるのである。

輪に輪を掛けた印度婦人

聞けば、此三月一日からヒンヅー教則ち大多數の印度人を擁する宗教の祭禮が始まつて居るそうであるが、其風俗の奇々怪々なる、確かに一見するの價値がある。不肖は圖らずも此好機會に夾合せて、幾分商業上の参考となし得た事を喜んだ。

而も、ヒンヅー教の婦人は、耳輪、鼻輪、腕輪、足輪といふ風に、矢鱈に輪を掛け又は嵌めて居るが、資産ある上流の婦人程、大きな輪を用ゆるのであつて、彼等が頗る得意らしい容子をして居るだけに、不肖は一見してゾットしたのである。

派手好みのパーシー人

ボンペーで最も美人らしく見える婦人は、パーシー人種であるが、彼等は絹物の外は決して身に纏はない。サリーと稱して、大幅の羽二重で長さ二丈のものに、縁を刺繍模様にしたものを身體に巻き付け、其一端を頭から垂らした姿はなかく優美である。

其サーリーは、上流社會は佛國織物、中流社會は日本織物、中流以下の社會は支那の繭紬を用ゆるとの事であるが、追々一般の印度婦人にもサーリーを纏ふ風がうつりつゝあるやうだから、日本で其道の商人が研究したならば、餘程將來有望であらうと思ふ。

或る日、パーシー人種の婚禮行列を目撃したが、花嫁を眞中に擁して、樂隊入りで市中を練り行く光景は、實に賑やかしいものであつた。兎に角、パーシー人種はなかくに派手好きである。

死人を鳥に食はす奇異な葬式

元來、パーシー人種は拜火宗であつて、十二三世紀の頃、マホメット教徒の爲めペルンヤから逐はれて、此ボンペーに移住したとの事である。けれども、ボンペーでは中流以上の位地を占めて居る爲め、特別の勢力を有するのである。彼の有名なるタタ氏も亦パーシー人種に屬して居るやうである。

さて、パーシー人種の風習として、死者の肉を鳥に啄ませる事になつて居るので、ボン

ペーの高地に其葬場が造つてある。内部の様子はパーシー人でも係員以外は見ることが出来ないやうであるが、小さい模型が禮拜堂の前に在るので、それに依つて略想像し得られる。即ち、高さ五六十尺に直径四五十尺の丸い大きな塔であるが、四個所に造つてあつて、犯罪者や他宗又は他人種と結婚した者は、それ／＼葬場を區別してあるといふ。そして、葬場の附近なる樹木や塔の上には、パウルと稱する鷲の一種が無數に群つて居つて、死者が運び込まれるのを待ち、其肉を啄み食ふのである。

或る日、パーシー人の葬式を見たが、多勢の人々が白服で、死者に白い覆ひをして昇いで行くのである。それ故に、葬場より十四五丁位の所に近くと、待ち構へて居つたパウルが好餌至れりとして、一齊に飛び翔つて、葬列に迫つて來るとの事である。——不肖は此パウルを見てから、鷲の繪は掛軸までも嫌ひになつた。

船てカラチへ

六日の夜は船津支店長の社宅で、日本料理の懇篤な饗應を受けた。船津夫人も共に心を

盡して歡待せられた事を感謝する。

七日はトーマス・クック社で、カラチからデリー、アグラ、カルカッタ及びラングーンを經由して、シンガポールに至る切符を買ひ求め、明日カラチに向つて出發すべく、用意を整へた。

さて、八日は早朝に三井物産會社支店を訪問して、平田重役、船津支店長其他の社員諸氏に滞在中の好意を謝し、午前十一時英印航海會社の汽船バモラ號（一千八百噸）に乗込んだが、藤井、澤井の兩氏が見送りせられて、種々便宜を圖られたのは感謝に堪えない。特に、澤井氏には、『腹はへる〜』でボンペーに到着した朝より出發まで、不肖の爲め常に何くれとなく懇話を盡された事を重ねて感謝する。

實は、カラチへは汽車で行かうと思つたのであるが、日本人で船路を行く者は滅多にならぬ事でもあり、又汽車よりも船が樂のやうに思はれた矢先、此バモラ號が折よく出帆するので便乗した。此船は印度沿岸より、ベルシヤの各港を経て、メソポタミヤのバスラ港に通ふのであつて、絶えずアラビヤ海を航行して居るのだ。

やがて、船は午後二時にボンペーを解纜した。

アラフ族に對する觀察

九日午前九時ベラワルに着いて、荷役をなし、午後零時五十分出帆、午後二時マンガロールに寄港して、再び荷役を濟ませ、午後四時過ぎ出帆して、カラチに向つた。

船客の大部分はアラビヤ人で、次が印度人、ベルシヤ人、メソポタミヤ人で、其外にはベルヂスタン人、アフガニスタン人なども乗込んで居り、又メソポタミヤ駐屯の英國將校二三名と、兵士十名が乗つて居つたが、不肖等と英國將校は一等で、其他は總て二等であつた。

此航海中に於て、不肖はアラビヤ人、ベルシヤ人、メソポタミヤ人等に就て、觀察を試みたのである。——日本人で、アラビヤ人が如何なる人種であるかを知る人は少いてあらうが、將來印度よりベルシヤ、アラビヤ及びアジア・トルコにかけての貿易上、好參考になる事と信ずるから、不肖の觀察した處を誌さう。（これらの人種は宗教上からも、現

在の實勢力からも、アラブ族として誌す事にした)

アラブ族は世界的貿易家である

『舊約全書』創世紀に、バビロンの塔が破壊された後、メソポタミヤにアブラハムといふ敬神家があつて、其人がカルデア方面より今のパレスチナ及びエジプトを彷徨して居る時イシマエルと呼ぶ男子を設けたが、其イシマエルが成長の後アラビヤに行つて、其祖先になつたと誌されてゐる。

左様に、アラブ族は四千年の古い歴史を有する人種であつて、早くより隊商を組織し、小アジア高原から印度、エジプト、或ひは地中海の沿岸にまで、世界的貿易に従事して居つたのである。現に、ボンベに於ても、普通の各種營業はアラブ族に依つて經營され、マレー半島及びジャバに於ても、地主、家主はアラブ族が多數を占め、其或る者はシンガポールで第一の金満家となつて居る次第で、其勢力は實に侮り難いのである。

彼のマホメット教の宗祖マホメットは、此アラブ族より出たのであつて、四億の信徒を

有する同教の聖地メツカはアラビヤに在るが、マホメット教徒は其所に一生一度の參詣をする爲め、其費用を得るの目的で、孜々として勤勉、貯蓄をするのである。そして、アラブ族はマホメット教徒の中でも、最も智識ある階級に屬し、絶対に酒を飲まない程に、道徳堅固である。故に、アラブ族と直接取引をすれば、ベルシヤよりアラビヤ、メソポタミヤ及び小アジアの方面に、日本商品を賣り擴める爲め、非常に便宜があらうと思ふ。

熱心に森永の菓子を歓迎す

不肖は船中で、ベルシヤ人、メソポタミヤ人、アラビヤ人、アジア・トルコ人等と懇意になつたので、英語を解する一人のアラブ青年に通譯させ、携帶して居る見本の森永ミルク・キヤラメル、森永ビス、其他各種の菓子を取り出して、彼等に試食すべく勧めた處『此キヤラメルには豚の脂肪が混せてないか』と尋ねたから、『我々日本人は絶対にそんな不潔物を使用しない』と斷言すると、彼等も初めて安心して試食し、『之は誠に美味で好い菓子であるから、郷里への土産に買つて歸りたい』と、何れも熱心に懇望するので、

餘分に持つて居つた品を取り混せて、三十七ルービーだけ賣つてやつた。

其際、彼等は不肖に向つて、『メソボタミヤのバスラまで一所に行かないか。必らず自分等が盡力して、特約店を周旋してやる』と、誠意を以て勧めたので、不肖も頻りに心が動いたけれど、今回は日を期して、ジャバに行かねばならぬ先約があるから、次回の旅行に、バスラを訪問する事を約して、彼等の好意を辭した。

彼等は日本人と親密に交際し、且つ、取引する事を希望して居るのである。そして、不肖は此航海に依つて、彼等と懇意になつた事の爲め、將來に對する好い觀察が出来たのを喜んだ。

マホメダンの珠數

猶、船中の徒然に、マホメット教徒なる富豪が頸から胸に垂らして居る琥珀の大きな珠數の價格を尋ねると、五百ルービーから一千ルービー位であるといふから、之を日本で製造すれば、安價に出来るかも知れぬと話した處、『我々の珠數は總てマホメダンが製造し

たものでないと用ひない』といふて居つた。けれども、日本で若しマホメット教徒向に製造すれば、必らず賣れる見込があると思ふから、斯業者が調査、研究せられん事を希望する。

因に、マホメット教徒は絶対禁酒であると共に、豚を食ふ事も嚴禁して居る。不肖は未だマホメット教のコーランを知らないけれども、『舊約全書』の出埃及記に、モーゼの法律として、豚を穢れたものとして禁じてあるのである。

有望なカラチの將來

船は十日の午後十時カラチに着いたが、最早や時刻が遅いので船中に一夜を明かした。さて、十一日は日曜日なるにも拘はらず、午前八時半に、三井物産會社支店の首席大石氏並に岡田氏等が、特にランチで出迎へられ、埠頭より一哩餘りの社宅へ、自動車で案内せられた。

此カラチはベルチスタンの國境まで僅かに十五哩であつて、英國が印度、ベルチスタン

を統治する上に於ても、將たアフガニスタンを掣肘する上に於ても、軍事的に最も重要な港であるが、一面には、猶一層重大なる經濟上の使命を帯びて居るのである。即ち、印度二大河の一であるインダス川の咽喉に接近して居るので、印度大陸の農作物は悉く此カラチに集散せられるのみならず、アラビヤ海及びベルシャ灣の關門である爲め、税關、倉庫も實に大規模で、ボンベークアルカタに比較しても、決して遜色のない設備である。殊に、印度政府は近年インダス川より廣大なる流域の平野に灌溉水を縱横に導くべく、大工事に努力しつゝあるから、遠からざる將來に於て、カラチ方面の大平原は印度第一の農産地となるであらう。其曉には、無限に豊富なる農産物は、印度三億の人口を支へるばかりでなく、世界に向つて供給し得べく、而も、それらは總てカラチを経由するのであるから、やがて、ボンベークアルカタに劣らざる殷賑な大都會となる事、蓋し期して待つべきものがある。——勿論、現在に於ても、なかなか活氣を呈して居る。

我社の菓子に確かに賣れる

其日直ちに、岡田氏の案内で、菓子店や食料品店を五六軒訪問したが、幸ひ相當の注文があつて、此地でも我社の菓子が有望である事の確信を得た。

元來、こゝまでは、日本商人が餘り入り込まないのであるが、今後は是非とも各種の營業者が視察せられん事を望む。そは、必らず得る處ある事を信するのである。

十二日も、前日に引續いて、四五の商店を訪問し、それ〴〵注文を受けたが、或る店で英國人が商談に来て居つたから、暫らく待合せて、其應對振りを觀察すると、此邊の印度人はアラブ族に屬するので、英國人と雖も對等で、一步も譲らないのが痛快に感ぜられた。

天下泰平のシンボル

カラチ附近一帯はベルデスタンよりの沙漠続きである爲め、荷物の運搬には多く駱駝を使用して居るが、荷車を駱駝に牽かせる光景は眞に悠々たるもので、其のんきらしい状態は天下泰平の象徴といふの外ない。

不肖に若し繪心があれば、此のんきな滑稽な、樂太振りを寫して、諸君をしてドット噴

き出さしめたてあらうが、生來彩管に親します、眼前に天下無二の珍妙な光景に接しながらも、之をスケッチする事を得ないのは頗る遺憾である。

猶、市中を廻るうちに、ペルシヤ人の敷物商店が澤山あつて、盛んに取引されて居るのを見たが、これらは多く米國に輸出せられ、高價に賣買せられるとの事である。不肖は會て米國の世界博覽會、ボストンの博物館などで、ペルシヤ羊毛織の敷物の美術的價値を見たのであるが、今や其本場に来つて、種々の精巧な品を見、忽ち好奇心に驅られて、之を購入した。

花環を頸に掛けて

十三日午後六時十五分カラチ發の汽車で、デリーに向つて出發した。大石氏を初め、高橋、角谷の兩氏及びカラチ人なるマタル・ムチャート氏、マタブライ・チヨハマル氏も見送られて、珍菓一籠を贈られ、且つ、花環を不肖等の頸に掛けて、首途を祝された。(印度の風習として、親密と敬意とを表する爲め、種々なる花瓣に絲を通して長く繋ぎ、それ

を相手の頸より胸に掛けて、錢にするのである)そして、岡田氏が特に同行して、東道の勞を執られた事は、深く感謝に堪えない。

孔雀が飛ぶ印度の大平野

愈々印度大陸の汽車旅行に入つたが、見渡す限り一望萬里の大平野で、こゝに生活する人々で他地方を知らぬ者に向ひ、山や川の話聞かせても、恐らく、信用しないであらうと思ふ程である。而も、此大平野は一面の小麥畑となつて居り、又民家には家畜、家禽が盛んに飼養されて居るので、不肖は甚だ羨しく感じた。

そして、此邊には孔雀が澤山棲息して居つて、野や畑に雛を連れて餌を漁つて居るのは珍しい光景であつた。

汽車では別にする事もないので、種々な感想が湧いて來たが、切に感じた事は目のあたりなる英國の領土の廣大なる事實である。

英國の領土は全世界に擴められ、それらは假令領土でなくとも、英國の勢力の下に置か

れてあつて、世界に於ける總人口の三分の一弱は、實に英國の支配を受けつゝあるのだ。近くは、ペルシャも亦英國の勢力圏内となりつゝあつて、東洋で英國の手が伸びない國は唯、日本一國位になつたのである。それで、彼の米國の富が莫大であるとしても、到底英國には及ばない事を感じしめられた。

駱駝の價格

十四日も終日汽車中に在つて、窓外に大平野を眺めるばかりで、頗る變化に乏しい旅行であつた。

此日、或る驛で一人の英國人が乗車したが此印度大平野に住む人のやうに見受けられたので、「職業は何をせられるか」と尋ねると、「元は陸軍の尉官であつたが、後備役になつたので、其儘印度に永住する目的で、現に農業を營んで居る。それで、數日前から駱駝四五頭を買入れる爲め旅行中で、今は其歸り途である」と答へた。そして、駱駝の價格は如何程であるかと聞いて見ると、一頭に就いて五百ルーピーから八百ルーピー位であると

の事であつた。

デリーの天幕住ひ

十五日午前八時首府デリーに到着し、直ちにメイデンス・ホテルに投宿した。ホテルには豫めカラチから電報で通知してあつたけれど、丁度印度議會が開會中で、各ホテルの總てが満員である爲め、室に入れ切れぬ旅客は、數十の天幕を張つて、そこに收容する事になつて居る有様で、不肖等も天幕組の一人となつた。

さりながら、此地では三井物産會社の取引先なる印度の紳商達から出迎へを受け、且つ非常な歡待を蒙つて、市中の商店訪問に便宜を得たのみでなく、懇切な案内に依つて、名所舊蹟を見物する事が出来たのは、感謝に堪えぬ處である。(因に、デリーの紳商達から一尺三四寸位の眞鍮の皿に、印度式の菓子を出盛にして贈られたが、殆んど砂糖のみにて製し甘味強き爲め折角の好意も食べる事が出来ないで、ホテルのボーイどもにやつた處彼等は非常に喜んで居つた。)

新市街續々建設せらる

此デリーは流石に印度總督の首府だけあつて、都市計劃に依る大規模の新市街が盛んに建設せられつゝある。位地はカシミヤ州に通ずる咽喉である意味で、其州名を冠したカシミヤ門に始まつて、理想的の中央公園あり、總督府を始めとして、議事堂、諸官衙、會社銀行及びホテル等の如き、英國人側に屬するものは總て新市街に於て經營されて居るから印度人も自然と新市街方面に遷つて行く傾向が見える。

牝牛の多い印度の都市

元來、印度の各都市を通じて、舊市街は殆んど一寸の空地もないまでに商家櫛比し、人間の多い事と、牝牛の多い事には一驚を喫するが、印度人は動物愛護心強く、特に、ヒンヅー教徒は牝牛を人間の母として敬信して居るので、商家の軒先にも、牝牛が大切に取扱はれて居る。

其例には、街頭に印度人の子供が菓を束にして、一束何バイサーとして賣つて居るが、牝牛を敬信するヒンヅー教徒は、其菓を買つて、あらゆる牝牛に與へる習慣となつて居る。そして、夕刻になると、數十頭或ひは數百頭づゝ、牧夫の後に跟いて、のそり／＼と自分の牛舎に歸つて行くのであるが、それが、此デリーには特に大多數であつて、到底他の都市で見られない盛觀を極めるのである。

印度人は殺生戒を守る事が極端な程であつて、ヒンヅー教徒の市街に商店を訪問すると牝牛の多い爲め蠅の盛んな事は又格別であるが、殺生戒の爲め蠅を殺す事が出来ないのである。それ故、商談で停車中に、自動車の表面が一寸の隙間もなく蠅も以て被はれた事の如き、嘘のやうであるが、事實なのである。

要するに、デリーの舊市街は非常に繁華であるけれど、そこには牝牛と、乞食と、蠅がなかく／＼勢力を持つて居る。

我社製品の見込は十分だ

例の如く、菓子の見本を携帯して、菓子店及び食料品店を十軒ばかり訪問した處、其中の二軒を除く外は、日本といふ國のある事を知らないで、見本を見せても、不思議そうな顔をして居つたが、不肖等の説明に依つて、今後はカラチの三井物産會社支店に注文する事に約束してくれた。

他の二軒では既に森永ミルク・キヤラメルを初め、我社の製品數種を取次いで、販賣しつゝあつたので、不肖は甚だ氣強く感じたのである。——そは、努力すれば見込のある事がわかつたからである。

猶、デリーに着く前、汽車の窓からデリー・ピケット製造所と書いた工場を見受けたので、紹介を求めて、其工場を參觀したが、經營も、製品も、眞に幼稚なものであつた。けれども、之も好い参考になつた。

歐米品は能く行渡つて居る

英濠口品を初めとして、歐洲品、米國品は能く行き渡つて居る。蓋し歐米人は自ら見本を

携帯して、抜目なく注文取りに廻つて居り、又日刊新聞や雑誌に廣告するばかりでなく、ポスター或ひはビラを撒布するなど、宣傳にも努力して居る。

それで、デリーは印度大陸の首府であるから、市街電車に我社製品の廣告をしようと思つたが、最早や歐米人の手で契約済となり、廣告の場所を塞がれて居つたから、遺憾ながら断念した。

因に、ボンペーの市街電車には、我社の廣告を契約した。カラチも同様交渉方を依頼しておいたが、若し契約が出来れば、廣い場所が占領されるから好都合である。

鹽稅に惱む印度議會

さて、メイデンス・ホテルには議會に出席すべく各洲の議員が宿泊して居つて、それぞれに、種々の異つた服装をして居るので、珍しく感ぜられた。

本年の議會に於ける重要問題は、政府提出案なる鹽稅引上問題であつて、印度人側の議員が反對せる爲め、行惱んで居るやうであつた。併しながら、英國人も、印度人も、ホテ

ルの食堂では和氣霽々たる態度で、食卓を共にして居つた。——丁度好い機会であるから印度議會を參觀しようかとも思つたが、營業の目的以外に、一日たりとも安閑として過すべきてないから、遂に斷念した。

不肖は營業の爲め印度に來たのであつて、貴重な月日と、莫大な金錢を費して、見物に來たのではない。即ち、不肖の旅行はいはゆるのんきな外遊でないから、デリーの印度人なる紳商及び東道せられる岡田氏には、名所舊蹟の見物に案内を受けても、成べく謝絶したので、詳しく書く事は出來ないけれども、以下、少しくデリーの見聞を紹介する。(情としては誠に忍びなかつた故、こゝに改めて諸氏に多謝する)

日光も及ばぬ結構の遺蹟

印度は四千年前に於て、既に文明の進んで居つた國だから、其遺蹟の見るべきものが澤山ある。殊に、宏大な美術的の建築物は、眞に人目を驚かすものがあつて、日本で結構の本家となつて居る日光なども、列底足許にも及ばぬであらうと思ふ。譬へば、古代宮殿の

如きは日光の比でないが、白蠟石に象徴した無數の寶石類は、最早や手の届く限り盗み去られて、天井其他手の届かぬ所だけに、燦爛として現存して居る。これらは現に英兵によつて保護されて居るので、今後は盜難を防ぎ得られるであらう。

カシミヤ織物

カシミヤのシムラ方面から、絹織物商人がデリーに出張して居つて、盛んに取引されて居るが、外國人の觀光團などは、能く之を買つて行くそである。ホテルの支配人の話に依ると、英國人は厳密に品物を吟味し、高く買はされるやうな事はないが、米國人と日本人には二三割高價に吹き掛けるとの事に、不肖は之を買ふ事を斷念した。けれども、其品物を見ると、印度獨特の美術的な染模様の絹織物もあつた。

莊麗なアグラのタジ・マハル

十六日はアグラを視察した。

こゝも舊王城のあつた市街であつて、デリーとは到底比較にならぬけれども、舊王城や有名なタジ・マハルがある。

舊王城はフォートと稱して、デリーのそれと同じく、英兵の駐屯所となつて、保護せられて居る。此フォートの參觀にはホテルの證明のあるバツスを要するのであるが、不肖は迂闊してバツスを持参しなかつたので、守備の英國士官に事情を話した處、快くバツスなして參觀を許可された。結構はデリーのと大同小異であるが、矢張りこゝも善盡し美盡し、王朝の盛時を偲ばしめた。

次で、タジ・マハルを參觀したが、丁度一人の外國人が油繪に描きつゝあつた。此タジマハルは王及び王妃の墳塋であつて、宏大な建造物は悉く白蠟石を用ひ、或ひは花鳥などの模様を彫刻し、或ひは種々の圖案の透し格子とし、ルビー、サファイヤ、ヒスイ、其他の寶石類で象嵌されて居る。傳ふる處に依れば、此タジ・マハルの建造には二十五個年を費し、毎日一萬人の工夫を要したとの事であるが、其優美、莊麗なものには全く驚歎するの外はないのである。

丁度其日はタジ・マハルの祭禮で、ホールには無数の群衆が幾組にも分れて、種々な音楽で囃しながら舞踏して居つたから、不肖等も群衆に混つて見物し、拍手喝采して居ると彼等は喜んで座を與へてくれた。——何所も人情に變りはないものである。

隣室に日本人の聲

此アグラにも、印度獨特の美術的刺繡をした袋物や、婦人用及び室内裝飾用等の織物を産出するが、日本の當業者が見られたならば、好参考になるだらうと思ふ。

さて、ホテルに一休みして居ると、隣室に日本人の聲がするので、誰であらうかと伺つた處、ボンベ一の渡邊領事が泊つて居られたのであるが、其夜驛頭で袂を別ち、不肖は午後十時四十五分發の汽車で、カルカッタに向つた。

印度汽車旅行の要領

十七日午前五時十五分ツンドラ驛で、汽車を乗換えた。——途中で、ヒンヅー教(バラ

モン教)の靈地なるベナレス、佛教徒の靈地なるブダガヤを通過したが、前にも述べた如く、不肖は觀光の爲め、將た參詣の爲め、遙々印度に渡來したのでなく、商業視察を目的とするのであるから、それらの土地に立寄りずして、カルカッタに直行したのである。

それで、此日も汽車中に無爲の終日を送つたが、窓外の風物はカラチ方面の沙漠地帯と趣きを異にし、印度二大河の一たるガンジス川に沿つて駛るのだから、多少の目を慰めるものがあつた。

こゝに、印度大陸の汽車旅行に就て、内密に御注意したい事がある。それは、重要驛や乗換驛で、車掌或ひは座席係が見廻りに來て、『ハブ、ユー、スモーク』と尋ねるから、實際調子好くやれば、妥協が出來て、便利な一室を占領する事を得るのである。そうでないと、印度の如き熱帶國に於ける汽車の長旅は、實際我慢が出來ない。

カルカッタ公園の夕涼み

十八日午前六時四十五分カルカッタに到着すれば、三井物産會社支店の柴田、神戶、竹

内の諸氏が驛に出迎へられ、グレート・イーストラン・ホテルに投宿後、不肖の爲め自動車を買つて、市中を案内せられた。(因に、此ホテルは、不肖出發の際に、ボーイの全部則ち數十名がチップを貰ひに來たので、誠に閉口した。彼のボンベ一のタジ・マハル・ホテルとは雲泥の相違である)

夕刻に及んで、石田支店長が夫人と共に來訪せられ、中央公園に案内せられたが、流石の熱帶國ながらも、自動車か風を切つて疾驅し、又公園の綠蔭に涼を納れて、此身の印度に在る事を忘れたのは、特に感謝に堪えない。

カルカッタの前途

カルカッタには十八日から二十三日の朝まで滞在したので、種々なる感想を起したが、以下、二三の見聞を誌さう。

此地も眞に東洋第一の都會たる觀がある。大正三年に販路開拓の爲め來た時には、左程にも感じなかつたが、今回は特に此感を深からしめた。即ち、近時着々市區改正を行ひつ

あるから、恐らく十年後には嶄然として面目を改めるであらう。現に、中央公園の如きは、東京の日比谷公園の十倍程に擴大されて居り、其設備は殆んど間然する處ないのである。

驚くべき支那人の發展振り

此地に於ける支那人の發展振りは、九年前に不肖の見た處に比較すると、驚くべき相違である。蓋し支那人の發展は靴の製造が重なる事業である。それは、歐洲大戰の結果として印度も輸出超過が續いた爲め、俄かに富の増加を來して、印度人の生活が向上し、以前には洗足であつた者はスリツバを穿き、スリツバであつた者は靴を穿くやうになつたので、三億の人口を有する印度には、靴の需要が無限に起つたのである。併しながら、宗教の關係で、皮革の職業は穢れたものとして、印度人は絶對に手を染めない。(不肖は之を見て日本人も佛教渡來の爲め皮革事業を穢れたものとした結果、朝鮮人や支那人が我國に入り込んで、革細工をしたが、それが自然に特殊階級を生じたのでないかと思つた)

そこで、利を見るに敏なる支那人が盛んに渡來し、豊富な印度の牛に依つて、皮を鞣し靴を製造し、巧みに商機を制して、商店櫛比、眞に支那町たるの盛觀を呈するに至つたのである。(附言しておくが、印度人の中の最下級に屬する種族は、靴の製造の爲め、支那人に使役せられて居る)

日本人の商店は一軒もない

それに引替えて、日本人はボンベ一の項に述べた如く、大會社の支店ばかりで、個人としての有力な商店は一軒もないといふ状態である。

日本人は内地にのみヘタつて居つて尻屈ばかりいつて、居る爲め、遂に尻ばる所もないやうになるのである。斯く考へ來る時、不肖は覺えず聲を大にして、日本人の驕起を促さずには居られない。

因に、印度のガンニー・バッグ(黄麻袋)は棉花に次ぐ重要物産であつて、カルカッタに於ける三井物産會社支店を初めとして、日本人商會の手に殆んど買占められ、北米其

他世界各國に輸出せられて居るのだ。

梅蘭芳以上の印度劇

一夜、三井物産會社のサブエーゼントなる印度人ヌーラリニー氏から、懇篤なる招待を受けて、辭退するの失禮と考へ、三井支店の三輪氏と共に、不肖等はヌーラリニー氏に連れられて、印度劇を観覧した。

大體は歌劇であつて、其筋書は、或る王が王妃を嫌ひ、師父同様なる忠實な老臣の諫言をも用ゐず、奸臣に誤られて、他に婚約のある美婦人を兵力で奪つて寵嬖とし、其婚約の夫を監禁して苦役に服させたので、其男が自殺し、それを見た美婦人も夫の傍で毒を嚥んで死ぬといふのであつた。

觀劇中に、不肖の特に感じた事は、此續き物の幕間に、滑稽な喜劇などが演ぜられる事であつた。それも亦歌劇であるが、此趣向は日本でも大に参考とする事が出来やうと思ふとして、衣裳の美麗な事も、到底彼の梅蘭芳などの及ぶ處でない。——俳優の月給も、一

千ルービー位であるとの事であつた。

併し、其觀覽席の汚い事は實に驚くべきもので、磊落な石田支店長も印度劇の觀覽を辭退せられたのは、正に其筈である、後に氣がついたのであつた。

猶、二階の棧敷に、薄いレース様の幕を垂れて、觀劇する一隊の婦人があつた。それはマホメット教徒なる婦人で、彼等は夫の外には其顔を見せぬ事になつて居る爲め、斯くは幕を下げて、觀劇して居る次第とわかつた。そして、之とは事情が違ふけれど、日本でも維新前にはいはゆる御殿女中なるもの（江島の如き）が、簾の中から芝居見物をした光景も斯くやあらんと思はれた。

印度大陸を辭して

カルカッタに於ては、印度人側で半額を出資するから、此地に菓子工場を建設せられたしと、熱切に懇望せられたが、そは、更に後日を期する事に約して、當分は日本より輸出する事とし、一方には市街電車に廣告の契約をなし、極力販路擴張に盡力せらるゝや

う、印度人側にも依頼して、愈々印度大陸を辭し、ラングーンに向ふ事とした。

イギリスさんの御心配

二十三日英印汽船會社の客船エクマ號に乗込み、午前十時カルカッタを解纜した、不肖等は乗船前に旅行券の検査を受け、そして、見送りの人は絶対に船上に上る事を許されなかつた。こゝに至つて、老大な領土を有するイギリスさんの心配も、極端といはねばならぬ。

航海中は別に變つた事もなかつたが、印度人のデツキ・バツセンジャーが五六百名もあつたので、船中はなか／＼の混雜であつた。

かくて、二十六日ラングーンに着港し、午前八時半上陸した。

丁度、同船にはビルマに於ける佛教の高僧が、一人乗合せて居つたので、數千名の出迎へ人があつたけれど、其中の二名だけが官憲の許可を得て、船中に高僧を迎へ得たのみで、其他は一切船に近けなかつた。(此高僧の名は逸したが、或ひはガンニー氏でないかとも

思つた。兎に角英國政府の注意人物で、曾て數年間鐵窓に繋がれた事もあるとの事であつた)——不肖に對しても出迎へ人があつたのであるが、漸く税關で初めて面會する事が出来た程であつた。

そして、三井物産會社の支店長百瀬氏の宅に宿つた。

佛教國ビルマ

此ビルマは佛教國であつて、寺院にはバゴタと稱する金の塔が高く聳えて居るから、遠方より一見して、それと知る事が出来る。併し、ビルマの佛教徒は此金の塔を寄進する爲に貧乏するとの事である。

但し、僧侶は高下の差別なく、シヤムの僧侶と同じやうに、黄色の衣を纏つて居り、比丘尼だけは少し黄色が薄いのを着て居る。それで日本の僧侶が金襴、緞子などのけばけしい法衣を着て居るのを見て、彼等は之を俳優と間違へるそうである。日本の僧侶諸君よ、今より改心復元して、俳優の衣を脱せられては如何。

支那に來たやうな感じ

二十七日は市中を視察したが、人口の上に於てのみでなく、實業、其他の點に於ても、全く支那人の勢力範圍に歸し去つて、人情、風俗の總てが殆んど支那に在る思ひがした。二十八日は百瀬氏の案内に依つて、支那人の經營する精米所を參觀したが、之はなかなかの大事業である。元來、ラングーンには大小合せて百五十の精米工場があるが、其大部分が支那人の經營に屬して居つて、勞働者には印度人を使つて居る。

日本向のビルマ婦人

こゝに、ビルマ婦人の風俗を証すのも亦一興と心得るから、好男子諸君に少しばかり御紹介する。

ビルマ婦人は確かに日本向である。彼の「頭の真中に蠟燭の壺焼、なんて、間がいゝんてせう」とは、眞にビルマ婦人の髪結び方である。而も、すらりとした其歩き振りなど

之を新橋邊りへ連れて行つて、左袂を取らせたならば、頗る似つく事と思ふ。

殊に、ビルマの男子は概して怠惰者が多いに引替へ、婦人は實に能く働く。そして、其氣風、習慣などが日本人に似て居る點が尠くないので、他日此地で工業を經營する人は、ビルマ婦人を雇へば非常に便宜であらうと考へる。現に、支那人の女房は大部分がビルマ婦人であるが、日本人の中にも、マンダレー附近でビルマ婦人を妻として、成功して居る人があるそうである。

日本の醫師は大いに持てる

印度には、日本の大會社、大銀行の支店や出張所などがあるけれど、中産階級に屬する日本人で、成功して居る人は更になく、印度各地を通じて、日本人の經營する商店は殆んど見當らない有様であるが、ラングーンでは、日本人の經營する雜貨店があり、醫師なども相當に繁昌して居る。それ故、ビルマの田舎に行くと、土人等は日本人さへ見れば醫師と心得て、尊敬を拂ふ程である。

若し、日本内地で成功せぬ醫師があれば、請ふ來つて、此ビルマで開業せられよ。必ず繁昌する事は勿論の事、又一面には植民の上にも多大の効果があると信するのである。

成功の秘訣

猶、ビルマに於て、無資本で取付き得られる營業は、靴屋、散髪屋などが最も好いと思ふのである。

そして、雑貨店の如きも、日本人は唯日本製の雑貨ばかりを小賣して居るから、成功の機会を逸する者が多いやうに見受ける。多数の顧客を其店に引付けるには、どうしても、世界各國の雑貨を日本品と共に陳列して行かねばならぬ。蓋し、多くの客の總てが日本の雑貨を好む人ばかりではないのだから、單に日本品ばかりを販賣するよりも、バザー式に各國の製品を店頭に充満せしめて、萬人向に商賣するのが最も好い方法であると思ふ。

象の労働

二十九日は出帆の當日であるが、乗船までの時間を利用して、三井物産會社支店の杉浦氏に伴はれ、木材を運搬する象群を見物した。日本では近來朝鮮牛を輸入し帝都の真ん中をのそりくくと車を挽かせて居るが、それに較べると、之は十三頭の巨象が多数の木材を乗せて、悠々と建搬する光景は誠に偉觀である。若し、當時寫眞機の用意があつたならば不肖は象に跨つて、天晴れ象王となりすました容子を撮影したものをと、甚だ残念に思つた。

そして、微賤なる埠頭の人夫から出世して、今はビルマ第一の富豪となつて居る支那人がある。其邸宅の如き、實に周圍四哩を占めて居るとの事で、杉浦氏は「其邸宅を見ないか」と勧められた。けれども、追々と時間も切迫するので、其處を斷つて、ラングーン第一の寺院を參觀した。

靈地は赤い唾だらけ

そは、洗足でなければ見物させぬといふので、會遊の時は見物しなかつたが、今度は後

の話の種にもと思つて、參觀する事にしたのである。それで、靴を脱ぎ、靴足袋だけになつて、三四丁ばかり歩いて行つて、奥の金の塔まで参拜したが、……。

彼等ビルマ人がいふ清淨の靈地は、イヤハヤ、汚いの何の、全くお話になつたものではない。不衛生極まる道路には、到る處に赤い唾が吐きつけられてある。(印度人や南洋人は石灰を煉つて、木の葉に檳榔樹其他の藥草、藥味を混ぜたものを始終口の中でモガく、嘔んで、赤い唾を吐き散らす) 實に不潔此上もない。——氣の弱い人などは、忘れても行かぬ事。

日本の恩人……シヨーンナス氏

さて、二十九日午後一時シンガポールに向つて、ラングーンを解纜したが、同港からは千田商會の杉浦氏、英國人シヨーンナス氏等が乗込まれた。

此シヨーンナス氏は當年七十四歳の高齡であるが、明治五年日本に渡來された事があつて現に、令息は神戸に在り、明石に住宅を置かれて居るそうである。それで、氏は「自分は

日本人であるといふ觀念を持つて居る」と話されたが、それは、決して虚偽でなく、ラングーンに在つては、常に日本人の爲め何くれとなく利益を興へて居られるのである。

斯くの如き隠れた功勞者に對して、日本政府から勳章を贈つて、其功勞を表彰したならば、單に氏一人の名譽であるのみならず、ラングーンに在留する日本人の爲めにも、必ず好い結果を齎すであらうと考へた。

不肖はシヨーンナス氏に對して、我國に盡さるゝ功勞を多とするのみでなく、不肖一個人として、ヨリ大なる教訓を得た。そは、氏が高齡七十又四歳に達せらるゝにも拘はらず、尙、鏗鏘として、壯者を凌ぐばかりに活動して居られるのを見た時、不肖は更に若くなつて、大に活動せねばならぬとの決心を強くした事である。

「異國の花は見あけど」

四月一日拂曉ピナンに着いて、上陸一泊し、翌二日午後五時同地を解纜した。そして、三日午後八時ポートスヴェツテンハムに投錨し、終日荷揚げをした。

ピナンでも、ポートスヴエツテンハムでも、荷揚げをした物の大部分は、ラングリーン米であつた。ピナンでは、牛、山羊等の家畜も荷揚げした。蓋し、ビルマから毎年二千萬石の米を世界の各地に輸出する事は、我が日本の農家に取つて、最も注意を拂はねばならぬ大問題である。

四日シンガポールに着いて、ジャバ行の用意を整へた。

思へば、神戸を出帆してから既に二個月で、内地の春は花に忙しい事であらう。それで船中で左の一首の國風を詠じた。

「異國の花は見あけど我國の

花は見ずして過ぎすなるらむ」

ジャバに入る

六日蘭船ランファイヤス號に便乗し、ジャバに向つて出帆した。船中には正金銀行スラブヤ支店長、同夫人、三菱商會社員某氏、其他の日本人が十名程乗つて居られた。さて

船中は何事もなく、八日午前七時タンジョン・ブリツヂに投錨したが（此地からバタビヤまでは鐵道が通じて居る）三井物産會社のバタビヤ出張員日吉氏、南洋商會の原、山縣、小川の諸氏が出迎へられて、直ちに自動車でバタビヤなる三井物産會社の社宅に至り晝餐の饗應を受けた後、グラント・ホテルに投宿した。猶、南洋商會の社長堤林氏が、此日午前六時スラブヤから態々小生の爲めバタビヤに來られた事は感謝に堪えない。

ハイカラになつたジャバ人

今回の南洋旅行は滿九年目であるが、不肖の最も深く感じた事は、九年前のジャバ人と今日のジャバ人とが、さながら別人に對する感じのする點である。服装はいふまでもなく一般の氣風が全く大變化を來して居るやうに見受けられた。（勿論、之はバタビヤ、スラブヤ、スマラン等の都會地に於て、特に此變化を呈して居る事を後で知つた）九年前のジャバ人は頭にカエンカバラと稱する風呂敷のやうな更紗巾を巻いて居つて、帽子を冠つて居る者は極めて稀で、ハジ（アラビヤの聖地なるメツカに參拜して、此稱呼を受けるので

ある)の外は殆んど帽子も冠らず、靴を穿く者もなかつた。然るに、今日では都會地を歩くと、帽子を冠り靴を穿いた者が非常に多く、青年男女がなか／＼のハイ・カラーになつて居るには一驚を喫した。

一番に服装のみならず、支那人、ジャバ人は二等國民であるといふので、汽車、電車の一等に乗る事を許されなかつた。彼等も亦自ら遠慮して、一等には乗らぬやうにして居つたが、今日はどしどし、一等に乗りつゝある。時代の變遷は實に早いものであるが、僅かな間にも斯くの如き激しい變遷があるのを目のあたりに見て、不肖はうたゝ感慨に打たれざるを得なかつた。

在外同胞の奮闘を思へ

九日は堤林氏の案内で支那商議會頭を訪問し、支那商人への紹介状を貰ひ受け、午後は松本總領事の來訪に接した。そして、十日は支那商議會頭の紹介状に依つて、それ／＼の商店を歴訪したけれど、何れも他店を紹介するのみで、更に注文する者が無い。そは、バ

タビヤに於て、此時既に日貨排斥の準備をなしつゝあつた爲め、支那商人は後難を恐れて直接に注文を發せず、敬遠主義を執つた事を後で知つたのである)

蘭領印度、即ちジャバ、スマトラ、ボルネオ、セレベスの諸島からニューギニヤにかけて、日本の十倍以上もある、これらの地方ばかりでなく、印度大陸を除いた英領、佛領、米領の東洋諸國は、悉く支那人の手に依つて、商工業が營まれて居る状態で、地主も、家主も、矢張り概して支那人である。そして、これらの支那人の数は、優に一千万人以上に達するであらうか。其支那人が數十年の間絶えず日貨排斥、日人排斥に力を注いで、日本人の南洋發展に非常な妨害を加へつゝあるのである。——其困難な商業上に於て、日本人が盛んに奮闘して居る事は、戰場に於ける勇士と同様に、當然金鵝勳章を受ける資格があると思つた。

内地に在つて、飽食暖衣、春は花、秋は紅葉とうかれ戯れ、茶屋酒に國家を忘れて居る人々に、此異境に出で、酷熱と戦ひ、支那人の非買同盟、白人種の嫉妬など、あらゆる困難の中に介在して、能く奮闘努力しつゝある同胞の状態を、一度は見せてやりたい

と思ふ。それと同時に、内地に於ける同胞は、今少しく眞面目になるべき事を希望して止まぬ次第である。

風景絶佳のファイテンドルフ

南洋協會のバタバヤ支部の主任小谷氏は熊本縣の出身で、元は僧侶であつたが、大谷光瑞師に見込まれて、セーロン島の農學校に入學し、同校を卒業してからは、引續いてバタバヤに在住して居られるのである。同氏は頗る蘭語に堪能であると、松本總領事から聞いたので、總領事の紹介で面會し、種々なる談話の後、和蘭總督に面會したいと思つて、同氏に總督の都合を問合せて貰つた。幸ひにも總督と面會の約束が出来たので、十一日午後四時半に總督の在任地なるブイテンドルフに向つて出發し、午後六時同地に到着した。此地は氣候が溫和で、夕刻からは非常に涼しくなり、肌を粟を生ずる思ひがした。加之、風景の絶佳な事、南洋には珍しい程である。殊に、不肖の投宿した室の前面には、小川の流れがあつて、脈々たる連峰を隔て、遙かに富士山に髣髴たる高山が見え、非常

に快感を覺えた。聞けば、此地はジャバ隨一の避暑地であるとの事である。

蘭領總督を訪問す

十二日午前十時蘭領東印度總督ボーク閣下を訪問した。面會時間は十五分餘であつたが不肖の訪問を衷心から喜ばれて、「若し、不肖が此ジャバに分工場を設置するの考へを有するならば、出來得る限りの便宜を計らう」と、口約をせられた程である。

猶、總督の紹介で書記官長に面會し、次で書記官長の紹介で工務局長に面會したが、何れも好意を以て迎へられ、且つ、總督の名儀に依つて、全島の各州知事に對し、不肖の爲め調査視察の便宜を與へるやうに、書記官長から紹介狀を與へられた。之に依つて、不肖は各地の調査に非常な便宜を得たのみでなく、到る處で尊敬を拂はれ、愉快に旅行する事が出来た。

サマランに至るまで

十三日はシカブミ町を訪問して、支那人の經營する製菓工場を參觀したが、其規模は小さいけれども、掛物機、アツブルカット機、タブレット機、ドロツブ機などを据え付け、ジャバ人を使つて、製造して居つた。

午後バタバヤに引返して、十四、十五、十六、十七の四日間滞在した上、十八日午前七時バタバヤを出發し午前十一時十分チエリボンに着いて、早速市中の商店を歴訪したが、初めて此地に於て少しばかりの注文を受けた。

十九日午前十一時チエリボンを出發し、午後一時テガルに着いて、一泊し、二十日午前七時二十五分出發、途中で更紗の名産地なるバカロンガに下車して視察を遂げ、午後五時十分サマランに到着した。驛頭に、南洋商會の常務林氏、其他の諸氏の出迎へを受け、デュ・バビリオン・ホテルに投宿した。(因に、今回の旅行中で最も心地よく感じたホテルは、ボンベアのタジ・マハル・ホテルと、グランド・オリエンタル・ホテルと、此デュ・バビリオン・ホテルである。第一は宿泊料が安く、第二は設備が完全して居り、第三は待遇が親切であつて、ボーイは決してチップを請求しない。こは、要するにマネージャーの

心掛が好いといふ事に歸着するであらうと思つた)

排日氣分のないサマラン

二十一日はサマランの商店を訪問して廻つたが、此地の支那人は福建からの移住者や、臺灣に籍を有する者が多い爲め、ボーイコットの氣分が少いのみならず、堤林氏の根據地として、平素から日支兩國人の間に諒解がある土地柄だけに、前回のボーイコットにも、左程の甚だしい影響はなかつたとの事で、案外に多額の注文を受けた。それで、人間といふものは頗る現金なもので、不肖はジャバに到着して以來、此日に及んで、初めて心に楽しみを感じた。

二十二日は日曜日であるから休業し、午後はサマラン日本人會の懇談會に出席した。

二十三日も亦市中の商店を訪問して、それぐに注文を受けた。

のんき極まる知事公

二十四日午前十時サマラン知事を訪問したが、此知事公は市内、郊外に工場を設け、煙突を樹て、製造工業を盛んならしめる事が嫌ひであるやうに見受けられたと同時に、土人や支那人の頭腦に、文明の新知識を注入する事も好まれないやうな容子である。そは、此地の如き静かな地方の知事として、或ひは無理からぬ事かも知れない。けれども、日曜日には郵便、電信すら半休、若しくは全休するといふジャバの現状から見ても、その製造工業を起して離脱する事は、人情としても好ましくない道理であらうが、一般製造工業を以て俗世界の事業とのみ考へて居る蘭人ののんきさ加減、……之こそ人類の樂園と稱すべきであらうか。

スラバヤの排日騒ぎ

二十五日正午サマランを出發し、午後七時半スラバヤに到着、南洋商會の久我常務、其他諸氏の出迎へを受けて、シンパン・ホテルに投宿した。(因に、此地で第一流のオレンジ・ホテルは商業地にも接近して居つて、萬事に便利であるが、先年日本の實業視察團

一行が投宿した際、浴衣のままで食堂に入り、亂痴氣騒ぎをやつた爲め、忽ち宿泊を斷られてしまつた。そして、ホテルでも爾來日本人の投宿を好まぬといふが、併し、不肖の如き品行方正の者であれば、眞に日本のゼントルマンとして、歡待してくれる事は疑ひなしだと思ふ。阿々)

二十六日は此地の支那人商店を歴訪したが、唯少しばかりの注文を受けただけであつた蓋し、こゝも、ボイコットの火の手が熾んで、頻りに煽動的のピラを撒き、支那字新聞の如きは、日貨排斥と日人排斥の記事で、全紙を埋めて居るのである。

猶、バタビヤで愈々日貨排斥が始まり、學生連が五色の旗を樹て、排日示威行列をやつて居るとの報道に接したが、聞く處に依れば、此スラバヤに於ける日貨排斥は、學校の教師が其煽動者であるとの事である。

中谷領事の痛論

二十七日は日本領事館を初めとして、三井物産會社、三菱商會社、正金銀行の各支店

を訪問し、二十八日は午前十時から中谷領事と同道で、知事を訪問し、總督の名に依る紹介状を呈して、不肖の希望を述べた。

やがて、中谷領事は支那人のポイコツトに就て、日支兩國間の外交問題の爲め、第三國なる蘭領に於て、支那人が安寧秩序を紊す事の不穩當なるは勿論、學生を煽動する支那人教師の不心得なる事を述べて、知事に懇談する處があつた。即ち、中谷領事の主張は理路井然として、『若し、支那人が日貨排斥をなさんと欲せば、須らく其本國に歸つてなすべく、何ぞ第三國の領土に於てなすを要せんや』と痛論せられたのである。

之に對して、知事も大に同意を表せられ、早速スラバヤに於ける學校教師に訓戒を加へポイコツトを差止める旨を誓はれた。——こゝに、中谷領事の勞を多謝する。

最高級の椰子油

さて、商業上の視察は、スラバヤを以て一先づ打切り、更に、ジャバ全島の人情風俗及び各地の状況を視察する事として、午後二時スラバヤを出發し、夕刻トロナゴン町な

る堤林氏經營の製油工場に着いて、同工場事務所に着いた。そして、二十九、三十の兩日を此工場に滞在し、製油の作業を參觀した。

元來、此製油工場は蘭人の經營したものであるが、不幸にして失敗したのを、堤林氏が買収せられたものであるといふ。而も、氏が之を買収するや、直ちに最新式の製油機械を獨逸から取寄せ、其他各般の設備を整頓されたので、事業は漸次有利に恢復した。そして椰子油の精製品の如き、現に、ジャバに於ける最優等品として推奨せられ、賣行も頗る旺盛で、殆んど晝夜間斷なしに作業を續けて居る。

工場之首腦部、即ち工場長、機械長、技師長及び次長位までは總て日本人であつて、其他はジャバ人を使つて居るが、彼等は柔順なばかりでなく、賃金も安く、勞働に耐え得るので、勞働者としては頗る好い素質を持つて居る。(因に、同工場は十二時交代で作業をして居るのである)

コブラ・エステートの大名行列

五月一日は堤林氏と共に、午前七時三十五分發の汽車で、トロナゴンを出發し、午後零時過ぎに氏の經營せられるコブラ・エステートに到着した。(エステートとは英語のプランテーションの意義である)そこには、監督者の一人なる和田氏が、既に乗馬三頭を用意して待ち受けて居られたので、不肖等は其馬に跨つて事務所に入つた。途中で、官營のチーク林を通過したが、種々之が説明を聞いて、大にチーク林の有用なる事を知り得たのであつた。

翌る二日は終日馬上の人となつて、エステートを巡廻したが、エステート内には數個村あつて、二千人以上のジャバ人が居住して居るとの事であつた。そして、不肖等の一行に出會ふ土人は、悉く脱帽して敬禮を捧げ、或ひは地上に跪いて見送るといふ風に、老幼男女一人として、不肖等に向ひ立ちながらに言ふ者はなく、一行の爲め、遠くの方から途を避けて居る有様は、往昔、大名が其領内を検分して歩いた時も、斯くやあらんと思はれた。

堤林氏が支配する農民二千

此エステートは、初め蘭人や支那人の富豪が持つて居つたのを、六年前から堤林氏が順次買ひ取つて、今や此附近一圓を買収してしまつたのである。其總面積は二千五百町歩と稱せられて居るけれど、實際には三千町歩もあらうかと思はれる程で、日本の内地にいへば、關西地方の二郡にも相當する廣さである。そして、こゝに生活しつゝある二千有餘の農民は、堤林氏の任命された七名の日本人に支配せられ、使役せられて、安樂に其日を送つて居るのである。

そして、事務所は以前の持主なる蘭人が七個年の日子を費して建築したもので、實に理想的な美しい不燃質の煉瓦建であるが、蘭人の富豪も遂に之を持ちこたへる事が出来ないで、堤林氏に譲り渡したのである。——氏の得意や想ふべしである！

此一事は單に堤林氏一人の得意でなく、我々日本人が一體に、大に意を強うするに足る次第である。

敬服すべき堤林氏の奮闘

然り、異邦に在りながらも、何等異邦に在るの思ひをせず、殊に、都會地では、ヤレ支那人のボイコットだの、ヤレ白人との競争だのと、種々なる事に煩はされるにも拘はらずこゝには少しの煩ひもなく、總ての土人から王侯の如く尊敬される事の、如何に心樂しい事であらう。

併し、堤林氏も生れながらに、此幸福を取られるのではない。今より十七年前の氏は、眞に眇たる薄荷玉の行商人に過ぎなかつたのである。そして、あらゆる困難、迫害に對して、奮闘努力、次第に成功の道程を進んで、遂に今日の大を成したのである。即ち、多年の奮闘が美しき實を結んで、現在の幸福な位地に到達せられた事は、要するに彼の立志傳中に見るが如き、最も堅固な意思と、不斷の努力とに依る資であるを信すると共に、不肖は他事とも思はれず、そゞろに感激の涙に咽んだ。
之に依つて思ふ。――

後進の青年諸君は、先輩が實踐しつゝある成功の道程を辿つて大に奮闘せねばならぬ。斯くて、諸君が着々成功して行かるゝに於ては、それは、嘗に諸君が個人としての榮譽でなく、實に日本の幸福であつて、國家と諸君と共に尊敬を受けるの基となる事を信する。今や我國は全世界から毀譽褒貶の的となりつゝある秋で、諸君の奮起を待つや久しいのである。不肖は切に青年諸君に對して、國家の爲め蹶起せられん事を祈る者である。

エステートの組織

やがて、和田氏の受持なる事務所に着いて、數日前に獵つた野鹿の美味で、晝餐を饗せられた。それを口にしながら、前面の森の中に飛びかふ野猿の群を眺め、又は文鳥や野鳩の囀り歌ふ美しい聲を聞く風情は、實に拙い筆の能く形容し得る處でない。

數日前には此州の知事一行が狩獵に來られ、事務所に投宿して、野牛狩りを催された所である。野牛の群などは、到底日本の内地で見える事も出来ないが、こゝには澤山棲んで居り、其他野鷄も夥しく棲んで居る。現に、昨年頃までは虎、豹、山嵐、山犬、狼等も棲

んで居つたそうであるが、次第に荒蕪地の開墾せられると共に、狩り盡されたといふ。此エステートの組織は、六區に分つて、各區に二人又は一人の日本人監督者を配置してある。それで、管内に居住する二千人の農民の外に日々一千人内外の管外土人が出入して居るので、總ての事件は勿論、冠婚葬祭の事に至るまで、監督者たるトワン（トワンとは土人が日本人や白人に捧ぐる尊稱である）に相談し、それ／＼に付け届をする事になつて居る。それ故、日本人監督者はこれらの雑事に忙殺せられるばかりでなく、種々なる返禮の爲め、毎月十五ギルダの支出を要するところぼして居つた。

感興横溢のジャバ・ダンス

最後に、エステートに於ける餘興的一挿話を誌さう。

それは、此エステートで陸稻が豊作である爲め、數日前に事務所からマンドル（エステートで働く苦力の頭をマンドルといふのである）に對して、「近頃此地方の村落に来て、毎晩興行して居るジャバ・藝人の一組を、三日の夜此事務所に呼んで来い」と命じてあつたの

で、愈々其日になると、マンドルは彼の一行を呼び迎へて来た。それで、見物人が四五百人も集まつて来て、なか／＼に賑やかな事であつたが、殊に、面白く感じたのは、見物人が男といはず、女といはず、興に任せて、藝人と共に踊り出した事である。併し、彼等が踊るには、自ら祝儀を出しておいて、そして、一同と共に踊り舞ふのを無上の快樂として居るのであるが、其祝儀は多く出す者が精々十錢位で、少いになると二三錢位であつた。不肖は此ジャバ・ダンスを招く被頭人であつたから、第一番に四ギルダばかりを奮發した處が、舞姫は不肖の前に跪いて、黄色な聲で何やら一寸唄つたので、不肖は色男然として面食つた。

マンドルを第一として、見物人の男女が立ち替り入り替り踊り舞ふダンスは、澤山な種類であつたが、中には鳥や家畜に因んだものが十數番あつた。其最も激しいものは「荒馬」といふダンスを舞つた一人であつて、彼は一生懸命に踊り狂ひ、眞に荒馬も斯くやと思ふ程に荒れ出した。彼等土人の單純な心理状態が、こんな事て變化するを見ても、それが如何に質朴であるかを想像し得るであらう。此荒馬のやうに荒れ狂ふ土人には、何やら呪ひ

をして、氣を鎮めさせるのだそうである。そして、感すべき事は、斯やうなる賑はひにも拘はらず、四五百人の見物人が皆静肅のうちに見物して居つた一事であつた。

箱根にも勝るソングリデー

四日早朝エステートを辭して、馬背に倚つて山を下る專三時間餘で、野豊村に着いた。此村には長崎縣千々岩村の人なる林田氏夫妻が店舖を構へて、着實に營業に従事し、現在數萬圓の資産を有して居られるとの事である。

同村から馬車でブリタール驛に赴き、それから汽車で、午後二時半マランに着いた。此地は繁華な小都會で、南洋商會の支店が設けてある。支那蕎麥て晝食をすました後、自動車雇つてソングリデー温泉に向ひ、四十五分で同地に着し、ソングリデー・ホテルに投宿した。

此温泉場は海拔二千尺餘の高地で、氣候溫和な避暑の好適地である。丁度、日本でいふと、箱根宮の下のやうであるが、箱根の如く俗化して居らず、ホテルの設備も完全に居心

地よく、眞に閑靜な仙境である。温泉は鐵分を含有する酸類泉であるから、日本からジャバに來られたならば、數日間此地に入浴せられるが好いと思ふ。不肖は二月二十六日コロンボに上陸して以來、入浴したのは、此地で丁度三度目であるが、久し振りで身體の垢を落とす、非常に好い心地になつた。

こゝより數哩を隔て、クロツトといふ山がある。此山は十八年目ごとに爆發するとの事で、五年前にも爆發して熱湯を噴出し、其熱湯の洪水の爲め、二萬人の死者を生じたと傳へられて居るが、現在でも、熱湯の流れた跡があるそうだ。

美しい道路の完全さ

翌る五日は午後二時半自動車を驅つてソングリデーを出發し、マランを経て、午後四時半バスラワンに到着した。此行程實に八十哩に達し、而も、マランでは南洋商會の支店に立寄つて、商用を果したのみならず、途中で驟雨に逢ひ、非常に進行を悩まされたのであるが、それでも猶僅かに二時間で八十哩を突破する事が出來た。此一事に依つても、ジャ

バの道路が如何に完全に完全であるかを證明するに足るであらうと思ふ。
 即ち、ジャバに於ける主要なる路線は、幅員六間より八間、或ひは十二間を有し、急勾配、急傾斜がないので、真に一路坦々として、一鞭直ちに長安に通ずるの觀がある。又里道の如きも、概ね四間の幅員を有し、其極めて狭いものすら猶二間を下らぬ有様で、平生東京の悪路に惱まされつゝある不肖は、誠に羨望に堪へないのであつた。

ジリサテノ湖畔を訪ふ

此日のバスラワン訪問は、ジャバ旅行として逆戻りになるのであるが、堤林氏に關係のあるタピオカ工場を參觀する約束があつたのと、一面に、此地は日本の各汽船の砂糖積取港であるから、其實況を視察せんが爲めであつた。

それで、六日午前八時に、ストラバヤから堤林氏が矢部氏を同伴して來られ、其案内でジリサテノ湖畔なるタピオカ工場を視察した。——此湖は箱根の蘆の湖に髣髴たる大きさであるが、其水利權は堤林氏の手に歸して居るとの事で、不肖は此湖畔に別荘を設けたな

らば、嚙愉快であらうと感じた。

試みの菓子行商

猶、不肖がタピオカ工場を視察しつゝある時間を利用して、南洋商會のバスラワン支店主任なる高橋氏(堤林氏の令甥)の進言に依つて、同氏に森君を隨行させ、試験的の菓子行商をやる事にした。而も、それは特に支那人の家庭ばかりを訪問したのであるが、僅かに半日で二十ギルダ一程の賣上があつたので、不肖は寧ろ不思議に思つた。蓋し、我々が謙遜を以て彼等に接近して行くならば、假令排日思想を抱いて居る支那人と雖も、必ずしも我々を卻けない事を知り得たのである。

かくて、午後自動車を飛ばして、再びストラバヤに赴き、今回は日本人に對して如何なる待遇をするかを試みる爲め、故らにオレンデ・ホテルに投宿したが、之は又案外、接待大に懇切を極めた。

屍のある所には鷺集まらん

既に前にも述べた如く、ジャバに於ける支那人の日貨排斥は、日を逐ふて激烈になりつゝあると共に、彼等の宣傳には過激思想を含蓄して居る爲め、其思想が漸次ジャバ人に傳はつて、遂に鐵道従業員のストライキを見るに至つたから、軍隊に動員令を下して、兵士の手によつて漸く鐵道の運轉を保つて居る状態である。——之ぞキリストのいはゆる「屍のある所には鷺集まらん」である！

ボイコットや、ストライキや、過激思想宣傳は、總て悪思想の偶々外部に表明せられたものである。今日、支那人の日貨排斥を以て、對岸の火災視する歐米各國も、何時かは彼等自身に痛苦を感じるの時があるだらう。

自動車旅行の一椿事

此際、不肖は何とかして、活路を見出だすべく、種々に苦慮した結果、ジャバ全島を隅

々まで視察するの必要を認め、スラバヤよりバタビヤまで自動車旅行をする事に決心した。それには、矢部氏がジャバ語、マレー語に達して居られるのを幸ひ、強いて同氏に東道を請ひ、七日午前七時半自動車でスラバヤを出發した。そして、途中でマデオンなる南洋商會支店の小賣部を訪問し、ソーローに着いて、直ちに知事を訪問し、同地に一泊した。翌る八日は午前六時十八分ソーローを出發したが、一時間後にはジョクジャに着くべき豫定であつた處、途中で自動車のタイヤがパンクして、何所へ跳ね飛んだか、車輪が所在不明になつた。そこで、物珍しげに群つて來た土人に向ひ「車輪を發見した者には、褒美として一ギルダを與へる」と命じて、懸賞で搜索した結果、約半時間も経過して、一丁ばかり離れた竹籤の中で、之を發見する事が出來た。此騒ぎの爲め、意外に時間をつぶして、漸くジョクジャに到着した。

ジョクジャ州知事の好意

ジョクジャでも、知事を訪問して、將來此地方に製菓工場を建設したき希望である事を

述べた處、知事は非常な熱心を以て、不肖の計劃を期待せられ、是非とも兩三日間滞在して、詳細に視察せられよ。予が自ら案内して、貴下の欲するまゝの土地を周旋し、且つ如何なる便宜をも與へるであらう。此ジヨクジャ州は王領であつて、和蘭政府の保護に屬するから、永代賣渡しは不可能であるが、最大期限として、七十五年間の租借権を得られから、安心して工場を経営せられたい」と、極めて懇切に説明もし、勧誘もせられた。併し遺憾ながら日程を變更し難き事情があるので、再度の來訪を約し、握手をかはして別れを告げた。

此ジヨクジャ州知事の、一見舊知の如くなる懇情は、今も猶不肖の胸に記憶を新にする處である。

フルブドールの佛蹟

八日矢部氏はスラバヤに歸られ、其代りに、南洋商會の内山氏が東道される事となつて、ジヨクジャを出發し、チラチャップに向つた。

途中、ブルブドールに於て、有名な佛蹟を參觀したが、全部石造であつて、釋迦一代記を初め、其他の佛敎に關する經典、傳説等を現像し、恐らく世界的の宗教上の寶物であらう。傳説に依れば、十二三世紀の頃、ジャバがマホメット教徒に依つて征服せられた爲め、土中に埋没されたのを、ナポレオン一世の末期、即ちオーターローの大戦にウエリントン將軍が快勝を得た結果、今の蘭領が一時英領に移つた時、ジャバ駐屯の英國軍隊の爲め發掘せられたのであるといふ。そして、ジャバが再び蘭領に復してから、此佛蹟も和蘭政府の手に依つて、大切に保護せられつゝあるのである。それよりプルオルデヨを過ぎて、シスラ川を渡船で渡り、午後七時チラチャップ港に着いて、こゝに一泊した。

昔を偲ぶチラチャップ

チラチャップ港は、港灣として、正にジャバ第一の良港であるけれども、如何せん、其位地が裏ジャバに屬する爲め左程に繁榮しないのである。

何人も、地圖の上に於て知らるゝであらう、此ジャバの位地は赤道以南であるから、日本と反對に、北面は熱く、南面が冷かで、北方を表とし、南方を裏とするのである。それ故、パタビヤ、チェリボン、サマラン、スラバヤの諸港は表ジャバに屬して、港灣としては遠淺であるが、後方地帯の物産が豊富な爲め、何れも繁榮して居る。けれども、チラチヤツプは裏ジャバに屬する爲め、陸上の物産が少く、従つて繁榮の程度が大に劣つて居る次第である。

さりながら、此港は往昔ジャバ王族の都せし所であつて、十三世紀の頃、ポルトガル人の侵略を受けて、王族は滅亡したけれど、今日も王城の遺蹟があつて、そよりに懐古の情に咽ばしめるのである。

殊に、此地のジャバ人は概して氣概に富み、土風盛んにして、中には店舗を構へて居る者があるから、日本人がジャバ人と直接取引をするには、最も便利であり、且つ、有望な地方である。

猶、此地に在留する日本人は、南洋商會支店の店員二名、警察署長の細君、蘭人なる製

糖會社事務の細君、其他蘭人所有の帆船に従事する船長夫妻、都合六名だけである。そして、例の支那人のポイコツトも、此地にまでは波及して居らぬ模様であつた。

日本人の自制を促したい

こゝに、所感を披瀝したい。――

そは、先年日本の郵船、商船等の船員がチラチヤツプに入港し、いざ上陸となると、浴衣一枚になつて尻端折り、手拭をかぶりつゝ、路傍で放尿するなど、野蠻極まる醜態を演じたので、船長に向つて抗議を申し込んだ處、「そんな事は仕方ありません」とて相手にしなかつたとの事で、在留日本人は大にこぼして居られたのである。

元來、日本人程に、世界中の風俗を紊亂する人種はないやうである。而も、我は一等國の國民であると思ふ如きは、大なる誤りであつて、世界各地で排斥を受けるのも、當然の事と不肖は思ふて居る。シンガポールに於ても、日本人の漁夫が裸體になつて、風俗を紊した爲め、西洋婦人の間で大問題になつた事があるそうだ。實際、日本人の如く、風俗

を素し、禮儀を無視する人種はないのである。

知らず、廟堂諸公を初め、爲政者諸士は日本人を如何なる道に導きつゝあるか。現代日本人の輕佻、禮節を無視する有様は言語に絶し、うたゝ長敷に堪えぬのである。

山崩れに阻まれて

不肖はスラバヤよりバタビヤまで、即ちジャバ島の東端より西端まで、自動車で旅行する決心であつたが、圖らずも、前日來の豪雨で、バンドンに至る途上の高地に於ける峠の路面が大破して、自動車を通せぬとの急報があつた。

そこで、計画を一變し、八日午後零時四十五分チラチャツプ發の汽車に乗つて、マオス驛で乗換をなし、午後八時バンドンに到着した。驛頭には南洋商會の川合氏が豪雨の中をも厭はず出迎へられて、ホーム・ホテルに案内された。此ホテルは恐らくジャバ第一否、東洋第一と思ふ程に、設備の完全した、待遇の親切なホテルである。

十倍大の發展を遂げたバンドン

此バンドンは近き將來に於て蘭領東印度總督府を置かるゝ豫定である爲め、九年前に不肖が訪問した時に比して、全く雲泥の相違で、其發展の盛んなるに一驚を喫した。實際、今日のバンドンは當時よりも十倍の大を加へたであらう。若し、初めより斯くと知らば、バタビヤ到着刻々此地を視察し、それに依つて、大に得る處があつたものと、今更に地を踏んだのであつた。

併しながら、幸ひなるかな、川合氏の談に依ると、三年前よりバンドン繁榮策として、毎歲數週間の共進會を開催する例となり、本年も七月二十八日から向ふ二週間開催される豫定であるが、本年は和蘭女王陛下即位二十五年祝賀の爲め、共進會後も引續いて種々の催しが行はれるとの事であつた。——それで、不肖は此好機逸すべからずと決意したのである。

好機！ さらば腕だめしだ！

九日は祭日であつたが、不肖は共進會事務長の私邸を訪問して、會場の一部を借受けて即賣店を設けたく、且つ、一般に景品として、和蘭國旗を配布すべき事等を述べた。すると、事務長は不肖の計劃を大に歓迎され、早速會場に案内して種々説明を與へられた上、「貴下の希望する場所を選定せられよ」との事に、正門入口の右側なる半永久的の建築物を借受けるやうに契約した。

蓋し、此バンドンの共進會には、總督閣下を初めとして、ジャバ全島の各州知事、ポルネオ、セレベス、バプア、スマトラ諸島の知事より諸王、王族、貴族、其他の各階級の總てを通じ、唯一の楽しみとして集まり來るが故に、我社製品の廣告宣傳と販路擴張には眞に絶好の機會なのである。依つて、會場借受の契約をなすや、直ちに此事を本社に打電し、派遣社員を選定し、和蘭國旗十萬本の調製を請求した。

そして、不肖は「世界到る處に青山あり」と信じ、今後に於ける一層の努力を覺悟する

と共に、南洋各地に蟠踞する一千万の支那人の智慧が勝つか、將た不肖一人の智慧が勝つか、さらば之より腕試しだ！ 日貨排斥をするならせよ、何の恐るゝ處かあらんと、自ら勵ましたのであつた。

人種的に觀察したジャバ

思ふに、現在のジャバはジャバ人のジャバでもなく、又蘭人のジャバでもなく、支那人のジャバである。そは、如何なる土地に行つても、支那人の商店のない所はないといふ有様で、そこに在留する人口の比例は、支那人一千人に對して、日本人が一人といふ割合になつて居る。それ故、ジャバに於ける利潤は悉く支那人の懐中に入つてしまふ。丁度、之を譬へて見ると、ジャバに於ける支那人はトロール船の如しである。

然るに、今や此支那人は日本人を見る事、恰も仇敵の如くであるから、日本人のジャバに對する取引は、斷然支那人を仲介とせず、直接にジャバ人と取引をするが好いと思ふ勿論、之は一寸困難の事であるやうだが、誠意を以て終始一貫したならば、從來支那人の

爲め操られて居つたジャバ人も、遂に日本人の徳に靡く事は疑ひない。

現に、ジャバ人は非常に日本人を敬慕して居つて、白人や日本人に對して返辭をするには、サーヤーといふけれど、支那人に對しては、單にヤーと返事するばかりである。此點から考へても、日本人は今後大にジャバに發展すべき可能性が十分であると共に、自重せねばならぬと思ふ。(或る日本人が官憲の眼を偷んで、某地のジャバ人の村落に入り込み吹矢や玉轉しをして、屢々處罰せられたとの事を耳にしたが、實に慨歎すべき事である) 然り、我々の進むべき途は、唯一つあるのみである。曰く、正義……誠意である。——奮起せよ、七千萬の同胞!

白粉の輸出が有望である

ジャバに關して、紹介すべき事は澤山あるが、其中に、ジャバの三名物と呼ばれるものがある。曰く、ブイテンドルフの植物園、曰く、ブルブドールの佛蹟、曰く、スンダ美人此三者がそれである。(ジャバ人の中にスンダ種と稱する人種があるのだ)

近來、ジャバ全島到處の片田舎でも、婦女子が何やら白いものを顔に塗りつけて居るが、其塗り方が實に滑稽千萬で、顔一面を斑にして居る。依つて、在留の先輩に之を質すと、米を粉にして水に練つたものを塗るのだとの事であつた。併し、スンダ美人は米の粉を用ひないで、歐米又は日本から輸入した本物の白粉で化粧して居るから、我々日本人な好男子の目にも、美人に見える。

思ふに、ジャバに在住する支那人の婦女子は、四五十萬人に達するであらう。これらの支那婦人は皆顔に白粉を塗つて化粧して居るが、其白粉は悉く日本の製品を用ゆるのである。そこで、今回のボイコットの爲め、白粉の輸入が杜絶しては大變だと、大恐慌を來して、日本雜貨の到着を待ち構へ、多量に白粉を買占したさうである。之に依つて、彼等が如何に化粧の爲め憂き身を窶しつゝあるかを窺ひ得ると共に、此婦女子の化粧用なる白粉には、流石の支那人のボイコットも、先方様から降参する事疑ひなしである。

それで、日本の化粧品業者は、内地ばかりで競争する事を止めて、一步進んで、此ジャバで廣告する方が有効であり、將た國家の爲めであると思ふ。此事に就て、不肖は直ちに

三輪善兵衛、平尾贊平の兩氏に通信しておいたが、兎に角、ジャバに於ける白粉の販路開拓は、前途有望であると信ずる。

總督府に視察意見を報告す

閑話休題、十日午後一時バンドンを出發し、午後五時半バタバヤに歸着して、南洋商會の山縣、小山田の兩氏の出迎へを受け、ジャバ・ホテルに投宿した。

そして、先に總督府を訪問した際、工務局長に對して、ジャバ全島の視察を終つたならば、卑見を報告すべき約束があつたので、十一日午前七時南洋協會の小谷氏と同伴して、ブイテンドルフに赴き、工務局長を訪問して、不肖の感想を述べた處、非常な満足をもて感謝せられた。かくて、辭するに臨み、工務局長は記念として、長さ八寸に周圍一尺七寸のココア・ピンズ數種を贈られた。

スラマバキ、ジャバよ

此夜は松本總領事、同夫人を初め、在留日本人の重立つた諸氏、蘭人某氏、同夫人を晩餐會に招待して、ジャバに對する告別の宴を催した。

明くれば、十二日午後四時バタバヤ解纜の蘭船ランファイヤス號に乗り込んだが、さても奇縁なるかな、來る時も、歸る時も、數多き船の中で、同じランファイヤス號なり。されば船員とは顔馴染なので、恰も我家に歸つたやうな親しみを感じつゝ、輝く太陽を戴き、輝く海波を蹴つて、ジャバを辭した。

「スラマバキ、ジャバよ」

石井大使と日佛條約改正を談ず

ジャバに別れを告げてから、海路平穩に、錫を産する事に於て世界に名高い蘭領バンカース島を右舷に望み、スマトラ島を左舷に眺めつゝ、十四日午前八時シンガポールに歸着した。此日、日本から歐洲に向ふ途上の箱崎丸も、シンガポールに入港したが、同船には朝香宮妃殿下の御一行並に石井駐佛大使、同夫人が便乗されてあつた。

それで、十五日早朝日本領事館を訪問して、浮田總領事に面會し、ジャバの松本總領事に對する紹介狀を與へられた事の謝意を述べ、轉じて、箱崎丸の船中に、石井大使を訪問し、「來るべき日佛通商條約の改正を機會として、佛領安南及びマダカスカルも、最惠國條項のうちに加へらるゝやう、御盡力あらん事を望む」と懇談した處、石井大使も同感を表せられ、「今回は是非とも成功させたい希望である」と答へられた。(因に、マダカスカルに對しては、コロンボ又はボンペーを仲繼にすれば日本の貿易上に大に見込がある)

日本人は安南を閉却して居る

元來、佛領安南は一般に對して、自由貿易同様に低率の海關稅を課すにも拘はらず、獨り日本のみに對して、禁止稅に等しき重稅を課して居るので、日本からの距離は近いのであるが、日本品は態々英領又は他の國に一旦輸入して、然る後、安南に再輸入するの途を諱するといふ現状である。爲めに、日本では廣大な國土を擁する佛領安南に對しての貿易が忘却されて居るのみならず、其國の所在がアジアなりや否や、將た其國が如何なる國柄

なるかを知らぬ者も多く、偶々日露戰爭に際して、バルチック艦隊が東航の途中、カムラ灣に碇泊した爲め、漸く同灣が佛領安南の一港灣なる事を知つた位である。

然るに、日本を除いた其他の各國の製品は、殆んど免稅の如き、極めて輕い輸入稅を課せられるに過ぎないから、安南に於ける各國の貿易は頗る盛んである。否、往年の日佛通商條約改正に當つて、佛國政府から安南の關稅に就ても提議されたけれど、我國では安南に對する研究が足りなかつた爲め、却つて佛國側の感情を害し、爾來、其儘に打ち過ぎて今日に至つた次第で、實に遺憾至極である。

勿論、佛國はルイ十四世以後、世界の各方面に領土を擴張し、歴世、特にナポレオン一世の如きは、極端な保護主義の貿易政策を執つたから、佛領はどうしても發展しなかつた。之に反して、英國は自由貿易主義を執つた爲め、其領地は盛んな發展を遂げたのであるが、現在の英國は徐々に保護主義を執りつゝあるのである。

依つて思ふ、日本の實業家、特に商業會議所は何事をなしつゝあるか? —— 旅行日誌は圖らずも脇道に入つて、貿易問題に囚はれてしまつた。併しながら、不肖は確く信する

のである、現在の日本は海外貿易を主眼として、諸種の點を研究しなければ益々輸入超過に陥つて、遂に經濟上の苦境を脱する事が出来なくなるであらうと。

故北白川宮殿下の靈柩を拜す

此日、更に歐洲から歸航の途に在る香取丸がシンガポールに入港した。同船には故北白川宮殿下の御尊骸が奉安されてあるので、不肖は日本人會長其他と共に參候して、謹んで靈柩を禮拜した。

そして、午後七時發の汽車で、シヤムに向つて出發した。

美麗なコーランポの市街

十六日午前六時半コーランポに着いて、ピナン行の汽車に乗換えた。

コーランポはマレー半島の中央部に位し、シンガポール及びピナンに次ぐ美麗な都會であつて、大正三年に訪問した時と比較すれば、實に目覺しい發展を遂げて居る。市區整然

として、商業地域と住宅地域を一定し、其他、衛生上の注意、公園、及び娯樂の設備等に至るまで、至れり盡せりで、日本人の如く、小理屈ばかりを並べたて、個人主義に依つて經營する市街とは、全く雲泥の相違である。——今更ながら、英國人の經營振りは誠に感服するの外はない。

支那人が何處迄もく

同日午後八時過ぎピナンに着いた處、驛頭には田中商店主及び朝日館主が出迎へられて種々歡待せられた。さて、翌る十七日の午前八時半ピナンを出發して、バンコックに向つた。

愈々汽車がシヤムの國境に到着すると、税關吏が一々旅客の旅行免狀と手荷物を検査したが、不肖は菓子見本の税金として、一チカル(シヤム貨の一チカルは、凡そ邦貨の八十錢である)を支拂つた。

因に、此國境に於ける兩替はどうするかといふに、例の支那人が停車場に出張して居

るのであつて、何處までも抜目のない彼等の遺口には、全く感心させられた。

汽車中に於ける見聞二三

以下、少しく汽車中の見聞を誌さう。

シヤムの汽車には食堂車がないので、總ての乗客は主要な停車場で食物を買ひ込むのである。そして、車内の座席に着いたまゝ、食事をする爲め、上げ下しの自由出来るテーブルが設けてあつて、其表面は硝子張りになつて居る。不肖は誤つて之を破損したので二チカル半を辨償させられたが、素直に之を支拂つた事が却つてシヤム人なる鐵道官吏に好感を興へて、それから何かにつけて、親切に便宜を圖つてくれたのは、望外の仕合せであつた。

不肖の乗つた汽車には、丁度、カトリック教の神父が同乗して居られたので、各驛に停車するごとに、シヤム人の信徒が群集して、最敬禮を捧げた。殊に、或る停車場では祭禮でも見るやうに、種々なる彩旗を樹て、且つ、煙花を打ち揚げなどして、非常に盛んな歡

迎振りであつた。それで、シヤムの如き佛教國で、天主教の勢力の偉大なる實際を目のあたりに見て、不肖は意外の感に打たれた。

やがて、バンコックに着くのも、一時間半後といふ頃、或る驛で（驛名を失念した）シヤム皇帝陛下の御弟にあたらせらるゝ陸軍參謀總長殿下が、不肖等の乗つて居る汽車に召された。聞けば、殿下には離宮に御避暑中なる皇帝陛下を御訪問になつての、御歸途であらせらるゝとの事であつた。

國として最も重んずべきは健全な國民性である

さて、此汽車中に於て、不肖に深刻なる印象を遺した事は、英國人がシヤム人を見る事恰も下等人種に接するが如くで、シヤムの法律及び官吏などは、殆んど眼中に置かざる點であつた。一例を挙げると、英國人は多數の手荷物や車中に持ち込んで、十人分位の座席を獨占し、車掌が之を整理すべく請求しても、更に應じないから、車掌も挺摺つてしまひ蔭に廻つて不肖等に向ひ、「英國人の横暴さには、何時も困らせられる」と訴へたが、其

窮狀は實に氣の毒に堪へなかつた。

蓋し、シヤムの鐵道は悉く英國の資本に依つて敷設されてある爲め、如何に英國人に威張られても、シヤム人はグーの音も出ないのである。勿論、今日のやうに、マレー半島からシヤムに直通する縱貫鐵道が完成して、多數の旅行者が至大なる便利を受け得られる事は、英國の賚である。猶、近き將來に於ては、ビルマからシヤムへ、シヤムから佛領安南へ通ずる鐵道を敷設すべき計劃があるといふが、これらも亦總て英國人の計劃に依るのである。

嗚呼、シヤムには皇帝あり、軍隊あり、賢明なる宰相、大臣あり。然れども、惜しいかな、健全なる國民がないのである！既に、健全なる國民がなければ、文明の施設は遂に他の資力に頼らねばならない。即ち、いはゆる債務國民となるより外はない。それ故、債權國民が來つて、横暴を極め、輕蔑を加へても、遂に之を如何ともする事が出来ないのである。——嗚呼、夙夜努めて怠るべからざるものは、健全なる國民性の養成である。

翻つて、現代日本の國民性はどうかといへば、果して、官僚萬能主義に囚はれては居

ないだらうか。其證據には、人爲の名譽のみを信仰し、或る種の營業に従事する輩の如き、少しく損失を招けば、直ちに政府に哀願して救済を求めるのであるが、斯くの如き事は、實に不健全なる國民性の標本である。凡そ何れの國たるを問はず、唾棄すべき名刺の奴隸を以て充滿する國家は殆いのである！

前にも述べた如く、不肖の乗つた汽車には、陸軍參謀總長殿下が召された爲め、各驛には金モール美々しき將校の指揮に依つて盛装した多數の兵士が堵列し、最敬禮を捧げたけれども、見よ、同乗せる英國人は平然として、殿下を友人扱ひにしつゝあるではないか。之を見、彼を思ふて、不肖は深き感慨に打たれざるを得なかつた。

即ち、重ねて言はん。「國として、最も重んずべきものは、健全なる國民性である」と。

九年振りのシヤムに入る

閑話休題、シンガポールからバンコックに行くには毎週火曜日の午後七時發、又ピナンからは毎週木曜日の午前八時半發の急行列車に乗ると、金曜日の夕刻に都合好く到着する

のである。

不肖等の汽車も、金曜日なる十八日の晩景に、メーコン川の手前のバンコック驛に到着し、三井物産會社支店の梶沼氏の出迎へを受けて、オリエンタル・ホテルに投宿したが、此ホテルは大正三年にも宿つた舊縁があるので、何となく居心地よく感じた。

十九日午前八時半三井物産會社の支店長山本氏が、梶沼氏と共に來訪せられた。此山本氏は、不肖が前回シヤムを訪問した時、シンガポールから同行した舊知の人なので、互ひに健康を祝し合つて、快談數刻に及んだ。殊に、同氏は若年ながら商業に熱心であり、又頭腦明晰で、事に當つて甚だ忠實であるが、かゝる有爲の人物が自ら陣頭に立つて活動されるからには、シヤムに於ける日本人の發展、期して待つべきである。

萬里の異域に於て、圖らずも山本氏と再會した不肖の喜びは、抑も何にか譬へん。不肖は僅かにシヤムの地を踏んだだけで、既に百萬の味方を得たやうな心地がしたのであつた。

シヤム皇帝陛下に七寶燒を献上

やがて、山本氏と同道して、日本公使館を訪問し、矢田公使に面會した。そして、シヤム皇帝陛下に献上せんが爲め、特に、不肖が日本から携へ來つた安藤製の七寶燒花瓶を差し出して、献上の手續を依頼した處、公使は喜んで不肖の希望を容れられ、後日適當の取計らひをなすべき事を約せられた。

(附記) 此七寶燒花瓶の献上に就ては、シヤム宮廷の都合に依つて、同年十二月十五日矢田公使からシヤム皇室附秘書官ダニ殿下に、傳獻の手續を取られた結果、幸ひにも御嘉納になつて、ダニ殿下から矢田公使を通じて、左の如く謝意を表せられたのである。

譯文

拜啓、本月十五日附、森永氏より七寶燒花瓶を皇帝陛下に献上方御申出相成候貴翰、正に拜誦仕り候、爰に御返辭申上候。

陛下には、該花瓶の技術最も精巧にして美麗なる事を御賞讃あり、喜んで御嘉納相成候。同時に、貴下を通じて、森永氏に謝意を表すべく、御下命に接し候間、可然

御傳達被下度候。

爰に貴下の勞を煩はし候事に就て、深く御禮申上候。敬白。

十二月十八日

プリンス・ダニ

矢田公使閣下

それより三井物産會社支店の二宮氏の案内で、市中の商店を歴訪し、午後は郊外の名刹、其他の名所舊蹟を遊覽したが、二宮氏はシヤム語に熟達されて居る爲め、非常に便宜を受けた。

支那料理……饗應の原理

此夜は山本氏の好意で、支那料理の饗應を受けたが、隣席に支那人の客があつて、例のピー／＼グワン／＼ヂヤン／＼ガラ／＼ガチャ／＼といふ支那音楽に耳をつんざかれて、折角の御馳走も、甚だ残念ながら唯々口の中へ運び込むだけで、お互ひに何の話も交換する事が出来なかつた。

こゝに、斷つておかねばならぬ事は、如何に支那音楽が殺風景だからとて、ガラ／＼ガチャ／＼と鳴るものはあるまいと、お疑ひになる人もあらうが、……實は、不肖も此騒々しい音律には不思議を感じて、そつと覗いて見ると、丁度、易者が使用する筮竹の如き竹の棒を澤山手に攫んで、合間々にテーブルの上に投げ付ける、其音であつた。聞けば、之は博徒の親分が大盡遊びをする場合の、花々しい景況を示し、いはゆる客呼びの景氣付けに用ひられるのであつて、こんな事にも支那人一流の廣告法が窺はれる譯で、不肖等は頗る異様な感じに打たれたが、考へて見ると、日本でも、料理屋は入口に澤山な下駄を並べ立て、客寄せをする習慣があるから、それと同じ意味に歸着するのである。

兎に角、隣席の大景氣の爲め、不肖等は目ばかりパチクリさせて、箸を取るのみであつた。依つて、つらく思へらく、食事中に談話を交換する事は、料理に一種の美味と感興を添へる譯であつて、之が眞の饗應であると。こは、饗應の原理に就て圖らずも痛切に感得した不肖の新発見である。

バンコックに於ける見聞

二十日は日曜日である爲め、二宮氏の案内に依つて、市中及び郊外を視察した。

其途上で、支那人の經營する製材工場を參觀したが、折よく工場主が在宅であつたから面會して、種々の意見を聴く事が出来た。そして、侍從武官長に献呈する爲めに造られた紫檀製の美事な西洋家具を見たが、之が報償として、チーク林、黒檀林、紫檀林などの拂ひ下げを受けるのださうで、日本では容易に見る事が出来ない程の、實に立派な珍品であつた。

又市中を巡覽するうちに、不圖感じた事はシヤム婦人の風俗である。不肖は大正三年に此地を訪問した際、到着後數日間はシヤム人の男女を見分ける事に困難した。そは、シヤム婦人が男子と同様に、頭髮を短く刈つて居るからであつて、程経た後、乳房の上まで布片を被ふて居るのが婦人であると鑑別し得るに至つた。併し、今回は二度目の訪問である

から、最早や異様の感を起こさなかつたけれども、矢張り婦人は頭髮を長く延ばすを以て古來、世界的の風習と見るべきであらう。見よ、聖書にも女は髪を長くすべきものと誌されてある、勿論、今日ではシヤムに於ても上流の婦人は大分散髪せぬやうになつて居るがこは、漸次現代の文化に觸れつゝある證據であらう。(尤も、未婚の女子は概して散髪せず、髪を組んで居るやうである)

支那人はシヤム人として取扱はる

こゝに、最も注目すべき事は、シヤムに於ても、ジャバに於ても、ビルマに於ても、マレー半島に於ても、恐らく、ヒリツピン、或ひは佛領安南に於ても、これらの各國に在住する支那人は、殆んど其國の土人を妻として居る點である。

殊に、シヤムに於ては、國境に入り來る支那人を其日からシヤムの國籍に編入するので彼等は立派にシヤム人と成り澄し、シヤム國法の下に、シヤム婦人を妻として、生活を営みつゝあるのである。——故に、バンコックに於けるあらゆる事業は、支那人系統に依つ

て經營せらるゝに至つた。

試みにシヤムに在住する支那人を捉へて、「汝は何國人なるか」と問へば、彼等は言下に「シヤム國籍に在るシヤム人である」と答へるのである。そして、彼等は又「シヤム人であるが故に、日貨排斥をしない」と聲明するのである。

聞く處に依れば、曾て支那政府はシヤムに領事館を設置せんと希望を有したが、前記の事由に基いて、シヤム政府より其必要を認めないと拒絶したそうである。即ち、支那人のシヤム入國に對しては、絶対に旅行免狀を受ける必要がないのである。否、唯にシヤムのみならず、南洋諸國に對しても、恐らく、其必要がないのであらう。支那の如き無政府状態の國柄も、亦一得ありといふべきか。

謙和興を訪ふ

二十一日早朝支那人系の巨商謙和興商店を訪問したが、九年前の若主人も、今は立派な中老となつて居られた。互ひに久澗を叙した後、取引上に就て懇談した結果、今後シヤム

に於ける我社製品の販路擴張に就て、一層努力すべき事を約せられた。そして、我社のウエファアースを試食するや、膝を打つて、「これは、歐米の製品を凌駕する優秀品である」と激賞し、價格の如何をも問はず、出來得る限り多量に送荷するやう、其場で直ちに注文せられた。不肖の得意、想ふべしである。——然り、不肖も信ず、我社のウエファアースは世界一なりと。

かくて、全市を視察し終つた結果、市街電車に我社製品の屋上廣告をする事に決定し之が交渉と契約を三井物産會社支店に依頼した。(因に、此バンコックの電車ばかりでなく、南洋、印度に於ける各地の電車は、屋上に幅一尺位で長さ車體と同尺(二十尺から三十尺)までの廣告を掲げて居るのである)

矢田公使の午餐會

矢田公使は近來非常に多忙であり、不肖の滞在も亦短時間である爲め、此日特に午餐會を催され、公使、同夫人、令嬢と共に、不肖及び森君もテーブルを圍んで、種々の有益な

る談話を交換した。

公使曰く、「日本對シヤムの條約改正に就ては、是非とも對等の條約にしなければならぬ。否らざれば、日本の爲めにも、シヤムに於ける治外法權は却つて不利益である」と。蓋し、英、米、佛は日本に先んじて、シヤムと對等の條約を締結した爲め、シヤムの上下は日本に對して好感を持たぬ傾向があるのみならず、治外法權が存續して居る爲め、マレー半島から無頼の日本人がシヤムに流れ込んで、博奕場の名義人になり、又は見張人に雇はれ、種々の悪事を働いたので、其都度シヤム政府から日本公使、領事に對して抗議を持ち込んで来る始末で、結局領事裁判に依つて處罰し、何時も、領事館の監獄には日本人の入監者が絶えないのである。

兎に角、治外法權の存續に依つて、無頼の日本人がシヤムに入り込み、悪事を働く結果として、善良なる日本人にまで悪影響を及ぼす事は、實に慨歎に堪へない。併しながら、日本對シヤムの對等條約も近く實現すべき機運に在るそうだが、不肖は其實現の一日も速かならん事を切望する次第である。

日本の國寶なる宮川氏

此夜は大山商店主宮川氏の自邸に於ける晚餐會に招かれ、不肖を主賓として、山本氏、同夫人も列席せられた。

宮川氏はシヤム語學者であつて、現にシヤム字日刊新聞を發行され、バンコックの言論界に於て、一大勢力を有して居られるが、他より聞いた處に依ると、同氏は往年シヤム寺院に於て、或る大學者なる高僧の弟子になつて、研究を積まれたのであるといふ。實際、宮川氏の如きは、日本の國寶とすべきシヤム語の博士であつて、日本政府に於ても、斯くの如き人物には功勞章を下賜せらるべき價値ありと信ずる。

猶、大山商店は支配人大谷氏に依つて經營されつゝあるが、此大谷氏も亦人格者として認められて居る。元來、大山商店は我社の特約店であつたが、英國官憲より或る事情の爲め一時取引中止を據ろなくされ、我社の取引は謙和興商店に遷したけれど、交通や其他の不便があるので、現在は三井物産會社支店を煩はして居る。而も、宮川、大谷の兩氏は之

を意に介せず、不肖を招いて優遇されたばかりでなく、間接に、取引上に就て好意を寄せられる事は、眞に感謝に堪へざる處である。不肖は大山商店の上に祝福加はり、前途益々繁榮あらん事を切望して止まないと共に、宮川氏より贈られた平和釋迦如來の黄金佛は、終生の記念佛として、常に同氏の高誼を偲ぶであらう。

そして、不肖は信ず。宮川氏の經營せらるるシヤム字日刊新聞は、後世、山田長政と並べ稱へて、シヤムに於ける日本人の發展史上に精彩を發揮すべきを。

日本人の植民にはシヤムが第一

不肖は今回の旅行に依つて、商業の開拓は差し當りジャバを第一とし、植民事業にはシヤムを第一とすべき事を感じた。

何となれば、シヤムは佛教國で、殊に、同人種なるのみならず、土地廣大、いはゆる沃野千里に連つて、他より人の來つて投資し、開拓するを待つて居る有様で、紫檀、黒檀及びチークの大森林を初め、金、銀、其他の礦物も豊富で、天與の寶庫は實に無限である。

故に、同宗教、同人種の日本人が此地に來つて投資し、忠良なシヤム人となつて、シヤム國を愛し、此寶庫を開拓すれば、シヤム人も亦喜んで無盡藏の天恵を日本人に分配するに相違ない。

不肖は汽車中に於て、シヤムの山野を展望しつゝ、此感を深くしたのであるが、更に、矢田公使の談を聽いて、益々シヤムの天地が日本人の投資、開拓に適して居る事を確信したのである。

矢田公使の談に依れば、曾て現皇帝陛下の伯父なる皇族が所有せらるる面積八十哩四方のチーク林を、一英國人が買収すべき契約を結んで、着々鐵道を敷設せるにも拘はらず、代償金を支拂はぬので、チーク林取戻しの請求をすると、却つて英國人から鐵道敷設費と稱して百五十萬圓を請求して來た。それで、皇族は此際二百萬圓で該チーク林を賣却する希望を以て、矢田公使を介し、日本人の投資を求められたが、遺憾ながら之に應ずる者になかつた爲め、遂にデンマークの資本家に譲り渡されてしまつた。其チーク林たるや、現に鬱々として繁茂した密林であるのみならず、伐採後は容易に開墾して、立派な水田とな

し得るので、日本の農民を移植せしめるには、最も好適な土地であつたとの事である。
 日本國民よ、徒らに豆粒大の島國に膠着して、寸分の土地を相争ふよりは、進んで天恵多き此廣大なシヤムに來り、其運命を開拓せよ。此世界は人類の共有物として、善意を以て支配し生活するやう、全能の神は此世界に人類を置きたまふ。——行け、同胞！ 全世界の隅々までも。そして、日章旗を愛する國民よ、全世界に日章旗を樹てよ。空しく日本の國內に籠居して、同胞相手の小成に満足する勿れ。

在留諸氏の好意を感謝す

二十二日午前七時パンコツクを出發して、ビナンに引返した。

シヤムを去るに臨んで、三井物産會社支店の山本氏を初めとして、全社員諸氏が満腔の好意を以て、不肖を迎へられた事を感謝す。又大山商店主宮川氏、同夫人、並に同店支配人大谷氏の優遇を感謝す。更に、矢田公使、同夫人を初めとして、領事館員諸氏、其他在留同胞諸氏の歡待を賜つた事を感謝す。

排日の本場イツポーに乗込む

二十三日午後五時半ビナンに着いた。之でビナンは四度目である。

二十四日はビナンに滞在して、販路擴張に付き種々劃策した。會て此地には日本人の商店が十七軒あつたのだが、打ち續くボイコツトの爲め、次第々々に没落して、今は僅かに四軒を残すだけになつた。——嗚呼、日本人は海外に向つて發展し得ない國民か！

二十五日午前八時半田中商店主と同道で、ビナンを出發し、午後一時半イツポーに着いて、日本人の經營する矮少な旅館に投宿した。こは、成べく日本人に對して財を投じたいとのお婆心から、故らに、日本人經營の旅館を選んだ次第である。そして、森君をして田中氏、及び此地に在留する矢野氏と共に、支那人商店を歴訪させたが、元より相手になる者もなかつた。

此イツポーは南方支那革命派なる霹靂團の本部の在る所で、マレー半島に於ける日貨排斥の策源地となつて居るのである。

支那人が跋扈するマレー半島

元來、マレー半島は英領同様であつて、實際には小獨立國が存立して居るけれども、それは、唯名儀ばかりで、何れも英國の保護の下に在るから、英領と見なす方が至當であり、且つ、事實に於ても、英國の保護を受けずには、到底發展する事が出来ない状態に在るのだ。

然るに、農業、鑛業、林業、工業は勿論、鐵道の驛長や驛員より、食堂の經營者、さては最下級の勞働に至るまで、殆んど支那人に依つて經營せられ、僅かに土木工事に従ふ人夫だけが、キリン種と稱する黒人種の印度人で満たされて居る。それ故、マレー半島も亦支那人のマレー半島といふても、何等差支へがないのである。

斯くの如く、實勢力を有する支那人が、一たび日貨排斥を行ふ場合は、如何なる方法を講ずるとも、到底之を防止するの途がない。蓋し、マレー半島は英領と英國保護の王國が錯綜點在する爲め、支那人の實勢力は、支那本國に於けるよりも、より以上である。何とな

れば、彼等は本國に住む者よりも、遙かに大なる富を有し、而も、英國の法律の下に保護せらるゝからである。加之、マレー半島は支那人の政治的無頼漢の巢窟であつて、ピナン、イツポー、コーランボの各都會地に跳梁跋扈し、不肖はそれらの各地で、日貨及び日人の排斥が極點に達し居る實況を目撃し、衷心、憤慨に堪へないのである。

日貨排斥の最大原因

蓋し、支那人の排日運動は、佛者のいはゆる外道であるかの如く見做す類である。其原因は彼の二十一個條問題であるけれど、一面には、日貨排斥を繼續すれば、彼等の國貨提供、即ち支那の國產獎勵になるので、之に依つて、奇利を博するといふ觀念が、日貨排斥の最大原因となつて居る。

いふまでもなく、マレー人、シャム人、ビルマ人、ジャバ人等は實業上の智識に之しいから、少しも問題にならないが、日本人は萬事に優越な能力を持つて居るので、二葉のうちに取り取つておかねば、將來、恐るべき競争者となるに相違ないとの考へこそ、支那人

が日貨及び日人を排斥する第一の原因なのである。此事實は、マレー半島に於て、特に目立つて見へる。

そして、世界の大部分を知らぬ大多數の支那人の中で、日本又は歐米に留學した事のある半可通の、政治的無賴漢や學校教員等が、少しばかりの新智識を有する事を鼻にかけて、二十一個條問題を振り廻し、父兄の信用を買はんとする名譽心から、排日を鼓吹する事も亦動機の一つとなつて居る。

更に、日本でいふ國粹會員の如き博徒輩は、日貨排斥の聲に隠れて、日貨を商ふ店を襲ひ、難題を浴びせかけて、幾手かの内済金を捲き上げ、料亭に上つて散財するのを例として居る。故に、日貨排斥の盛んな時は、支那料亭が非常に好景氣であるといふ。それで、無賴漢の輩は日貨排斥を營業の如く心得て、排日運動の永續せん事を心から祈つて居るのである。

されど我々は進まねばならぬ

兎に角、東洋から南洋諸國にわたつて、大なる勢力を有する支那人より排斥される時は獨り日本のみでなく、歐米の各國も亦閉口せざるを得ないのである。見よ、支那人は、英領に於てさへも、英貨排斥を行ふ事があり、蘭領に於てさへも、蘭人に對してポイコツトを行ふ事がある。況んや、他の領土内に於て、日貨排斥を行ふ事は、彼等として朝飯前一茶番に過ぎないのである。

而も、彼等は日貨排斥と同時に日本人を排斥し、日本人に對しては、米穀、野菜より日常雜貨に至るまでも賣つてくれない爲め、在外の同胞は唯其日々々の生命を繋ぐ事に汲々たる有様で、實に痛々しい感じに打たれざるを得ぬのである。

不肖は此日貨排斥の高潮せる渦中に於て、ビナン、イツポー、コーランボ、シンガポールの各地に、販路を擴張せんとするのである。其苦心慘愴は切に内地同胞の考察を煩はす次第である。——然れども、我々は進むべき途に向つて進まねばならぬ！ 否、進むより外に途はないのである！

皇弟殿下森永ピースを激賞せらる

二十六日午前七時半イッポを出發して、午後二時コーランボに着いた。そして、例の如く市中の商店を訪問したが、多少の注文を得て、午後八時發の夜汽車で、シンガポールに向つた。驛頭には田中氏、矢野氏、山口氏等が見送られた。

コーランボ州は英國の保護領に屬して居るが、其ラジャヤ（王の意）の令弟なる總理大臣殿下が、不肖の隣室の寢臺車に乗り合された。（因に、英國政府はこれらの貴族に對して、汽車、汽船等にはフリーの待遇をして居る）依つて、不肖は直ちに刺を通じて、森永ピースを進呈した處、非常に喜ばれて、翌二十七日の朝、不肖に向つて、「昨夜頂戴した森永ピースは實に好い菓子である。食堂で知人に分配すると、一同も激賞して居つた。若し、持ち合せの品があれば、買ひ受けたい」との事であつた。併し、生憎にも最早や持ち合せがなかつたので、不肖は甚だ遺憾に思つたが、殿下には特に残念がつて居られた。

斯く、ラジャヤの令弟より賞讃を得た事は、森永ピースの前途に對して、燦々たる光明

を認めた譯であつて、不肖は非常に愉快を感じたのである。勿論支那人に依つてボイコットを行はれつゝある暗澹たる渦中に於ての故に……。

さて、二十七日朝ジョホールに着し、それより渡船で、午前八時半シンガポールに歸着した。

勤勉なる支那人

マレー半島の汽車旅行で、不肖の感じた點をいふと、第一に驚くべき事は、世界に冠たる一望鬱々として繁茂するゴム樹林で、次には、之も世界に冠たる錫鑛である。

ゴム事業は英國人の經營を主として、支那人、歐米人、日本人等の投資に依つて行はれて居るけれども、實際にゴム液を採集する著者は、大多數が支那人で、其次は印度人なのである。假令、日本人の經營するゴム園にしても、矢張り、勞働者には支那人を使役して居る。それで、試みに或る人に向つて、何故に日本人を移住させて使役せぬかと尋ねると、日本人は給料が高くて、而も、不柔順だから使ひ難いとの答へであつた。日本人たるもの

宜しく猛省すべきである。

若しそれ、錫鑛に至つては支那人の獨擅場であつて、英國人經營のものも、其採掘、選鑛等の實際作業は、一切が支那人の手で行はれつゝある。

支那人の本國は四分五裂して、恰も無政府國の如き状態になつて居るにも拘はらず、彼等は如何なる外國に於ても、不屈不撓、以て成功しつゝあるのだ。こは、日本人の大に學ぶべき點でなからうか。一面から見ると、彼等は本國に在るよりも、外國に出て、勤儉産を興す方が安全だからであらう。即ち、彼等は背景として何等の恃むべきものがない爲め一び本國を去れば、其地を永住の地と覺悟して、熱心に其業務に従ふのである。他面に於ては、各國の官憲も、支那人が如何に發展しても、領土を蠶食される如き不安を感じる必要がないので、自由に彼等の發展するがまゝに放任するのである。一例をいへば、シヤムの如き、支那人の入國には旅行免狀も不必要なのである。

そして、不肖が支那人の勤勉にして忍耐力に富んで居る事を痛感したのは、錫鑛を採掘した荒跡、又はアラン／＼（茅の一種なる害草である）が繁茂した荒蕪地を、彼等が根氣

よくセツセと開墾しつゝあるを汽車中より眺めた時、我知らず「勤勉なる支那人よ」と心から賞歎の辭を發したのであつた。

日本人は背景に頼り過ぎる

憶ひ起こす、「働くべきものゝ價は安くべきものなり」とは聖書の一句である。又思ふ安息日の問答に就て、サドカイ宗、パリサイ宗の祭司たる長袖輩に對して、キリストは答へて曰く、「神は世の創めより今に至りて働きたまふ」と。——然り、使徒パウロ曰く、「働かざるものは食する勿れ」と。されば、我々も世に在る間は働かねばならないのである！

然るに、日本人は何故に働かないのであるか。既に志を立て、海外に渡航してさへも日本人は働かないのである。故に、勤勉、努力、忍耐の精神に於て、コンマ以下である。これは種々の原因もあらうが、先づ第一の原因は日本といふ背景が餘りに濃厚過ぎる事である。

試みに思へ。封建時代に於て、否、更に遡つて、應仁以後の戦亂時代に於て、日本の内地で戦ひに敗れた人々は、航海術の幼稚をも恐れずして、木の葉の如き小帆船に乗つて海外に逃れ、そこに、新しい根拠を築き上げたではないか。こは、いふまでもなく、彼等は再び祖國に歸る事の出来ない境遇に在つたから、即ち、日本に濃厚な背景を持たなかつた爲めである。

若し、日本人が(甚だ不吉な事をいふやうであるが)萬々一にも今日の支那人の如き境遇に在りとすれば、一び海外に出た者は、最早や日本内地に歸るの念を斷つて、忍耐、勤勉、以て其根拠を新に築くであらう。こゝに於て、百尺竿頭、一步を進めて、帝國の爲め人道の爲め、不肖は日本人が海外に向つて大に發展せん事を希望して止まないものである。

日支親善を徹底せよ

又思ふ。――

南洋諸國の何國たるを問はず、人口の點に於ても、商工業の上にも、其他百般の事

に於ても、支那人が着々として其實權を占めて居る事は、眞に恐るべき問題である。故に日本政府も成べく譲るだけは譲つて、眞個に日支親善の大策を講ぜなければ、海外に踏み出す日本人は、支那人といふ實權者の爲め妨害せられて、成功を贏ち得る事困難であらう。そは、既に述べた如く、マレー半島に於ける各驛の驛長までが支那人であるといふ一事を見ても、思ひ半に過ぐるものがあるのである。猶、彼のビナンの如きも、全市十萬の人口の中、九萬人は支那人であつて、英、米、佛、蘭の各國人等も、支那人の爲め高給を受け、彼等の生命、財産を保護するといふ觀があるのである。

七千萬の同胞よ。極東の島國にのみ踞踏せず、支那人同様に、海外に發展し、着々として成切を收めては如何。此點に於て、不肖は特に青年諸君に對して、大に奮起されん事を希望して止まぬのである。

富豪の別荘をシンガポールに設けられん事を望む

更に、大正三年此地に來た時も、同様の感じを懷いたのであるが、不肖は日本の富豪連

に向つて、勧告したい事がある。

日本の富豪連は、兎角狭苦しい日本の内地に別荘などを設けて、避寒するといふ風であるが、寧ろ一步進んで、マレー半島にでも別荘を持つては如何であらうか。此地なれば、種々の珍奇な熱帯植物も、特別に温室を建てないでも栽培する事が出来、衛生上の設備も日本内地よりは能く行届いて居るのであるから、同じ避寒をするならば、此地に来るのが最も有意義であらうと思ふ。

彼の日本の娘子軍が海外に發展する事は、實際に於て、其責任は富豪連に在るのである。何となれば、日本の富豪連にして、自ら海外に投資し、發展する者は稀れである爲め、これらの娘子軍が日本人の露拂ひになつて海外に發展し、其後から無資本の男子がついて行くといふ順序になつて居るのである。それ故、此弊風を改めんと欲すれば、須らく日本の富豪連が奮起して、國民の先頭に立つて、海外に投資、發展する事を要すと信するのである。

日本人小學校の參觀及び感想

さて、シンガポールにも、之で五回立ち寄つた譯で、浮田總領事、同夫人を初めとして三井物産會社支店長大久保氏、三菱商會社の支店長服部氏、其他在留同胞諸氏に種々優遇を受けたから、謝意を表する爲め、ラツフェル・ホテルに招待したいとも考へたけれどこれらの紳士諸氏は連日各方面の歡迎送にも忙のやう見受けられ、殊に、不肖も短時日の滞在で寸暇すらないのみならず、一夕の會食に數百金を投ずるよりもと、種々思案した結果、此地の日本人小學校に、其金を寄附する方が得策ならんと考へ付き、浮田總領事に高教を請ふた處、總領事も『それは、至極結構である』と、双手を擧げて賛成せられたので早速日本人會長なる大久保氏に、寄附金を提出したが、同氏も大に謝意を表せられて、不肖を日本人小學校に案内せられた。

當日は校長が風邪の爲め休んで居られたので、他の教員が代つて、懇切に各教室を案内せられたが、丁度、或る教室では英國婦人に依つて、英語が教授されつゝあつた。そこで

大久保氏が全生徒に向つて、「英語でヒー、イズ、イーツ、ゼ、バナ、といふ事は、日本語で何といひますか。わかつて居る者は手を挙げなさい」と試験された處、四五十名の生徒は、一人として手を挙げる者がなかつた。依つて、大久保氏は再び前の言葉を繰り返して、催促されたが、漸く一人の生徒が手を挙げたので、其答へを質されると、「マカン、ピーサン」といふて退けた。(此マカン、ピーサンといふのはマレー語で「バナ、を食べる」といふ意味である) 此時、大久保氏は不肖を顧みて、「森永さん。之だから誠に困ります。彼等は平生マレー語ばかり話して居りますから、日本語は心の中でわかつて居つても、口に出して話す事が出来ないのです」と歎息せられたが、それに對する不肖の挨拶は斯うであつた。――

「イヤ、之は非常に結構な事です。外國の事情を知らないで、日本語を話す日本人は、日本内地に充滿して居ります。併し、今日の日本に於て最も必要な事は、海外の事情に精通し、外國語を自由に話し得る日本人を多くする事でありませう。幸ひにも此シンガポールで生まれた日本の子供は、生まれながらにして、日本語と、英語と、マレー語と、三國の

言葉を話し得る譯で、日本人の海外發展に大なる貢獻をする事と思ひます。何卒、今後一層此學校の發達に就て御盡力下さるやう御願ひ致します」と。
こゝに、重ねて、シンガポールに於ける日本兒童の健全に成長せん事を、衷心より希望す。

シンガポールの交歓

二十八日は三菱商會支店長服部氏に招かれて、ラツフェル・ホテルで午餐の饗應を受けた。(因に、同支店庶務課勤務の武富氏は佐賀縣伊萬里の出身で、令兄は我社に勤務するが、不肖のシンガポール滞在中、種々勞を取られた事を感謝す)

そして、夜はラツフェル・ホテルで、浮田總領事の主催なる新任日本駐在和蘭公使バブスト氏歓迎の晚餐會を催され、此地駐在の和蘭領事、其他在留日本人の重立ちたる人々を招待せられたが、不肖も亦寵招を蒙つた。

二十九日は三井物産會社支店の好意で、自動車を驅つて、郊外のゴム園を散策した。こ